

令和
4年度

ふくしの
だんのくらしの
あわせ

作文

ポスター

応募作品

令和4年度、ふくしの作品集に応募いただいた学生の皆様、
ありがとうございました！惜しくも入選に至らなかった作
文をこちらに掲載いたします。是非ご覧ください。

学校名	氏名	頁	氏名	頁
角野中学校	白石 彩乃	4 p	神野 紗輝	4 p
	木村 僚汰	5 p	松浦 成美	6 p
	村尾 琴羽	7 p		
大生院中学校	近藤 洸生	8 p	藤原 柚希	8 p
	直野 蒼志	9 p	田坂 陽翔	9 p
	菅 汐璃	10 p	神野 由珠	11 p
	永市 純也	11 p	秦 愛依	12 p
船木中学校	伊井 愛希穂	13 p	近藤 青葉	14 p
	近藤 若葉	14 p		
商業高等学校	三浦 大和	15 p		
東高等学校	青野 暖	16 p	石井 ひまり	17 p
	一色 杏	18 p	一色 真緒	18 p
	岩崎 迅	19 p	馬木 美紅	20 p
	梅本 弥來	21 p	大西 健豊	21 p

東高等学校	氏名	頁	氏名	頁
	岡田 蒼空	2 2 p	越智 玲奈	2 3 p
	神山 汐奈	2 3 p	亀井 晁優	2 4 p
	合田 翔太	2 5 p	酒井 飛日希	2 5 p
	須藤 佑理	2 6 p	高辻 佳乃羽	2 7 p
	高橋 甘奈	2 8 p	高橋 匠馬	2 8 p
	高宮 暁葉	2 9 p	武内 大知	3 0 p
	手島 凜奈	3 1 p	寺尾 朋華	3 1 p
	西岡 恋桜	3 2 p	服部 朱里	3 3 p
	平岡 大河	3 4 p	藤原 弘麒	3 4 p
	保利 夢斗	3 5 p	眞鍋 心羽	3 6 p
	眞鍋 凜	3 7 p	眞鍋 月音	3 7 p
	持主 膳	3 8 p	矢野 隼士	3 9 p
	山内 大輝	4 0 p	山中 咲嬉	4 0 p
	山本 哲在	4 1 p	伊藤 和	4 2 p
	梅田 拓翔	4 2 p	大塚 一颯	4 3 p
	大西 恒輝	4 4 p	岡崎 姫奈	4 4 p
	岡田 陽菜	4 5 p	加藤 雅楽	4 6 p
	加藤 結衣	4 7 p	黒川 真太	4 7 p
	小松 瑠奈	4 8 p	薦田 アリサ	4 9 p
	菰田 涼	4 9 p	近藤 海南	5 0 p
下地 輝	5 1 p	下城 七桜	5 1 p	
白石 涉桜	5 2 p	白石 理雄	5 3 p	
高岡 春菜	5 3 p	田村 将大	5 4 p	
近田 麻友	5 5 p	中条 美優	5 6 p	
坪倉 葵	5 6 p	寺田 早良	5 7 p	
戸田 陽菜	5 8 p	長野 菜々海	5 9 p	
西森 涼	5 9 p	野間 隆之助	6 0 p	
林田 咲希	6 1 p	笛 優太	6 2 p	

東高等学校	氏名	頁	氏名	頁
	本田 倭土	62 p	松本 勇樹	63 p
	眞鍋 結愛	64 p	山口 結愛	65 p
	山中 杏湊	65 p	秋月 一翔	66 p
	安部 美来	67 p	大西 苺夏	67 p
	小野 菜姫	68 p	甲藤 ななみ	69 p
	亀井 優衣	70 p	合田 若菜	70 p
	近藤 緋音	71 p	近藤 温人	72 p
	佐々木 歩乃佳	72 p	佐藤 真央	73 p
	白石 花	74 p	白石 悠晟	74 p
	神野 陸人	75 p	仙波 莉緒	76 p
	高橋 幸志	76 p	高橋 陽真理	77 p
	高橋 美生	78 p	高橋 龍二郎	79 p
	谷野宮 壮志	79 p	得能 康平	80 p
	徳丸 優太	81 p	波多 夢月	81 p
	藤井 愛実	82 p	藤田 優愛	83 p
	松岡 桃	84 p	松木 優芽	84 p
	森 柊人	85 p	森賀 來寿	86 p
	守谷 咲愛	87 p	横田 永遠	88 p
	渡部 成斗	88 p		

「福祉」から学ぶ』

角野中学校 3年 白石 彩乃

「福祉」にかかわる仕事は世の中にたくさんあります。「福祉」とは、「幸せ」や「ゆたかさ」を意味する言葉であり、全ての市民に最低限の幸福と社会的援助を提供するという理念を表しています。

私の祖父は、80歳を迎える手前ぐらいに介護施設に入所しました。そこでは看護師さんの方々たちが生活を補助したりしてくれます。私の祖父は認知症でした。入所当時は自分でできていたこともしだいにできなくなっていきました。その介護施設は認知症の方たちが入院しているところです。看護師さんがお薬を持ってきて祖父に飲ませてくれました。祖父はお薬を嫌がってしまい中々飲んでくれないときもありました。けれど看護師さんは待ってくれました。中々飲んでくなくても何かを言われても。介護をしてくれている看護師さんからするとこのようなことも日常茶飯事なのかもしれません。ですが、その看護師さんの姿を見た私は本当にすごいなと思いました。それと同時に人のために働く仕事というのはとてもやりがいがあるに違いないと思いました。

私はそのようなこともあってからか他の色々な医療の仕事にも影響され人の役に立つ仕事に就きたいと思うようになりました。人に頼りにされたり、笑顔にできるような人にもなりたいと思いました。

あの時看護師さんが笑顔で祖父に接してくれた時は私も自然と笑っていたような気がします。

「福祉」というものについて考える機会はなかなかなかったけれど、自分の将来や自分の経験を通して福祉について考えることができました。なりたい自分になるために積極的に色々な人と交流したり、困った人を助けたり、日頃の生活から周りの事も気にかけて生活していこうと思います。あの時の光景を大人になってもずっと心に刻んでおきたいです。

福祉と生活と平和」

角野中学校 3年 神野 紗輝

みなさんはパラリンピックという言葉を知っていますか。パラリンピックとはIPCが主催する身体障がい者を対象とした世界最高峰の障がい者スポーツの総合競技大会です。私はこの言葉を知ったとき、その選手に合わせた道具を使うことで、オリンピックには無いパラリンピックだけの魅力があり凄いと思いました。

しかし、残念ながら世界にはまだまだたくさんの差別が残っています。そのひとつ障がい者差別を解決するには福祉の力が必要不可欠だと私は考えました。福祉とは、最低限の生活・社会的援助を提供する理念を指します。その福祉と言ってもたくさんの種類があります。

例えば仕事という面では保育士や介護福祉士など様々な仕事があります。このように

子どもからご年配の方まで幅広く援助しますが、どの仕事にも共通して言えるのは、人の助けになる仕事ということです。しかし、必要不可欠な福祉の力も問題を抱えています。

障がい者差別を解決するためにもこの問題はどのようにしていくことが大切なのでしょうか。

まず、解決のためには人材を増やすことが一番効果的です。しかし、この方法は実現が非常に難しいのです。なので、私達1人1人が協力し意識を変えていくのが大切です。例えば施設だけに任せるのではなく時間に余裕があればできる部分は協力するなどしていくことが解決への第一歩になります。とはいっても1人では難しい部分もあると思います。そのようなときは、身近な人や同じように意識を変えようとしている人と始めてみてはどうでしょうか。そうすることにより要介護者との繋がりは勿論、身近な人や同じように意識を変えようとしている人との繋がりももつことができます。

私は障がい者差別や福祉の問題だけではなく世界に残っているすべての問題の解決には人のつながりが欠かせないと考えています。ですが、人といくら繋がったからといってもどのような意識に変えていけばよいのか迷う人も居ると思います。そのような人は共生意識を持ってみてはいかがでしょうか。共生意識とは様々な違いを有する人々がそれぞれの文化やアイデンティティの多元性を互いに認め合い対等な関係を築きながら共に生きる概念を指します。

福祉の場合世代という多元性を認め合い障がい者差別では障がいという多元性を認め合うということになります。お互いを認め合うことは平和への第一歩です。宗教や人種など様々な問題が残っている世界、福祉で平和に貢献できるのなら最高ではないでしょうか。

「貢献すること」

角野中学校 3年 木村 僚汰

僕は今まで、あいさつ、ボランティア活動などはいっさいしてきませんでした。前まではしたとしても、意味がないと思い、自分からやろうとはいっさい思いませんでした。小学生の時なんかは「福祉」なんて言葉も知らなかったしあいさつの返事なんかされても返さなかったりと、する気にもなりませんでした。

そして中学生になって、そこで1回だけ地域でのボランティア活動をしました。その時自分は、嫌嫌やっていました。初めてやったので、けっこうしんどかったけれど終わったらけっこう思った以上にスッキリして少しやってみて良かったと思いました。それからというもの地域の人とかに返事とかしたりするようになりました。それに前までは気にしてなかった、障がいのある人などに少し目を向けるようになりました。昔はまったく思ったり、感じたりもしなかった障がいの人の介護は、今思うと自分が行ったボランティア活動よりももっときついならうと思いました。そう考えると、あいさつ、ボランティアなどは誰でもできるんだと思いました。そして身近でできるあいさつを誰に

たいしてもできるようになりました。今でもあいさつを続けてしていると、返事を返してもらえなかったりする事は何度もあるけど、返してくれた時などは、何か良い気持ちになるので、返事は自分から進んでしていったほうが良いんだと学びました。最近では地域でボランティア活動などで貢献したりすることはなくなったけど、朝とかは朝早くそうじとかしている人がけっこういてとてもすごいと思いました。小学生の時なんて「福祉」という言葉さえ知らなかったけど、こういう地域の活動とかに参加するっていうのもすごく大事なんだと思いました。それに、前までは、ほとんど興味のなかったことも、たった1つや2つの出来事で、ボランティア活動などにも興味を持ち地域に貢献できることは良いことだと思いました。

今は、地域の活動に参加はあまりできないけれど、地域の人とかにあいさつだけでも続けていこうと思いました。自分も興味がなくあまり好きではなかったボランティア活動も1度参加してみたりする事で興味がわいたりしたので、前の自分みたいに今「福祉」という言葉を知らなかったり、そのことについて、興味がない人に少しでも「おもしろい」などと思ってもらうために、周りにもボランティア、あいさつの大切さを知らせていこうと思いました。

「普通の暮らしを幸せにするために」

角野中学校 3年 松浦 成美

私の母は作業療法士として、介護福祉施設で働いています。私が小学生だった頃は、よく母の仕事場に連れていってもらったり、利用者さん達の前で出し物をしたりしていました。利用者さん達の中には、100歳を超えた方や障がいをもっている人などいろいろな人がいます。歳を取っても元気な人を見ると自分も頑張ろうという気持ちになります。私の母のようにお仕事で介護をする人はたくさんいます。そんな中私達と同じ年の子達の中にも「ヤングケアラー」といって親や祖父母の世話や家事をしている子もたくさんいます。この子たちは、自分のやりたいこともあまりできずに学校に通っています。そんなヤングケアラーの子達を手伝ったり、助けたりすることはできませんが、「ヤングケアラー」という存在に気付いてあげることが大事だなと思いました。

私はこの間、「足が動かなくて1人で立つことができない男の子」の動画を見ました。その子は、みんなと同じ小学校、中学校に入学しました。小学校では先生に支えられながらも、運動会で走りきりました。他の競技もその子なりに頑張っていました。その子が中学3年生になった時、運動会で体を支えて一緒に走ってくれていたのは、先生ではなくクラスの友達だったのです。一緒に走ってくれた子たちはみんな、自分がやりたいと言ってくれたそうです。そしてその子は、走りきりました。その後も、音楽会では初めて立って歌うことができ、卒業式も花道を歩くことができました。これらのことができたのは、クラスの仲間や先生達が支えてくれていたからだと思います。身近な家族や学校で、思いやりや助け合いは大切だなと思いました。

このように、私達が助け合い、困っている人や苦しんでいる人に気付き、誰かのために行動することによって、みんなが幸せに暮らせるようになると思います。「⑤だんの・⑥らしを・⑦あわせに」するために、まずは身近なことから取り組んでいきたいと思います。

「高齢者と若者がともに生きる」

角野中学校 3年 村尾 琴羽

皆さんの中に、高齢者の人たちと話すことに対して、勇気がなかったり、難しいと思っている人はいませんか。また、助けてあげようと思っても、なかなか行動に移すことができない、という人はいませんか。

私は、実体験を通し、母から大切なことを聞く前までは、このような気持ちを持っていました。

ある日、私は母と買い物に行ったとき、少し足腰が悪そうな1人の高齢者の方が、腰をゆっくり曲げながら、落ちている物を拾おうとしている姿が目には映りました。そのとき、少し離れた所で「大丈夫かな」と思いながらも、私は見守ることしかできませんでした。その後、買い物も終わり帰りの車で、私はずっとあの高齢者の人のことが気になり、なぜ助けてあげられなかったのだろうと思っていました。

家に帰っても、すっきりとしない気持ちだったので、介護関係の仕事をしている母に、相談してみました。すると母は、「助けるという行動ができなくても、声を掛けるという事が1番大切かな。」と言いました。

私は、この言葉を聞く前までは「できないことをしてあげる」ということが、高齢者の人たちのためになると思っていたけれど、全部してあげるということは、その人が持っている、残された機能を奪うことになってしまうと、気づくことができました。また、母から詳しく話を聞くと、高齢者の人たちでも、できることは沢山あるし、できないことでも頑張ろうとしているから、「なにか手伝うことはありませんか。」と聞いてあげることが、1番大切だということを知りました。私は、この日から高齢者の人たちに対する接し方を、考え直すことができました。

また、前の私のように、助けてあげようと思いつつも行動できないという人たちにも、まずは声を掛けるということから挑戦して欲しいと思います。

現在の日本は、少子高齢化と言われているくらい高齢者の方たちの方が多くなっています。高齢者の方たちも、住みやすい世の中にするために、まず私たちのような若い人たち1人1人が高齢者に寄り添い、高齢者と若者が共に、過ごしやすい世の中にしていきたいです。

「福祉の仕事とは」

大生院中学校 1年 近藤 洸生

「福祉」とは、最低限の幸福・社会的援助を提供する理念を指します。その中で、援助を必要とする人に援助を提供する仕事が福祉の仕事になります。福祉の仕事は、保育士・介護福祉士・ケアマネージャーなど様々ですが、共通して言えるのは「人の助けとなる仕事」です。

福祉の仕事は、はば広いですが今回は、障がい福祉サービスについて考えました。障がい福祉サービスには、5種類のサービスがあります。まずは、訪問系で、自宅で、入浴、排せつや食事の介助を受けたり、視覚障がいにより移動が困難な方が外出する時に、介助を行うサービスがあります。そして、自宅で生活する事が困難な方が、安心して生活できるよう施設で生活をする入所サービスがあります。さらに、自宅で生活をしながら、日中に施設に出向き、リハビリや入浴などを行う日中活動があります。

僕のお母さんは、看護師をしていて、日中活動を行う生活介護に勤務しています。どのような仕事を聞いてみると、入浴やバイタル測定、口からご飯が食べられない人の手助けをしたり、てんかん発作など具合が悪くなった時の対応をしているそうです。

僕的に、福祉とは障がい者たちに必要な場所であり、その人たちがもっと快適に暮らすには、急に困ったことが起きたときのために、夜間や休日でもいつでも相談にのったり緊急ヘルパーを派遣するといったと思います。

「せせらぎ食堂」

大生院中学校 2年 藤原 柚希

私はせせらぎ食堂に行っています。

せせらぎ食堂とは、地域の高齢者の方と一緒にご飯を食べる行事です。小学4年生から小学6年生までが対象なのですが、中学生はボランティアとして希望制で参加できます。ここ2年ほどは新型コロナウイルスの影響で中止になっていますが、私も前まで行っていました。せせらぎ食堂は11時頃から13時頃まであります。せせらぎ食堂は、ボランティアの方がご飯を作ってくれます。それを小中学生が運んだり、受付をいろいろ手伝えることがあります。今はしていませんが、コロナ前まではご飯を食べ終わったら、ショーを見たり遊んだりしていました。せせらぎ食堂に行き始めてから高齢者の方との接し方や手伝えることの楽しさを知ることができました。1人でも多くの方の名前を覚えられるように高齢者の方とボランティア1人1人にひらがなで書いてある名札が毎回配られます。せせらぎ食堂に入る前はあまり高齢者の方と関わることはありませんでしたが、せせらぎ食堂に入ってから高齢者の方との交流が増えました。高齢者の方と関わることによって、気遣う大切さや人と関わる楽しさを知りました。

今は新型コロナウイルスの影響で参加できないけど、新型コロナウイルスがおさまったら、また行きたいです。せせらぎ食堂での今までの経験を生かして、将来に役立てた

いです。

「あいさつ」

大生院中学校 2年 直野 蒼志

ぼくが、学校に登校している時に地域の人たちが「おはよう」、とってくれます。あいさつをしてもらうととてもすがすがしいです。下校のときも「おかえり」とってくれます。きもちがいいです。

ぼくも、まねしてみたいと思ったけどなかなかゆうきがでずあいさつをかえせないときがありました。

小学校では、あいさつに力をいれていろんなかつどうをしていました。でも、そのかつどうがあったとしてもあいさつはできませんでした。そして2年生になったときのどくとくであいさつのことについてをしてあいさつのたいせつさをしりました。それから、あいさつをかえすようになりました。でも、こえがちいさいなとおもいました。6年生のあいさつをみているとおおきなこえであいさつをしていました。それをきくととてもきもちがよかったです。ぼくもまねをしてみました。

そしたら、あいさつをした人がわらってくれました。

それからは、さきにあいさつをするようになりました。

あいさつをすることでなかよくなれた人もいました。

これからもあいさつをたいせつにしている人にならしたいと思います。

「僕のおじいちゃん」

大生院中学校 2年 田坂 陽翔

僕のおじいちゃんは、今90歳です。足腰が不自由ですが、毎日、農家で頑張っています。野菜をたくさん作っています。僕もたまに手伝いに行きます。僕のおじいちゃんは、たくさんの野菜を作って近所の人たちにあげるのが楽しみで日々農家を頑張っています。

僕は日々頑張っているおじいちゃんを尊敬しています。とてもおいしい野菜をいつも食べさせてもらっています。おじいちゃんが作っている野菜は、じゃがいも、たまねぎ、にんじん、トマト、オクラ、ピーマン、トウモロコシ、ナス、キャベツ、キュウリ、スイカなどさまざまな種類の野菜を作っています。

以前は、お米をたくさん作っていました。僕も米を作っている時はよく手伝いに行っていました。田植えやいねかりをしたりしました。ともしんどかった記憶が少しあります。米もとてもおいしかったです。米を家まで持って帰るのに車にのせる時に持ち上げる時と家に着いた時に家の中に持って入れる時の米の入った袋がとても重くて

しんどかった記憶もあります。僕はいねかりの記憶がとてもふかくのこっていて僕は初めてその時にいねかりをして楽しくて初めての感かくだったのかとても印象ぶかいです。

じいちゃんの野菜は野菜をあげた人はとてもおいしいと言っていて畑がとてもきれいでどの野菜がどこにあるか分かりやすくすごいと言っていました。僕も他の畑よりとてもきれいだなと思いました。僕のおじいちゃんは足腰がとても悪いのに畑はきれいで野菜や米はおいしくてとても尊敬するところしかありません。とても近所の人とも仲が良く人脈もあり90歳なのに1つ1つを毎日頑張り畑だけでなく家に居る時も家事1つ1つを頑張っていてとてもすごいと思います。

僕は90歳でもなく足腰も不自由でもないのでじいちゃんよりもとても頑張れます。なのでじいちゃんみたいに1つ1つ頑張って近所の人からも仲が良く人脈があるような人になれるようにこれから頑張りたいです。毎日毎日後悔もなく毎日毎日大事にしていきたいです。

「手話」

大生院中学校 3年 菅 汐璃

私は今まで手話ができる人は「カッコいいなあ」「すごいなあ」と思っていました。しかし、自分が手話ができるようになりたいとは全く思っていませんでした。小さい頃に福祉センターで教えてもらい唯一できる手話、自分の名前の伝え方は忘れないようにしたいと思ったことはあったけれど……。

しかしある日、テレビで耳の聞こえない両親をもつ女の子の話を見ました。彼女は女優になりたかったけれど、耳の聞こえない家族を残して女優になることはできないと思っていました。しかし、家族の応援があり、女優を目指し、母と彼女の好きな手話をするアーティストのライブに母をサプライズでよび、彼女がステージ上で手話をしているのを見てとても感動しました。これをきっかけに私は手話を勉強し、少しでも手話ができるようになりたいと思いました。更には、本で耳の聞こえない両親をもつ外国の女の子の話を読みました。彼女は病気になり困ることがたくさんあったり、学校にいても困ることがたくさんあったりと大変なことがある中でもたくさんの困難を乗り越え、手話通訳士を目指そうとしているところがとてもすごいなあと思い、もっと手話がしたくなりました。

このようなことがきっかけで、私は手話ができる人は「カッコいいなあ」「すごいなあ」と思うだけでなく、少しでも、できるならたくさん手話を覚えたくくなりました。

私は誰かのために何かすることはとてもいいことだと思うし、何かすることは嫌いではありません。だからといって自分から何かしようと思うことはありませんでした。しかしテレビや本がきっかけで手話がしたい、できるようになりたいと思いました。他にもたくさん誰かの役に立てるようなことを見つけ行動したいです。きっかけを待つのではなく、これからはいろいろなことを調べながら、何かできることを見つけたいです。

「福祉について知って感じたこと」

大生院中学校 3年 神野 由珠

私の母は介護士をしています。その母の働く姿を見て、福祉はとても大切な行動だという事が分かりました。

私は時間がある時に母の職場に行き手伝いをしていました。なので高齢者や障がいのある方とたくさん関わることができました。手伝いや身の周りから感じることはありません。

まず1つ目は、あたりまえの事かもしれないけど、いろいろな方がいるということです。いろいろな方とは、障がいのある方、高齢者、元気だけど手助けが必要な方などです。いろいろな方がいるので、職員さんもいろいろしないといけません。お風呂にいれたり、トイレの手伝いをしたりなどさまざまです。また、人だけではなく、機械や道具なども工夫されています。このような事から私は、いろいろな人が過ごしやすいうようにたくさんの人や工夫が大切だということを感じました。

2つ目は、私たちが過ごしている身の周りから感じることです。私たちが生活している中の物や建物にはたくさんのユニバーサルデザインのものがあります。ユニバーサルデザインとは、年齢や障がいの有無に関わらず、多くの人を使いやすいようにデザインすることなどです。私は普段、生活している時にあまり気にしていなかったけど考えながら過ごしているとたくさんありました。例えば、シャンプーとリンスを見分けたり、エレベーターのあけるやしめるなどの点字、スロープ、手すりなどです。思ったよりたくさんありびっくりしました。でも、このようなものは、多くの人を使いやすいようになっているものなので、とても大切だなと思いました。

また、福祉ボランティアには福祉施設に訪問し、絵本の読み聞かせや人形劇のボランティア、その施設の補助員、子育て支援などがあるそうです。私は今までボランティアなどにすすんで参加していませんでした。でも、このようなボランティアに参加することで喜んでくれる人や助かる人がいると知って参加してみたいなと思いました。

私はこの作文をとおして、今まで考えてこなかった福祉について深く考えることができました。改めて福祉はとても大切なものだということが分かりました。誰かのために行動することはとてもいい事なので、まずは自分から行動し、それから友達などとも行動して、誰かのためになったらいいです。そして、仲良く思いやりをもって支え合いながら過ごしていきたいです。

「人から学ぶこと」

大生院中学校 3年 永市 純也

昨年、2度目の本土かいさいである東京オリンピック・パラリンピックがありました。ニュースで数々のほう道がされている中、私はしょうがい者が主体となって行われるパラリンピックの特集を見ました。そのほう道の中にはメダリストや日本を代表

するパラスイマーや車いすバスケットボールの選手が取り上げられており、まだまだほかのきょうぎと比べてし持されることの少ないスポーツの選手が出ていました。パラリンピックで行われるスポーツきょうぎを題材としたイメージビデオが作成されていて、それはとてもかっこよく、しょうがい者であること、体が不自由であることを感じさせることもないくらいのはく力でした。そのイメージビデオの後には体育館やきょうぎ場にはスロープがかいちくされたりバリアフリーがほどこされており、至る所にゆるやかなさか道を作ったり手すりを作ったり考えられていることが伝わりました。また、パラスイマーの選手の私生活の様子も映されており私生活ではほぼ車いすで生活しており、い動は車いすのまま車に乗せて会場までい動する形でした。ただ生活するだけでとても苦ろうしている姿を見せていた選手がプールの中では全くその様子を見せず周りのみんなと切さたくましながら手を取り練習する姿を見ました。その選手がインタビューで答えていたのはこの環境に感謝するとの事で自分の体を不自由に思うことではなく今ある現状でどうやって上を向いていくかすごい前向きな気持ちでした。私はその姿を見て考えさせられることが多くありました。

近年では、少子高れい化が社会的に進んでおり地いきでも高れい者の数が増えてきています。公民館や体育館、公園などにもバリアフリーを考えられたスロープや手すりが使われています。公園などを利用した高れい者が散歩や運動に使われているところをよく目にします。ケガをしないよう安全に運動できるよう工夫がされているように感じました。オリンピックたちが前に立って進めることで、その後が続いて高れい者やしょうがい者の人たちが住みやすい街づくりがされていて環境がよりよく作られているように思いました。

「ボランティアって？」

大生院中学校 3年 秦 愛依

私は、ボランティアのことを、「タダで困っている人を助けること」だと思っていました。くわしく調べてみると、ボランティアとは、「社会のために自分から進んで無料で奉仕活動をする人」と書かれてありました。

最近では、コロナ禍ということもあり、奉仕活動やボランティアが減ってきています。

また、私の学校にはたくさんのボランティアの方々がいらっしゃいます。例えば、朝早くから小中学生が安全に登校できるように見守ってくれる地域の方々や警察の方々です。忙しいにもかかわらず、毎日笑顔であいさつしてくれるのでとてもきもちいいです。

ちょうど4年前、山口県周防大島町で行方不明になった2才児の子を発見したスーパーボランティアの尾島春夫さんは今回だけでなく、今までにも色々な所のボランティアに行き災害で被災した建物や道路などを片づけるボランティアをされているようです。その経験から学んだことを今回このような形で行方不明になった子を見つけたそうです。

わたしは、今まであまりボランティアをしたことがなかったけれど、尾畠さんのボランティアに対する思いを聞いて、ボランティアをすることは決して楽なことではないけれど、やり終えた後はとてもかっこよくて、ほこりに思えることだと思いました。尾畠さんは、「世の中に重いものはたくさんあるけれど、命より重いものはない。」と書いていました。わたしも本当にその通りだと思いました。

大切な命のためにわたしも尾畠さんみたいに、責任感と行動力に満ちあふれた大人になって、人助けをしたいと思うようになりました。

日本でも世界でも災害で困っている人はたくさんいるようです。困っている人がいたらわたしもやさしい心で助けてあげたいです。

「助け合いの輪」

船木中学校 2年 伊井 愛希穂

「福祉はただお年寄りの方や足や手などが不自由な方たちの歩いたり食事したりするのを手助けするだけじゃない」そう思えたのは、ある本に出会ってからでした。

私は、『奮闘するたすく』という本に出会いました。この本は、主人公のたすくの祖父が福祉施設に行くこととなります。そして、たすくがその祖父が介護施設に行っている様子をレポートすることになりました。その本は読みながら、福祉について詳しく知ることができる本です。

この本を読んで、福祉施設で働いている人の福祉施設に通っている人への気遣いが感じられました。例えば、食事を作っている時です。どういうことかという、福祉施設に通っている人も顔を見ながら食事を作ってもらった方が安心するし、通ってる人が1人でもいなくなったら分かるようにオープンキッチンで1人1人の机で囲むようになっています。なので福祉施設の食事している所はとても温かいのだと分かりました。

福祉施設は、食材にもこだわっています。例えば食事を作る時も豆腐などやわらかい食材を使うことで、お年寄りの方たちでもあまりかまわずに食べることができて、簡単に食べることができるものを使っています。その他にも肉も使えば野菜も使ったりして、栄養のバランスも気にしながら調理しているのです。

私は福祉施設で働いている方は本当にすごいと思います。年寄り扱いをされて、嫌がる人もいるからです。そんな人たちが船木にたくさんいることをほこらしく思って、福祉施設で働くことは出来ないけど、困っていたら助けたり、あいさつを自分からすることを心がけたりと私たちがお年寄りの方たちも気持ち良くすごしてもらうために出来る最低限のことはしていきたいです。

「学んだ事」

船木中学校 2年 近藤 青葉

ある日、動画サイトを見ていたら耳が聞こえにくい障がいをおわされている方の動画が出てきました。その動画を開くと、コラボ相手などの口を見ながら話していたり、手話ができる人と手話で会話をしたりしていました。その瞬間、何かが変わりました。それは、障がいをおわされた方達への気持ちだと思います。今でもその瞬間は覚えています。

この動画がきっかけで、時間があれば、手話の本を見て覚えたり、障がいをおわされた方がやっている動画サイトを見たりしています。動画を見ている時に、この思いになる前はどんなことをしていただろうと考えてみたら、少しだけ負けんしていました。

小学4年生の時から、瀬戸児童館のジュニアリーダーといういろんなボランティアをするクラブに入っていました。そこでは、老人ホームに行って劇や歌、ダンスなどをして老人ホームにおられる方に元気をあたえました。他には、中学校の部活動で老人ホームに演奏をしに行きました。そこでも、元気をあたえました。そう考えるといろいろしてきたけど、障がいをおわされた方には何も出来ていないと思いました。しかし、今までの人生を振り返ると、中学校の先生方にいろんな知識を教えてもらいました。まずは数学の先生が、授業中に少しだけ手話をしていた事です。その時はまだ手話という言葉しか知らなかったけど釘付けになりました。もう1人は、国語の先生です。4回目ぐらいの授業で障がいをおわれた方の話をしてもらいました。その授業で、「障がい者は害虫ではないから、障害者と書くのではなく障がいをおわされた人という表し方をしたほうがいい」と教えてもらいました。そこから作文などに障がいをおわれた方という書き方をしました。

先生方が手話やお話をしていなかったら動画サイトに出てきた方の動画を見ることもなかったし、手話に夢中にもならなかったと思います。先生方には感謝しかないです。そして、自分の妹にも感謝です。なぜなら、妹の将来の夢が障がいをおわされた方のサポートをする仕事に就きたいという事を聞いていたので、それを後押し出来るように知識をもっと入れたいという思いになれたからです。

これからも、助け合いをしながら今、生きている人みんなが平等に快適に過ごせる社会にしていきたいです。

「嬉しかったこと」

船木中学校 2年 近藤 若葉

私は、音楽部で、老人ホームに行って、定期演奏会という活動を行いました。今年は、コロナ禍ということで、施設にいる方々には入り口で聴いてもらいました。

自分の家族や部活の先輩の家族なども来てくれて、とても緊張しました。

演奏会が終わるごとにみなさんに拍手をもらえて嬉しかったです。

定期演奏会が終わると、おじいちゃん、おばあちゃんが、

「すごく良かった。」

「また、来てね。」

と言ってくれました。とてもとても嬉しかったです。知っている曲だけでなく知らない曲もあったと思うけれど、ずっと手拍子をしてくださったり、笑顔でリズムにのってくださったりして、本当に嬉しかったです。

改めて、誰かに喜んでもらえることが、どれほど温かい気持ちになるかをおじいちゃんとおばあちゃんたちから教わりました。とてもいい経験になりました。中学校の演奏会だけでなく、小学校のときのボランティアでも嬉しかった経験がありました。

小学5、6年生ぐらいのときに、児童館などでしているジュニアリーダーという活動をしていて、そのボランティアで老人ホームに行くことになりました。それが初めてで、何か分からないけれどちょっと私は不安がありました。しかし、おじいちゃん、おばあちゃんに会ってみると不安がなくなり、それよりも楽しんで欲しいと思いました。今まで練習していた劇やダンス、コントなどをして、そのあとおじいちゃん、おばあちゃんと一緒にお手玉で遊びました。そのときめちゃくちゃノリノリで遊んでいたおばあちゃんを見て、かわいいと思いました。

帰る前にみなさんと握手をしました。握手をしながらおばあちゃんたちが、

「また、来てね。」

と泣きながら言ってくれました。そのとき私も泣きそうになりました。

泣くぐらい楽しんでもらったと思うと、とても嬉しかったです。

ボランティアなどから分かる大切なことがあると私はこの2つの経験をして分かりました。

「様々な世代の人が福祉について知ってほしい」

商業高等学校 1年 三浦 大和

私は、中学校の頃に人権と福祉と環境に分かれて調べる学習がありました。その時に福祉について勉強してきました。福祉班では、点字や車いす、目の不自由な人の体験について主に学習してきました。

点字では、自分の好きなキャラクターとそのセリフを点字で表して発表しました。点字を使う際に、力が強すぎて点字用紙に穴を開けてしまうことが多々ありました。点字は視覚障がい者の方々が読み書きをする時に使う文字です。私たちが点字を大切に、そして私たちの身近な存在にしていけないと感じます。

私は生活上で車いすを使ったことがありませんでした。福祉班で車いすを体験・学習した時にステッピングバーの重要性について特に印象を受けました。ステッピングバーとは、車いすで移動する時に段差を越える際に使う機能です。ステッピングバーを使う時には、相手に声をかけながら、なるべく段差に近づけて、ゆっくりと上げることが大切だと感じました。

福祉班で、実際に車いすに乗りました。私は初めての車いすで楽しみでした。車いすは衝撃を受けやすく、少し怖かったです。車いすを使うために、機能や使い方を知り、乗る方も押す方も安心できるようにするのが、重要だと思います。

最近、車いすバスケットや車いすテニスなど様々な所で使われているので、少しずつ車いすも社会に馴染んできたと感じます。

目の不自由な人の体験では、見えにくくなるゴーグルと、軍手とヘッドホンを身に付けて、買い物をしました。障がいにも、様々な種類があって、とても大変な生活を送っている気持ちが体験をすることで、少し分かりました。実際に目が見えなくなると、身動きが取れなくなり、とても怖い思いをします。買い物の体験は、買う物が書かれた紙をもとにして、食材が書かれたカードを取り、お金を払います。カードと紙は、ほぼ見えなくて、補助がないとできませんでした。

3つの体験から、障がい者の憂さや自分達の生活のありがたみがよく分かりました。障がい者の方々が安心できる環境作りを私たちがしないといけません。そのために、点字ブロックを歩く人への配慮、障がいのある方が困っているときに気遣いを心がけることが必要だと思います。

新居浜市では、様々なボランティアが行われています。私もネットで調べたことがありました。中学校でせっかく調べたことをそのままにせず、ボランティアに参加して、奥深く知っていきたいです。主に、私は手話に興味を持っています。手話は、聴覚障がいや言語障がいの方がコミュニケーションをとるために使う言語です。こうして、聴覚障がいや言語障がいの人へ自分の気持ちや思いを伝えられます。私は、福祉に興味を持った分、これからも手話や車いすについて調べたいと思います。また、街中で障がい者に出会って、困っていたら、すぐに助けたいです。

新居浜市では、手話教室やフラワーサポーターなど、私たちが今すぐできることはたくさんあると思います。少しでも、よりよい街になることを願っています。

「バリアフリーについて」

東高等学校 2年 青野 暖

日常生活でバリアフリーを目にすることは多々あります。最近では大型ショッピングセンターや学校などで見かけられます。また大型ショッピングセンターでは、インフォメーションから無料で貸し出しをしていて、車椅子ユーザーでも快適に利用できるような取り組みが行われています。このように、不自由がある人でも施設を快適に利用することができるのはとても良い事だと思います。バリアフリーでは、車椅子利用者に対する取り組みだけでなく、一般に「物理的なバリア」「制度的なバリア」「文化情報面のバリア」「意識上のバリア」の4つのバリアがあるといわれています。主なバリアフリーには前述の他に、エレベーター、エスカレーター、スロープ、多機能トイレ、自動改札機、誘導ブロック等があります。しかし、バリアフリーには良い点ばかりではなく悪い点もあります。良い点は、障がい者への考え方が変わったことや、

お年寄りや妊婦さんへの優先席もあり、多くの方が配慮のある行動を求められるようになったことです。悪い点は、バリアフリーと知りながら、それを無視する人が多いことです。例えば、駐車場の優先スペースの利用や、電車にある優先席を理由なく利用したりして優先席の意味がなくなってしまうことがあります。そのようなことがないように、人々の考えが変わる世の中になればいいなと思います。

私は、電車を利用する時には、人が多い場合は席に座らず立つように心がけています。お年寄りや妊婦さん、障がいをもっている方がいつ来ても席を譲ることができるそんな思いやりのある心の持ち主になろうと改めて思いました。

「誰もが幸せに暮らせるために」

東高等学校 2年 石井 ひまり

私は、ふくしについて考えました。「ふくし」とは、「ふ」だんの「く」らしを「し」あわせにすることです。みんなが幸せに暮らすためにはどうしたらいいのでしょうか…。

私は、職業体験で老人ホームに行ったことがあります。老人ホームに入ると、介護士さんとおじいちゃんおばあちゃんに笑顔で迎えられました。お風呂場、食堂、遊んでいる所、いろんな場所を見学しました。1番印象的だったことはお風呂場です。1人でお風呂に入れない方たちは、台に乗って湯舟につかることができます。そんな機械があることを初めて知りました。他にも、部屋のドアの幅が広かったり、手すりがたくさんあったり、たくさん工夫がされていました。

おばあちゃん、おじいちゃんたちとおり紙をしました。おり紙を手伝ってくれたし、とても親切でうれしかったです。老人ホームに居たみんなはとても幸せそうでした。介護士さんの大変さも分かりました。おじいちゃんおばあちゃんの幸せは、介護士さんが守っているんだなあと感じました。

普段の暮らしを幸せにするためには、たくさんの方の協力や思いやりがあつてのものなんだなあと思いました。今、私が幸せに生きているのは、親が一生懸命働いてくれているおかげで、食べ物が食べられているのは、動物や植物があるから。いろんなことに感謝しないといけないなと思いました。

電車で困っている人に椅子を譲ったり、点字ブロックの上は歩かない立たないなど意識して、自分から動くことが大切だと思います。人のことを思いやれる人は、とても素敵な人だなと思います。友達や家族と支えあいながら生きていくことも「ふくし」だと思います。誰もが幸せに暮らすためには、一人ひとりがふくしについて考えることだと思います。誰かのために行動できる人になりたいです。

「一人ひとりの意識」

東高等学校 2年 一色 杏

私は福祉について中学生の頃、自由研究で点字ブロックについて調べたことがあります。色々な場所にある点字ブロックを写真に撮ったり、点字ブロックの形の意味などを調べました。

点字ブロックというのは視覚に障がいがある人のために置かれているものです。しかし、ニュースやネットなどではその上を歩く人や、遮るようにして自転車などを止めているところをよく見ます。実際に私も点字ブロックの上を歩いたり、自転車で走ったりしている人を見たことがあります。さらに、小さい子どもなどは点字ブロックのポコポコとした感触がおもしろく感じるのか、わざと上を歩いたりしているのを見かけます。ちょうどその時に点字ブロックを利用する方がいなかったからよかったけれど、もしの場合気付かずに衝突してしまい、怪我をする可能性も低くないと思います。その場合は一緒にいる大人が注意するべきだと思います。置かれているものには全て意味があって、それを必要としている人がいることを忘れてはいけないと思います。点字ブロックに限らずスロープや手すりなど他のものでも同じことが言えます。私たちはみんなが生きやすい環境を作っていく必要があると考えます。自分には必要なくても誰かが必要としているということを意識することで少しずつ変わっていくと思います。スロープなどももっと増やしていき、車椅子を利用する方などがスムーズに移動できるようになればいいなと思います。

同じく中学生の時に2人1組で目隠しをして階段を昇り降りするということをしました。前に障害物があっても分からない状態なので、まっすぐなところを歩くのもなかなか進めなくて、階段はもっと怖くて一歩ずつ慎重に歩かないと進めませんでした。また、誘導する側もとても難しく、ヒヤヒヤしました。目がほとんど見えない状況で進路を妨害されると危険だし、ぶつかるまで気付くことができないので大きな怪我に繋がってしまうことが分かりました。私はこのように実際体験して分かったことがあるけれど、したことがないとあまり実感も湧かないので難しいのかなと思いました。なので私は中学生の時にこのような体験を授業でやらせていただくととても良かったと思います。

自分が実際に体験したことや調べたりしたことなどを活用し、今後大人になったときに福祉に貢献できるように、まずは身近にある小さなことに気を配れるように意識していきたいです。

「生きやすい町へ」

東高等学校 2年 一色 真緒

私は普段から道を歩いていて点字ブロックを見つけたり、スロープを見つけたりする。そう、今世の中はだれもが生きやすいように変わってきたのだ。

ユニバーサルデザインとは、文化・国籍・年齢・性別・能力の違いにかかわらず、多くの人々が利用することができることを目指した設計で、またそれを実現させるためのプロセスだ。私には祖母と祖父がいる。2人はとても私を大切にしてくれる。小学生の頃からお世話になっている。だから階段が苦手な2人のために玄関口にスロープを置いてあげるのが夢だ。ユニバーサルデザインはもっと世の中にしんとうさせるべきだと思う。

たとえば前に歩道橋の点字ブロックがとれていたことがあった。SNSで見た小さな女の子が白杖を持って階段をのぼるのを見たことがあるがもし何もないとしたら、不安で仕方ないと思った。全員がもっとそういう所に目を向けるべきだと思う。点字ブロックなどの障がいをもつ人が使うのはその人にとって生活するために欠かせないものだったり、もしかしたらそれがなければ、ケガをしてしまったりもしかしたら、命にかかわるものになるかもしれない。だから私はもっとユニバーサルデザインなどのてき用をすすめて新居浜市をだれもが住みやすい町にしたいと思います。

私はパラリンピックなどで手や足を失ってしまっている人たちががんばる姿を見るととても尊敬するし元気をもらう。私は特に何もない元気な体をもった人なのに何もできないし、もっと勉強も運動もできるはずなのと思わされます。高校2年生、これからはもっと部活や勉強をがんばってたくさんの事にちょうせんし、人の役に立てる仕事につきたいです。今は看護師になりたいので、もっとそのためにできる事をさがしてがんばりたいです。

「バリアフリーのありがたみ」

東高等学校 2年 岩崎 迅

僕はバリアフリーがとてもじゅうじつしていると思います。僕の周りだけかもしれませんが、盲導犬のCMをしていたり、学校などで車イスの人のために階段と坂でわかっていたりなど最近どんどんバリアフリーの環境は整備されていっていると思います。しかし僕は思うにどんだけ良いバリアフリー環境が整ったとしても、人と人の心のバリアフリーが足りないと思っています。最近では学校の先生方が総合の時間をバリアフリーの授業をしてくださりどんどん良い人達は増えているとはいえ、まだまだ物足りないと思います。車両に乗るのを周りの人が手を差し伸べるとか、視覚障がいのある人を目的地まで送るとか、車イスの人に高いところの商品を取るなど海外より気づかいが少ないなどの記事を見てこれは国民性がでているんじゃないかなと僕は思います。外国の人たちは、知らない人でもどんどん話しかけるなどコミュ力があるのに対して、日本人は内気で助けに行こうとするけどけっきょく勇気がなくてぜんぜん助けていないなど絶対にあると思うんですよ！それでその勇気を出すにはどうしたらいいか僕的に考えた結果、障がいの方の簡単な疑似体験をやってみたらいいと思います。体験をどうするかというと、家族がみんな寝たあ

とに家の電気を全部消して、2階の自分の部屋から1階のリビングで水を飲むという体験をしてみました。結果を言うと一応できました。ですがとても時間がかかり、とても怖かったです。階段の一段一段が恐怖で踏み外したらどうしようなど不安でいっぱいでした。住み慣れた家でこんなに怖かったのにあまり知らない道を長い距離を歩くなんて僕にはぜったいにできないと思いました。

この体験で僕は障がいの方は絶対に助けようと思えるようになったのでみなさんもためしてみてください。

「保育について考えたこと」

東高等学校 2年 馬木 美紅

私は周りに小さい子が多く、関わる機会が多いので保育について考えました。まず、私は経験したことです。私は0歳から保育園に入っていて、朝早くから夜の外が真っ暗になるまで保育園にいる事が多かったです。それでもずっと先生たちは私たちと遊びながら他の仕事をこなしていました。今考えると、とても大変だったと思うので感謝の気持ちでいっぱいです。また、中学生の頃、職場体験で幼稚園に行った時、たくさんの幼稚園児たちと毎日遊びました。あんなに大人数で遊んだことがなかったし、とても元気なので1週間程度だったけどとても疲れた思い出があります。1クラスに3、4人の中学生に先生が2人いたけど、いつもは、先生が2人だけだと思わずすごいなと思いました。

次に、現在の日本は少子化であるのに、待機児童が増えていることについてです。保育士や幼稚園教諭の仕事は朝から夜まで園児と遊んでとても体力がいる上に他の仕事もあって重労働だけど給料がとても少なく、その仕事量に見合っていないというのが現状です。子どもが好きで保育士や幼稚園教諭になりたいと思う人はたくさんいると思うけど、重労働や低収入、責任の重さ、事故への不安、離職率が高いといったことから保育士、幼稚園教諭の仕事に就く人が少ないです。人の命を預かる仕事なので、責任の重さや事故への不安はとりのぞけないものだけど、保育士や幼稚園教諭など子どもと関わる仕事の給料を見直すことで、人手が増えて重労働であっても少しは分散、緩和できるのではないかと思います。

今、共働きの家族がほとんどで、保育園や幼稚園に預けないといけないなど、保育に関わる人材、保育をする場所の需要は増加しているにも関わらず、人材不足、園不足では、幸せに暮らせる人が少なくなってしまうと思います。福祉とは幸福であり、幸福は人間に等しくもたらされるべきものなので、子育てをしていない人も関係のある問題であり、みんなで向き合い、改善していくものだと思います。

「幸せと温情」

東高等学校 2年 梅本 弥来

「ふくし」と聞いて皆さんは初めに何を思い浮かべますか。大半の人が「福祉」という言葉から「高齢者」を連想させると思います。しかし、「福祉」という言葉には「幸せ」といった意味が込められているのです。今回、福祉に関する作文を書くにあたって私は身近な幸せや、思いやりについて考えてみることにしました。これまで当たり前のように聞いたり口に出したりしていた「幸せ」とはどういったものなのか考察していきたいと思います。

皆さんはどのような時に幸せを感じますか。私は、家族と一緒に笑っているとき、友達と一緒に楽しい時間を過ごしているときなどに幸せを感じています。また、困っている時に助けられた時にも幸せを感じます。「幸せ」の定義は人によって異なるのではないかと私は感じています。しかし「幸せ」の共通点として、人が幸せを感じているときは、必ずお互いが幸せを感じていると思います。皆さん思い返してみてください。これまで「幸せ」を感じた時、必ずお互いが笑顔になっていたと思います。どちらか一方だけが幸せを感じているのは本当の幸せではないのではと私は感じました。また、思いやりの心を持っているほど多くの人に「幸せ」を分け与えていると私は感じています。私が中学生になったばかりの頃です。私は当時、友達が多いほうではありませんでした。クラス行事の一環としてグループワークがあったとき私はコミュニケーションをとるのが苦手でなかなか輪に入れずにいました。その時に同じグループの1人が声をかけてくれました。その子はとても明るく誰にでも優しく接してくれる子でした。これまで孤独を感じていたグループワークでしたがその子が声をかけてくれたおかげで私はその時ものすごく嬉しかったし、幸せを感じました。この私の経験があったからこそ、人々が「温情」を持つことによって、「幸せ」を感じるができる人が増えるのではと私は考察しました。

私1人が考えを変えることによって、この世界の人々全員が幸せになる、というのはかなり難しいと思います。しかし、身近な人に幸せを与えることは可能だと思いました。「温情」の気持ちを持って友達や家族、地域の方々に接し「幸せ」を感じてもらうことは私にもできると思います。少しでも幸せな方が増えることを願っています。

「福祉とバリアフリーについて」

東高等学校 2年 大西 健豊

僕はこの作文を書くにあたって福祉とはなんだろうと考えてみました。僕の思う福祉は、「体の不自由な人の手助けをする」みたいな感じだと思っていました。実際に、辞書などで「福祉」と調べてみました。すると、辞書には、「人々が安心して暮らせる環境」と書いてありました。もし、自分が事故に遭って体が不自由になったり、年を

取ったとき、バリアフリーは発展しているのかと考えました。

僕は、簡単な障がい者体験をしました。その内容は、目かくしをして、ドアを開け、手を洗い、お茶を飲むという、とても簡単なものを行いました。体験をして、普段なにげなくやっている事がとても難しく感じました。棚に体をぶついたり、ハンドソープの場所が分からなくて苦戦したり、足の小指をおもいきり机にぶついたりしました。これは家なのでまだそこまで怖くはありませんでしたが、これが外なら話はおもいきり変わってきます。点字ブロックのところを歩いていたら、後ろから高速で自転車が追い越して来たり、外は知らないものだらけなので、人や物にぶつかるなんて事、よくある事だと思いますし、最悪、車道に出て事故が起こってしまうと思いました。

僕は、今後、今よりもバリアフリーが進んでいてほしいと思いました。そうなれば、通りなれた所だけでなく、全く知らない道でも、安全に進めるようになり、事故などはかなり減るのではないのかと考えました。

僕は、最初は、「福祉」については、よく分かってはいなかったのですが、この作文を通して、今後のバリアフリーについて、知識を1つ増やす事ができました。

50年後、もっともっとバリアフリーが発展してほしいと思いました。

「私たちの新居浜」

東高等学校 2年 岡田 蒼空

この作品を書こうと思ったときに、「ふくし」とは？と改めて考えると「なんだろう」と考えれば考えるほどわからなくなってきました。なので、インターネットで調べてみようと思いました。そうすると、「しあわせ」「幸福」「特に（公的扶助による）生活の安定や充足」、「また、人々の幸福で安定した生活を公的に達成しようとする事」など、自分が思っていたよりも、人によりそっているようなかんじがしました。とくに、いいなと思ったのは、「だんのらしをあわせに」というのを見てたしかになと思いました。ふだんの暮らしをしあわせにという点でバリアフリーにつながるなと思いました。

私たちの住む新居浜には、たくさんのバリアフリーがあるなと思いました。病院には、ほぼ必ず手すりやスロープ、バリアフリーのトイレがあります。イオンモールには、たくさんのバリアフリーがあります。車いす専用の駐車場、てすりはもちろんさまざまなバリアフリーがありました。いままで生活してきて、あまり気にしていなかったけれど、たくさんバリアフリーがあつて新居浜はとてもあたたかくて、優しい地域だなと思いました。この地域は、「生活の安定や充実」のとおりだなと思いました。

私は、これから積極的にボランティアに参加したいと思いました。もっともっと新居浜にバリアフリーが増えてほしいし、私も、誰かのために行動したいので、ごみが落ちていたら拾ったり、困っている人がいたら、自分から助けたいと思いました。

この作文をとおして、自分たちの新居浜がとてもバリアフリーや、あたたかくて、

優しい地域ということが改めてわかりました。このあたたかい新居浜にうまれて、育てよかったですと思いました。これからも、新居浜にいたいです。

「私達にできること」

東高等学校 2年 越智 玲奈

最近の日本は、高齢化社会が進んでいるので、高齢者にもやさしい施設ができていくといいと思います。そして、高齢者だけではなく、若い人達も楽しめる、3世代向けの施設だったら、たくさんの人々が利用するのではないかなと思います。そんな施設内には、バリアフリーがあって車いすの方や足が不自由な人にもしんどいおもいをせずに使えるような工夫をして、誰もが楽しめるような娯楽があったらいいです。また、新しい建物を作る前に、バスにスロープがついたり、車を運転できない人達に無料で送迎できる制度などが増えていくと、家族への負担も減り、一人暮らしをしている高齢者のお世話も少しは楽になるのではないかと考えました。他には、もっとそれぞれの地域でふれあえるような場があったらいいのではないかなと思います。このご時世、なかなかみんなで何かをするというのは、難しいかもしれませんが、少しずつそういう場があったらいいかなと思います。私が住んでいる地域では、毎年、お盆に盆祭りを行っていました。近年は、台風やコロナの影響で行われていませんが、私が幼い頃からやっていました。近所に小さな広場に近所のおじいちゃんやおばあちゃん達、子ども、いろいろな都市の人たちが集まって、スイカやアイスを食べたり、みんなで盆踊りをしたり、いろいろな人と話をしたりして、みんな楽しそうだった様子を覚えています。やっぱりこういう行事は大事にしていくことが必要です。そして、普段からいろいろな世代の方と関わることで、今後の暮らしやすい環境ができていくのではないかとおもいます。なので、私は外で人と会ったときは、なるべく自分からあいさつをするように心がけています。そのおかげで、知らなかった人とも顔見知りになって、話しかけてきてくれたりするのが、すごくうれしいです。こうやって私たちの人間の輪が広がっていくと思います。なので私はあいさつを心がけ、困っている人がいたら助けることをしていきたいです。

「住みやすいまちづくり」

東高等学校 2年 神山 汐奈

2015年9月に150か国を超える世界のリーダーが参加して開かれた「国連持続可能な開発サミット」でSDGs、日本語で「持続可能な開発目標」が決められました。そこで、「誰一人取り残さない」を合言葉に「17の目標」と「169のターゲット」で構成されています。その17の目標の1つ「11・住み続けられるまちづく

り」を取り上げました。目標11の2に脆弱な立場にある人々、女性、子ども、障がい者及び高齢者のニーズに特に配慮し、公共交通機関の拡大などを通じた交通の安全性改善により、すべての人々に、安全かつ安価で容易に利用できる。持続可能な輸送システムへのアクセスを提供する、とあります。そこで障がい者及び高齢者を特に対象としたバリアフリーな建物や設備に着目しました。

街中で1番よく目にするのは点字です。歩道やエレベーターなど点字は様々なところで用いられています。目の不自由な人が必要とする点字ブロックの上に自転車が置いてあるのを何度か見かけたことがあります。視覚障がい者の命綱と言っても過言ではない点字ブロックに物があるととても危険です。これでは誰一人取り残さないという目標を達成することができず誰もが住み続けられるまちにはなりません。

現代では住みやすいまちづくりのための課題がたくさんありますが、改善され、徐々に住みやすくなってきていると思います。様々な施設や建物内のいたるところに手すりがついてあったり、車いすでも入ることができる多目的トイレが増えていたり。全世代、必要とするものもバラバラななかで、誰もが住みやすいまちにするには、良いバリアフリーの道具を生み出すための発想力や、その地域に住む人々の思いやりが第一に必要だと考えます。

2030年までに、誰もが住みやすいと思える街をつくっていきたいです。

「これからのふくし」

東高等学校 2年 亀井 晃優

「ふくし」とは、「ふ」だんの「く」らしを「し」あわせに。というのを聞いたことがあります。どんな人、どんな年齢でも不自由なく、幸せに暮らせる世の中にするのが福祉の役割です。

しかし、それはいったいどんなものがあるのかパッと思い出せるでしょうか。今では当たり前ようになってきているものばかりで、「それが福祉に関するものなんだ」と思うものは少なくありません。

例を1つあげるならば、有名所でいうと、スロープや自動販売機に付いている小銭入れです。

「いやいや、そんな福祉といえぱであげられる代表的なやつじゃないですか。」と思うと思います。しかし、私の弟(10)に聞いたところ、その2つはただ便利な坂などとはか思っていなかったのです。

そのくらい当たり前に取り組みされてきた福祉ですが、これまでしてきたことで体の不自由な人や高齢の方は、私たち「まだ」不自由のない人たちからの見る目は、あつかいは同じでしょうか。バリアフリーの建造物や、アイテムは出ても、人との心と心のバリアフリーはどうでしょうか。

普段の暮らしを皆が幸せになるには、建物をつくったり、ワンポイントをつけたりすることを当たり前にするだけでなく、人々の意識ももっと変えていくべきだと考え

ます。当たり前に関いを思い合ったり、気づかえたりすることを皆ができるようになることで、普通のくらしを幸せにすることができると思います。

将来的には、「バリアフリー」などの言葉すら使われなくなって、福祉について考えていくことが当たり前になることが、「これからの福祉」のあるべき姿だと私は思いません。

「障がいと人権」

東高等学校 2年 合田 翔太

障がいについて僕は書こうと思う。僕は子どもの頃、母とよく買い物に行っていた。いつものように母と一緒に歩きおもちゃを見に行っていた。すると車イスに乗っていた方がいた。子どもの頃の僕はなんでこの人車イスに乗っているんだろうと思っていた。子どもの僕にはわからなかった。日々成長していくうちに学校で障がい者について学んだ。そこで初めて車イスに乗っている理由がわかった。あの人はたぶん障がい者だったのであろうかと。しかし、車イスに乗っている方が全員障がい者だとは限らない。足を痛めている人、ケガをしてしまった方もいるかもしれない。幼い僕はケガをしている人障がいを持っている人関係なしに思いやりの心をもち母と買い物をしたいなと思った。

他にもスーパーで障がい者マークのついている駐車場スペースで平気で健常者が停めているのを見た。もし、障がい者がいらっしゃって、しょうがないから一般のスペースに停めていたら見てる方はとても腹立たしくなる。これは、障がい者に対する人権侵害だ。マナーを守らない人は、人権の事はどうでもいいと思っているのか。そんな人がいるからこそ障がいに対する差別はなくなるならない。もっと思いやりを持って行動してほしい。

同じ人間である限り、傷つけたり、うばったりすることはいけない。人権を守ることは1人ではできない。だから、一人ひとりが行動することにより平等な社会を築くことができるのではないだろうか。

「高齢者福祉について」

東高等学校 2年 酒井 飛日希

私は今回自分の身近でもある高齢者福祉について調べました。

まず、高齢者福祉とは、社会福祉の一分野でとくに高齢者を対象とするサービスのことをしめし、老人福祉とも呼ばれています。広義では、高齢者の所得保障や医療保障などを含みます。日本では、人口の高齢化が世界に類を見ないスピードで上昇し、サービス受給者は増加の一途をたどっているそうです。そこで次に私はなぜ高齢者福

祉があるのかについて調べました。人が地方から都心へと流れたことで核家族が深刻となり家庭内でサポートし合うことができなくなり、1963年の高度経済成長期に施行されました。また、長年にわたって社会の進展に寄与し、豊富な知識と経験を有している高齢者が、“敬愛され”生きがいをもって健康で安心して生活できるようつくられたそうです。そのようになるために様々な制度があります。まず1つ目が保険・医療・福祉にわたる様々なサービスを総合的に利用できる介護保険法、2つ目が、高齢者の尊厳を保持し、その権利、利益を擁護することを目的とした高齢者虐待の防止、高齢者の擁護者に対する支援等に関する法律、老人の福祉に関する原理を明らかにするとともに、老人に対し、その心身の健康の保持、及び生活の安定のために必要な措置を講じ、老人の福祉を図ることを目的とする老人福祉他にも、福祉用具の研究開発及び普及の促進に関する法律、高齢者、障がい者等の移動等の円滑化の促進に関する法律、厚生年金保険法、国民年金法、高齢者の居住の安定確保に関する法律、高齢者等の雇用の安定等に関する法律、高齢者の医療の確保に関する法律などたくさんあります。

私は今回、高齢者福祉について調べて初めは、介護センターがあるということぐらいしか福祉の制度についてしらなかったもので、こんなにもたくさんあったということに驚きました。また高齢者福祉ということばは知っていたけど、内容などはほとんどしらなかった所以他にもたくさん知りたいなと思いました。

「高齢化社会」

東高等学校 2年 須藤 佑理

「福祉」と聞いてまず思いついたのが、「高齢者」でした。だから今回は、それについて書こうと思います。

近年、問題となっているのは高齢化社会です。高齢化が進んでいる理由は、医療技術の進歩により平均寿命が延びたことがわかりました。

私には、大好きな祖父と祖母がいます。月に1、2回学校帰りに会いに行っています。祖父は80歳で祖母は76歳です。祖父と祖母はお米を作っています。ですが、2人とも足が悪く思うように動けません。そんな2人を見ているとほんとに大変そうです。私が「手伝おうか？」と言っても「手伝わなくて大丈夫よ。」といつも言います。頑張って作ってくれているのに、何もできないことが悔しいです。足が悪いなか、毎年おいしいお米を作ってくれているので、ほんとに感謝でしかありません。私にできることは、落としたものを拾ってあげるとか、片付けをしたりとか、歩くときにサポートするとか、楽しいお話を聞かせてあげることです。楽しいお話をすると笑顔で聞いてくれます。そんな2人が大好きです。私には祖父や祖母のしんどさが全部わかってあげられなくて、少し手伝うことしかできません。足を痛そうに歩いている姿を見ると私の心まで苦しくなります。なので、私にできることを精一杯サポートしてあげたいです。祖父と祖母に会えたときは必ず明日も学校を頑張ろうと思わせてく

れます。だから、祖父と祖母のためになにかできることはないかと日々考えています。

これから高齢者が増えていくなかで、高齢者の方にとって住みやすい環境や社会を作るべきだと思います。未来を担う私たちが変えていかなければならないと思いました。みんなが変えていくにはそれぞれ身近な高齢者の方のことについて考えるべきだと思います。これからの社会で高齢者の方が安心して楽しく笑顔で過ごせるようにしたいです。そして、祖父と祖母を大切にしたいです。

「バリアフリーとユニバーサルデザイン」

東高等学校 2年 高辻 佳乃羽

皆さんは、バリアフリーとユニバーサルデザインを知っていますか。バリアフリーとは身体の不自由な人や高齢者の方が社会生活をしていく上で障壁になるものを除去することです。ユニバーサルデザインは、文化・言語・国籍や年齢・性別・能力などの違いにかかわらず、出来るだけ多くの人が利用できる「すべての人のためのデザイン」「皆に優しいデザイン」のことです。

私も、ユニバーサルデザインを実際に目にしたことがあります。例えば、ユニバーサルデザイン自動販売機では、車椅子の方にも負担なく、簡単に使用してもらえるように、飲み物の種類ごとに番号をつけて、低い位置に設置しています。シャンプーの容器の突起もユニバーサルデザインです。これは、触っただけでリンスの容器と区別するためにあります。リンスの容器には、突起がついてありません。目の不自由な人だけではなく、頭を洗っているときなど目をつぶっている場合にもシャンプーとリンスを区別することができます。

他にも、バリアフリーでは、点状ブロックがあります。視覚に障がいのある人に道を案内するために、駅や道路などには点状ブロック、線状ブロックが設置されています。駅のホームの端に設置されている点状ブロックでは、線路への転落を防ぐため、ホームの内側が区別できるように内方線をつけています。よくみかけるスロープもバリアフリーです。スロープをすることで、段差がなくなり、足の不自由な方や高齢の方が歩くときにも、転倒の危険を軽減することができます。スロープでは、車椅子、ベビーカー、自転車などの車輪の付いた乗り物でも移動可能なため、安全に移動ができます。他にも、たくさんのバリアフリー、ユニバーサルデザインがあります。

私だけではなく、住んでいる人皆が、これからもバリアフリーとユニバーサルデザインのことを意識して、一人ひとりが心のバリアフリーを実践することで、住みやすい町になってほしいです。

「福祉の町づくり」

東高等学校 2年 高橋 甘奈

私は、新居浜市がどんな風になっていけば住みやすく、居心地の良い市になるのか考えました。障がいを持つ人や、妊婦さん、体の不自由な人が過ごしやすいようにするには、さまざまな工夫が必要だと思いました。

例えば、目の見えない方は点字ブロックや音声付きの信号機。耳の聴こえない方は、駅などに電光掲示板があるなど、さまざまな工夫がされています。障がいを持つ人の他にも、小さい子どもや、お年寄りの方もいます。お年寄りの方は、ベンチが多くの場所にあると、休憩ができるのでいいのではないかなと思いました。

お隣に住んでいる方がどんな方なのか、何か困っていることはないか、お互いに声をかけ合える地域になっていけばいいなと思いました。結婚して子どもを産んで、そして歳をとっても最期まで住み続けたいと思えるような町の姿が、福祉の町だと思います。

私の知り合いに、目の不自由な人がいます。その人は、今1人で暮らしています。目が見えないのに1人で生活していけるのだろうかと思う人もいるかもしれませんが、困っていることはあまりないそうです。最初は、家の中も歩くことが怖かったけれど、何年も住んでいれば、家具の配置や、家の中の構造を覚えて、すらすらと歩けるそうです。外に出ても、点字ブロックがあるため、とても助かっていると言っていました。誰かに感謝されるバリアフリーを作った方は、とてもすごいなと思いました。

新居浜市にも、点字ブロックや音声付きの信号機があるので、安心しました。たまに、点字ブロックの上を走っている自転車があるので、なるべくやめてほしいなと思いました。

福祉の意味は「幸福・幸せ」という意味です。ボランティア活動をすれば、人に幸福や幸せを与えることができるかもしれないので、ボランティア活動について調べたり、知っていこうと思いました。住んでいる人みんなが、これからも住み続けたいと思える町になればいいなと思いました。

「福祉を学ぶ」

東高等学校 2年 高橋 匠馬

私は職場体験などを通して、2回だけ福祉に関する施設にお邪魔させていただいたことがあります。どちらも、とてもいい経験になったので、ここに綴ります。

1回目は、中学2年生のときです。そのころから福祉系の職業に興味をもっていた私は、職場体験でとある福祉施設に行き、いろんな形の福祉を3日間にわたって学びました。

初日、私たちは障がいのある方が集まるところで仕事をさせていただきました。外

に出て散歩したり、みんなで一緒に遊んだり、個人のお世話をしたりと、とても充実してかつ楽しかったです。

2日目、今度は高齢者たちのフロアで働かせていただきました。おじいさん、おばあさんのぬり絵を見てあげたり、一緒にお話ししたり、とってもあたたかくなった1日でした。

最終日、最後は小学生たちのお世話をしました。宿題を見てあげたり、一緒におままごとをしたり、みんなでテレビを観たり、この日もすごく楽しい1日となりました。特に印象に残っているシーンは2日目で、あるおばあさんが戦争の話をしてくださいました。そこで何度も空襲にあたりして戦争の恐ろしさを改めて実感しました。私は自分の祖母の話もよく聞いているのですが、やはり勉強になる、ためになるなと思います。

2回目は高校1年生のときで、この時は母の職場にお邪魔させていただきました。その施設では、特殊な事情で1日中家で過ごすことができない子どもたちのお世話をする施設で、私はそこで計4日間、お手伝いさせていただきました。内容は控えますが、こちらもたいへん勉強になりました。職場の人にお話を聞いたり、一緒に働いたりして、また一歩成長できたと感じました。

私は将来、なんらかの形で福祉に携わることができる職業につきたいと思っています。今までの経験からいい思い出をさせていただいた恩返しのようなことをしたいです。

「福祉の大切さ」

東高等学校 2年 高宮 暁葉

私は初め福祉とは、ただ単純に高齢者の手助けをすることだと考えていました。また自分に関わることがないだろうと全く福祉について興味を持っていませんでした。でも私が中学生の時、友達に「一緒に福祉のボランティアに行かない？」と誘われました。でも当時の私は自分には向いてないし無理だと思い込んでいました。しかし、実際に福祉のボランティアに参加し、自分自身で体験してみると想像とは全く違い、自分にもできると気づきました。私が実際に体験したのは、自分が車イスに乗って階段を昇り降りしてもらったり、車イスを押してスロープや階段を昇ったり降りたりしました。自分が車イスに乗っている時はほんとに不安定でとても怖かったです。少しの揺れでも乗っている人には伝わってしまうことがわかりました。また、乗っているだけは楽だと思っていたけどそれは間違っていて、不便なことがたくさんあると気づきました。また車イスを押している時は思うように方向転換が出来づらくて一つひとつの動作に気をつけなければならないことがわかりました。普段目になっていることも実際に体験してみるとその人にしかわからないこともあるんだなと思いました。他にも腕や腰などにおもりをつけ、視界が見えづらくなるメガネをかけて廊下を歩く体験もしました。体が思うように持ち上がらなくて、常に腰が曲がってしまうのですぐに

疲れてしまいました。また視界がよく見えなくなるので下にある段差などに気づくことが出来ず、転けそうになったりもしました。私は体験を通して自分たちが想像している以上に大変だとわかりました。また福祉とは私たちにも関係のある事だと思いました。人々が支え合って生きていくことの大切さや将来自分にも関わることだと気づきました。体験する前の私は高齢者の手助けをするだけだと思っていたけど本当の福祉は人々がお互いを大切に常に思いやりを持つことで成り立っているのかなと思いました。私はこれからも福祉を大切にまたボランティアにも積極的に参加していきたいと思いました。

「高齢者体験をして」

東高等学校 2年 武内 大知

僕は、中学生の時に「高齢者体験」をしました。その時に思った事とその後について書きたいと思います。

まず、「高齢者体験」は視界が狭く、体が重かったのを覚えています。すぐに息切れしてしまいとてもしんどかったのを覚えています。高齢者になると、とても体が重くなり思考能力も落ちてしまうのかと衝撃を覚えていて、こんなにも体が衰えてしまうんだなと少し怖くなりました。高齢者に僕もなっていくのは必然ですが、ギリギリまで元気でいたいものだと思います。特に、中年頃にどれだけ運動を習慣化できるかが問題だなと思いました。それは、健康と運動は切り離せないものだからと思っているからです。

ですが、病を患っている場合は別問題だなとよく分かることがありました。僕には祖母がいたのですが今年の5月に亡くなってしまいました。とても元気な人で「高齢者体験」をしたけど本当に再現されているのか疑うぐらいに活発な人でした。自分はとてもお世話になったし、16年間ずっと一緒に暮らしてきた家族でした。ですが2年ほど前に体調を崩してから寝たきりになってしまい、僕はあんなに元気だった祖母が細くなっていく姿に不安になりました。けれど亡くなってしまった時には、あの体験で感じた重さや視野をこんなに長く生きた祖母はやっぱりすごいと思いました。身近に感じることの無かった、あの高齢者体験が家族に当てはまってから考え方が変わるなんて、自分はバカな人間だなと思いました。今でもあの時に何かしてあげられていたらなと思うと自分が憎くなる事がありました。自分は人一倍、気配りをしている気でいましたが大切な人が大変な時に何が自分にできるのか、もっと考えて行動すればよかったなと思います。

そして、「高齢者体験」を身に染みて感じて僕は、これから先にできる事は、日常の事で若い人たちより体力を使う高齢者に気を配れるように、何でも良いから力になれるように行動できる人間に、少しでも高齢者が楽しんで生きる事ができる世の中になってほしいと思いました。

「思いやり」

東高等学校 2年 手島 凜奈

私は、老人ホームの老人の方が暴行にあうというニュースを見たことがあります。私は、その時は怖いな、くらいにしか思っていないでして。でも、こうして作文を書く機会があり、このニュースを思い出しました。

私は、暴行をしたニュースを見て、かなり衝撃的でした。私は、お年寄りの方を殴るなんて考えられなかったからです。最近、少子高齢化がどんどん進んでいます。なのに、このような事件があると、預ける側も不安になると思うし、してはいけないことです。私には、祖父と祖母がいます。私は、小学校2年生の時に、母の方の祖母を病気で亡くしています。私は、その時に大変そうな母の姿を見てきました。介護する方の変さもすごく分かります。ですが、殴ることは絶対にしてはいけないし、した人に腹立たしい気持ちでいっぱいです。介護は、人と人がつながる良い場でないといけないと思います。私は、前にも出てきた通り、祖母を病気で亡くしています。介護士の方がしている仕事内容は、着がえ、食事、入浴、排せつ、レクリエーションなどです。私は、少子高齢化で介護士の方が少なくなっているのも問題だと思います。こんなにたくさんの仕事をこなしているのに人手不足では、高齢者が増えてどんどん大変になっていくと思います。

私は、将来看護師になりたいです。理由は2つあって1つ目は、人の命を1人でも多く助けたいです。2つ目は、お年寄りの方と話すのが好きだということです。なので、将来介護士も良いと思いました。私は、私がお年寄りになった時、これ以上高齢化が進むと、私にも介護が回ってくるのか不安になります。しかし、このような問題に直面しても問題のないよう、介護についてしっかり学んで、後の代にも広めることが大切だと思います。私は思いやりを持って、これから生活していきたいです。

「辛い思いの人が減るために」

東高等学校 2年 寺尾 朋華

私は、よくニュースやネット記事などで自分1人での介護や育児の大変さ、1人で全てこなすことの辛さや苦しさが話されているものを見ることがあります。頼ることのできる人が周りにいなくて助けを求めることができなかつたり、頼れる家族や友達、職場の人たちがいたとしても、責任感が強くて辛いと言い出せなかつたりと、様々な理由で1人で介護や育児をしている状況の人がたくさんいると改めて感じました。

こういったことで苦しい思いや辛い気持ちを1人で抱え込む人たちを少しでも減らすためには、実際に自分の周りでそうやって苦しんでいる人がいないかよく注意して早めに気づいてあげることや、困っている人が助けを求めやすくなるような環境を作ることなどが大切なのではないかなと思います。例えば、何か困っていそうなら積極

的に声をかけに行ったり、何も手伝えなくてもせめて話を聞いてあげたりなど、些細なことやほんの少し何か手伝ってあげるだけで少しは楽になったり元気を取り戻すことができるのではないかなと思いました。そして、そういったことを誰か1人や2人だけでも積極的にやっていく人がいれば、そこからどんどん誰かを助けようと思ったり行動に移せる人が周りに増えていって、今1人でたくさん悩みや辛い気持ちを抱え込んでいる人たちが少しは頼りやすく、助けを求めやすくなるのではないかなと思いました。

私は今まで、あまり勇気が持てずに困っている人になかなか声をかけられなかったり、逆に困っている時に誰かに助けを求められなかったこともありました。

けれど、こんな風に周りのたくさんの人が積極的に困っている人に声をかけたり手伝いに行っていれば、同じように勇気が持てなくてなかなか声をかけに行けない人でも、行動に移しやすくなると思います。私も、今までは勇気が持てなくて行動できなかったり、積極的になれなかったけれど、これからは困っている人を見かけたら絶対に声をかけに行くようにしたいと思いました。そして、今よりも少しは、たくさんの方が助けを求めやすい世の中になって、苦しんでいる人が1人でも減ったらいいなと思いました。

「誰もが自分らしく生きていくために」

東高等学校 2年 西岡 恋桜

みなさんは、福祉についての映画をみたことがありますか？私は、福祉についての映画を何作か見たことがあります。その中で1番心に残っている映画は「こんな夜更けにバナナかよ」という映画です。この映画は、実話でとてもおもしろくてでもとても感動します。

この映画は、鹿野靖明さんが幼いころから筋ジストロフィーで首と手しか動かせない病気を抱えていて自ら自立して生活するためにボランティアを募ります。そこでたくさんの方のボランティアと関わっていくなかで介護される側と介護する側ではなく、人間同士対等に向き合う関係になっていきます。鹿野さんを通してボランティアの人達も自らの気持ちを発信することで鹿野さんとぶつかりあいながらも色々な経験をし、お互いに人間的に成長して障がいがあることで生まれる心の壁を取り払ってくれる映画になっています。

鹿野さんは、夜中に「バナナ買ってきて。だって食べたいもん。」と言っていろいろわがままを言っているところもありましたが、それでも障がいの有無に関係なく「これが俺なんだ」、「自分らしく生きたい」と言うようなまっすぐで、自分に正直で素直な生き方をしているそんな障がい者を支えたいと思っている人達がいてとても感動しました。鹿野さんは、障がいがあることを前向きに、楽しそうにしている姿に元気をもらえます。

首と手しか動かせないため、トイレに自分で行けないし、恋をするのも簡単なこと

じゃなくてとてもあたり前にできることでもできないことがあります。その本人のたくさんの変さや悲しさ、虚しさまでくわしく表現されていてとても心にささりました。それにタイトルに「愛しき実話」とついていてとくにとても感動しました。

私は、福祉についてあんまりくわしくないし、ボランティアにも行ったことがないのでこの映画を見て、これからは、福祉のボランティアに行ってみたいと思いました。それに人は1人ではいきいきできないから、自分ができることで、相手のできないことをフォローすることが大切だと思います。だから、まずは、障がいをもっている人を見たら、自分ができることはして、支えていきたいと思いました。

「福祉について」

東高等学校 2年 服部 朱里

「福祉」とは、「ふだんの・くらしを・しあわせに」することです。みんなが、幸せに暮らせるように、仲良く、思いやりをもって支え合い、誰かのために行動することが「ふくし」です。

私は中学生のときに、何かボランティアに参加したいと思い、高齢者の方々と交流する福祉施設のボランティアに参加しました。車いすの体験や高齢者の方々との交流は初めてで緊張したのを覚えています。他の中学校の子と同じ班だったけれど一緒に高齢者の方々のご飯の準備をしたり、たくさん会話もしました。実際に高齢者の方が乗っている車いすを押してみたり、目の悪い人の体験をするために目をかくして歩く体験をしました。他にも飲み込むのが難しい方のために用意されているとろみの付いたお茶を飲む体験もしました。初めは少し抵抗があったのを覚えています。しかし、飲み込むのが難しい方がどのような物を飲んだりしているということが分かりました。車いすの押し方にもやり方がありました。段差の所や、昇り降りの時には、目が悪いと「今から段差」ということなどが分からないので、声をかけながら車いすを押すことが大切なんだということを知りました。

高齢者の方々との交流を通して、たくさん「ありがとう。」をもらいました。初めは何かのボランティアに参加したいという思いだけで参加したボランティアでした。だけど、多くの高齢者の方と交流していく中で、普段の授業では学習しないようなたくさんのお話を学びました。例えば、車いすに乗っている人が怖い思いをしないように少しでも話しながら押すことや、どのような施設の環境で生活しているかなどです。今はコロナの時代であまりボランティアが無いけれど、当時はとても貴重な体験になりました。また、高齢者の方に教えてもらったことも多くありました。もしも将来、誰かのことを介護したり、車いすを押すことがあったら、学んだことを生かしながらやりたいと思いました。そして体験するようなことがあったら、ボランティアをやりたいです。

「ヤングケアラーの実態」

東高等学校 2年 平岡 大河

この日本に「ヤングケアラー」というものが存在していることを知っているだろうか。ヤングケアラーとは、本来大人が担うとされている家事や家族の世話を日常的に行っている子どもたちのことだ。中学2年生で17人に1人、高校2年生で24人に1人という確率で日本にいる。また、高校2年生のヤングケアラーで平均3.8時間とかなり長めの拘束時間で家事や世話などを行っている人もたくさんいるのだ。

しかし、最近の2022年4月からヤングケアラーが政府で問題となっている。例えば、ヤングケアラーをしているせいか、自分の時間がなくなり、学校にだっていけなくなる時間がある。また、たとえ学校に行けたとしても友達とはあまり話せず、誰にも自分の悩みや本音を聞いてくれる人だつてとても少ない。だから、今とても日本で大きな問題となっているのだ。

だから、自分の悩みや本音などを自分だけで解決するのではなく、同じ思いを抱えている人たちと話すことが、1番の解決策になると思うのだ。また、最近、ヤングケアラーには支援団体が幾つか存在していて「ふうせんの会」や「ほっと一息タイム」、「ヤングケアラー協会」等、自分と同じ状況で悩みを抱えている人たちが、話し合いをしたり、自分の悩みを打ちあけあったりするのだ。また、こういう悩みを打ちあけられるような環境があることで自分は、「また明日もがんばろう」と思えるようになるのだ。

ヤングケアラーは、ほとんど介護をしたりお世話をしたりと自分の時間が全くないのだ。しかしそれによって、ストレスや不満を爆発したり、子どもも大人も無理をすれば心も病んでしまい、身体だって壊してしまうのだ。だから、今一度、自分で解決しようとするのではなく、同じ気持ちを持っている人達と話し合いをし、「また明日もがんばろう」と思えるような日をつくることも大事なのである。

「バリアフリー」

東高等学校 2年 藤原 弘麒

僕は、福祉と聞いてもなんとなく分かるだけで、どんな事をしているか詳しく知りませんでした。福祉と聞いて思い出した言葉はバリアフリーです。バリアフリーとは、社会生活する上で生活の支障となる物理的な障害や、精神的な障壁を取り除いた事物および状態をしめすことだそうです。バリアフリーは身近な所でいくと、点字ブロックやスロープ、音のなる信号機など身近な物でもたくさんものがあります。僕が何気なく使っていたスロープや音のなる信号機などたくさんあって驚きました。しかし、体が不自由な人からすれば、こういうのもすごく大切なんだなと思いました。もし、自分が体のどこかが不自由で日常生活が苦しい場合でもバリアフリーのものがあるおかげで、目が不自由な人は点字ブロックで歩きやすくなったり、音のなる信号

機で目で見なくても信号の色が赤か青かもわかったり、足やこしなどが悪い人は上りにくかった階段のかわりにスロープで上りやすくなったりとなっています。この事を知って僕は、少子高齢化などもあり、お年寄りが増えているので、日本全体にバリアフリーが増えているんだと思いました。日本は今、バリアフリー化が進んできましたが、日本人のバリアフリー化は進んでいないと思います。なぜかという、バスや電車の中などで席を譲る人をあまりみないからです。自分が体が痛かったり、不自由だったら席を譲って欲しいです。優しい人ならいいですが、席を譲るには勇気がいることなので、席を譲る人が少ないんだと思いました。なので、このような問題を解決することで、人も環境もともにバリアフリー化し、より良い社会になると思いました。

僕はバリアフリーについて調べて思ったことは環境をバリアフリーにするのも大事ですが、人の心をバリアフリーにしたなら今よりもっといい社会になると思いました。

「ふくしについて考える」

東高等学校 2年 保利 夢斗

「ふくし」という言葉は、今まで耳にしたことはあったけど、説明してと言われるとできませんでした。そこで、これを機に調べようと思いました。

すると、自分が想像していたのとは、違った答えが出てきました。僕は「福祉」と聞くと、勝手に「障がい者」や「老人」などが思い浮かび、そういった人達の手助けをすることだけが「福祉」なのかと思ってました。しかし、トップに出てきたのは、「幸せ」でした。僕は「なるほどな」と思いました。福祉とは、特に、公的扶助により、生活の安定や充足のことを指し、人々の幸福で安定した生活を公的に達成しようとするのだと知りました。長い言葉で難しく聞こえますが、つまり、福祉＝幸せ（幸福）のことです。

僕は福祉について調べる前と後では、とらえ方が全然違うことに気づき、おどろきました。調べる前は、どちらかというと暗いマイナスなイメージでした。しかし、調べてみると、明るいプラスのことだと思えるようになり、もっともっと福祉について調べて、知りたいと思いました。

僕は今回の実体験を通して、あることに気づきました。それは、「思い込みが生む差別もあるんじゃないか」ということ。僕が今回福祉について持っていた勝手なイメージや印象。それが、今の世の中にある「差別」にもあると思いました。

例えば「黒人差別」。特に海外で、白人が黒人に対してひどい暴言、暴力をふるったり、警さつ官が黒人を殺害するケースもありました。そんな黒人差別も、誰かが放った一言が始まりだったり、昔あった出来事を今の今まで引きずって差別をしています。差別をしている人の中には皆がやっているからと、周りに合わせている人もいます。そんな人達こそ、差別を絶対許さない側の人間になり、そういう人が増えてほしいなと思いました。

今回、この作文を書いたことで、今まで気づけなかったことに気づくことができ、よかったです。これからも、詳しく調べて、いろんな人に広げていきたいです。

「ボランティア活動を通して」

東高等学校 2年 眞鍋 心羽

私は高校2年生になってから、友達に誘われてあるボランティア団体に加入しました。加入後、初めてのボランティア活動は地域の広場で行われる夕涼み会のスタッフとして食べ物を売ったりするボランティアでした。その活動を通して、私は感じたことがたくさんあります。

私は中学の頃は、あまりボランティア活動に参加したことがなく、初めての活動だったのでとても緊張していました。現地に着くと、テントを建てたり商品を作ったりと思っていた以上に大変で、お昼頃にはたくさんのお客さんで行列になっていました。未経験の私にとって上手く接客することは難しくてすごく困っていました。その時、ボランティアサークルの先輩が隣に来てサポートしてくれたり教えてくれたりしました。不慣れなことをしていて、すごく困っていた私にとって先輩のサポートはすごく有難かったです。

ある程度の時間が経って、慣れてきたときに1人で接客をしていると、お客さんが「暑い中おつかれさま。ありがとうございます。」と言ってくれました。その後も食べ物を渡したりする度に「ありがとうございました。」とお礼を言ってくれる方がほとんどで、何気なく言ってくれている言葉でもすごく嬉しい気持ちになりました。

私は人生で初めて物を売るというボランティア活動を通して、人に支えられて生きているんだなと実感しました。例えば、困っていたら先輩が助けてくれたり、商品を渡すとお客さんが「ありがとう。」と言ってくれたり、1人でできないことも周りの人に助けられて出来るようになっていくなど感じました。いつもの自分とは逆の立場に立って活動して、言葉を伝えることの大切さやそれがどれだけ嬉しい言葉なのかも知ることが出来ました。そしてボランティア活動がどれだけ人の役にたっていてやりがいのあることかを知ることができました。自分も嬉しい気持ちになるし、お客さんにも喜んでもらえるボランティアはとても良いものであり、「誰かのために活動する」という、まさに福祉そのものだなと感じました。

ボランティア活動を通して学んだことをこれからの生活に生かしたり、もっとたくさんの方々の場所で活動に参加したいなという意欲がより高まった1日でした。

「バリアフリー」

東高等学校 2年 真鍋 凜

現在の社会には、「バリアフリー」があります。「バリアフリー」という言葉は、もともとは建築用語として道路や建築物の入り口の段差など物理的なバリアの除去という意味で使われてきたけど、現在では、障がいのある人や高齢者だけでなく、あらゆる人の社会参加を困難にしているすべての分野でのバリア障壁の除去という意味で用いられています。

街中の「バリアフリー」といえば、路上の放置自転車、狭い通路、急こう配の通路、ホームと電車の隙間や段差、滑りやすい床、座ったままでは届かない位置にあるものなどがあります。

私たちが暮らす社会には多様な人がいます。外見や性格、価値観、能力も人それぞれちがいます。年齢や性別、国籍、仕事、うけてきた教育や宗教、育った環境など様々です。多様な人がいるのにも関わらず、多数を占める人たちにとって、不便さや困難さを生むバリアとして存在しています。

そして「ユニバーサルデザイン」というものがあります。「ユニバーサルデザイン」とは、文化、言語、国籍や年齢、性別、能力などの違いにかかわらず、出来るだけ多くの人が利用できることを目指した建築、製品、情報などの設計であり、またそれを実現するためのプロセスです。

ユニバーサルデザインの例は、歩道や公園入り口の段差解消、多機能トイレ、シャンプー容器の突起、料金投入口の大きい自動販売機、文字がついたアルコール飲料、センサー式蛇口、ピクトグラムなどがあります。

現在の社会は、身の回りのもので支えられています。障がい者や高齢者の方はもちろんのこと、全員が暮らしやすい便利な生活ができるように工夫され、新たに開発されています。みんなが利用しやすく安全な日々を送れるようなものをいっぱい開発してほしいです。

自分に何ができるのか、自分には1人でも助けてあげられることができるようになりたいです。

「福祉について」

東高等学校 2年 真鍋 月音

私は、「ふくし」についてあまりくわしく知っていなかったので改めてSNSなどで、調べて知ることができました。私は「ふくし」といったら高齢者の方のことにしか頭にありませんでした。しかし、身体的に不自由な方であったり、小さい子どもなども「ふくし」に入ることは知りませんでした。

私が小学校の頃、身体的に不自由な方の体験をしました。私は、どれだけ大変なことなのかを味わうことができました。私が体験したことは、足の不自由な方の体験をし

した。両足を使わず、正座をして車いすに乗りました。スロープを下ったり、上ったりしてとてもこわかったです。段差につまずいてしまうと、車いすから落ちてしまう可能性もあります。バリアフリーは、とても大切なのかを感じることができました。恐怖や不安をいただいているのにもかかわらず、毎日の日常生活を送っているのは本当にすごいことだなと思いました。

そして私の祖母はデイサービスに通っています、最初は、行きたくない気持ちがいっぱいになり、私たちにあたり怒ってくることもありました。しかし、デイサービスに行くことにより、こんなものを使ったよ、など私たちに話をしてくれている時は、笑顔があふれていました。1人の人を笑顔にすることは、私もうれしくなることでもあるからすごい良い事なんだなと感じることができました。デイサービスのスタッフさんたちは、高齢者の方のお世話はもちろん、それにプラスして人を笑顔にすることがどんなに良い職業なのかを学ぶことができました。私は1人でも多くの人を笑顔にし、楽しい生活が送れると良いことだなと思っています。どんなに大変であっても、楽しませることができる介護士さんはすごいなとおもいます。

このように、身体的な不自由な方の立場に置きなおして経験したことを生かして相手のことを考えたいと思いました。改めて「ふくし」についてくわしく知ることができて良かったです。将来、人を笑顔にすることは必要なことでもあるので、人を笑顔にできるような行動をとりたいと思いました。

「肌で感じた福祉の大切さ」

東高等学校 2年 持主 膳

夏休みの宿題で福祉の作文を書く宿題が出されました。しかし私にはとくに体験談がないのでどんな内容を書こうか考えていました。そのとき小学生のときに地域の福祉センターを訪れたときのことが頭にうかんできました。

私は小学生のとき学校の行事で福祉センターを訪れました。そこではバリアフリーや点字、高齢者体験などを学びました。まず最初にトイレを見学しました。そこには普段私たちが使っているトイレとは異なる形のトイレがありました。他にもトイレの中がふつうのトイレとは違って広くなっていたり、トイレ内のあらゆるところですりが付けられていて高齢者や障がいのある人が使いやすいような工夫が施されていました。そのトイレがあるおかげで高齢者や障がいのある人がスムーズに使用できるそうです。トイレに行くことに障壁があると安心した生活をおくることができなくなるのでバリアフリーはなくてはならないものだと思います。その次に点字について教えてもらいました。点字は目が見えない人に向けて作られていて実際にさわらせてもらいました。しかし紙につけられた点を指先だけで感じ取るのは至難の業でした。普段私が目で見て得ている情報はとてもおおきなものだと思えました。点字以外にも白杖というものも見せてもらいました。白杖は目が見えない人が歩くときに使うもので、音や振動で歩くところを知らせてくれると教えてくれました。福祉センター

を訪問したなかで特に印象深かったことは、高齢者体験でした。高齢者の体にちかづけるために体に重りをつけて目に特殊な眼鏡をかけて関節には曲げにくくなるものをつけ福祉センターの中を一周してくるというものでした。なんと私は階段で足をつまみずいて転びそうになりました。そのときはすりを掴んでいたため転ぶのを免れました。私は活動を通して初めて高齢者が感じる体の動かしにくさ、目の見えにくさ、そして障がいのある人の生活を支えるバリアフリーの大切さ、福祉の大切さを知ることができました。

今回作文を書いたことで当時のことを思いだし福祉についても考えることができました。これからは自分のことだけではなく周りで困っている人に手をさしのべる人になりたいです。そしてみんなが笑顔でいられるように普段の暮らしを幸せにしていきたいです。

「福祉はみんなの幸せのためにある」

東高等学校 2年 矢野 隼士

僕は福祉といえば高齢者の介護施設などのイメージが強いです。他にもボランティアなどだれかを手助けする印象があります。福祉という言葉ネットを調べてみると、幸せやゆたかさを意味する言葉でした。

僕は介護の体験などをしたことがないのですが、テレビの番組で介護士の仕事に密着した映像と24時間のチャリティ番組を見たことがあります。見て思ったことは福祉関係の仕事はやりがいがあるなと思いました。困っている人を助けることで人が笑顔になっていく姿はとても感動しました。でも、介護士さんの仕事内容はとても忙しくストレスがたまりやすいとも言われていました。他にも少子高齢化による人員不足などにも悩みをかかえている人も多いようなので、介護士の給料を上げたり、対策が必要だなと思いました。今後、僕の家族や友達に支援が必要な状態になった時に介護をしてくれる人が足りないと不安です。なので僕は将来、介護士になっていなくても困っている人に気づいて手助けできるようになりたいです。そのためには、ボランティアをやってみたり、おじいちゃんやおばあちゃんの手伝いをしてみようと思いました。他にも、日本以外では学校に行けない子供がいることも問題だと思っていて、日本で当たり前のことが世界ではそうではないことは不平等だと思います。幸せに生きるためには、教育や食料、健康などが必要だと思うので、寄付やボランティア活動はとても素晴らしいことだと思います。今の自分にできることは少ないと思うので大人になったら募金などをコツコツしたり、まわりの人やインターネットを通して大勢の人に声をかけたいと思います。一人ひとりが家族や国、世界のために考えると自然と福祉に対して関心を持ったり重要性について理解できると思うので、もっとまわりの人と福祉について積極的に話をして特に介護や世界の貧困などの問題と向き合って少しでも解決に近づけたいと思いました。

「福祉について」

東高等学校 2年 山内 大輝

僕は、福祉についてよくわからなかったので、調べてみました。

福祉という漢字は「福」にも「祉」にも「幸福」や「しあわせ」という意味がありました。だから、福祉とは、人を幸せにすることだと思いました。

福祉と人権には深い関係がありました。人権とは、人なら誰しもが持っている「幸せになること」をさまたげられないように保障するという権利を表すからです。

福祉を阻害する社会福祉問題というのがありました。社会福祉問題とは、人の幸せを阻害するモノやコト全般のことを指します。

福祉教育というものがありました。福祉教育とは、人の幸せを阻害するモノやコトとは何かに気づき、それを軽減したり、取り除いたりするためには、どうすればいいのかを考え、実際に行動するための力を育むことでした。福祉教育をする理由は、社会福祉問題に対する理解とそれに対して実際に行動できる力を育むという目的があります。この福祉教育で福祉に対する理解を深め、実際に行動に移せる人が増えていけばいいなと思いました。

福祉のひとつとして、ユニバーサルデザインというものがありました。ユニバーサルデザインとは、障がいを持っている人だけでなく、誰にでも安全に使いやすいものや空間のことを呼びます。例えば、耳の聞こえにくい、聞こえない人たちの中では手を使って話をする「手話」での会話があったり、目の見えない人には、文字を点字に変えたりするなどがありました。

福祉について調べてみて、福祉とは普段の暮らしを幸せにする手伝いをするのだと分かりました。

これからは、町中でユニバーサルデザインを探したりして、どういう人が使ったりするのか、考えてみようと思いました。福祉のことをいろいろ調べて、知ることができたのでよかったです。

「福祉について」

東高等学校 2年 山中 咲嬉

私は、小学生の時に、高齢者の体験をしました。目にサングラスをかけ、手には軍手をして、体験をしました。すると、高齢者は視界がせまく、小さい文字などがとても見にくいことが分かりました。手には軍手をしていたので、とても指先が使いにくく、新聞や雑誌がとてもめくりにくかったです。高齢者は車いすなどでも生活しているため、ちょっとした段差を登るのも一苦労なんだなと思いました。私のひいばあちゃんが車いすに乗っているのも私が車いすをおしてどこかへ行くときは、バリアフリーとかがなかったり、段差が多いところなどはとても困ります。まだまだバリアフリーが少ないのもっと街に平らな道が増えたり、車いすの人や高齢者の人が住みやす

い街になればいいなと思います。

家族でお出かけした時に点字ブロックに立っている人や、自転車や何か物を置いている人をよく見かけます。そんな人たちが少なくなるといいなと思います。

しかし、バリアフリーには良い点ばかりではなく悪い点もあります。

良い点は、障がい者への考えが変わったことです。お年寄りや妊婦さんへの多くの人の配慮のある行動が求められるようになったことです。

悪い点は、そのバリアフリーが様々な問題を引き起こしてもいます。バリアフリーと知りながら無視する人たちもいます。

例えば、電車にある優先席。その優先席は妊婦さんや高齢者の人達のためにあるのに違う人たちが座ってしまうと、優先席の意味がなくなってしまいます。こういう人たちが少しでも少なくなると、高齢者の人や妊婦の人、障がいを持った人たちももっとより良い生活をおくれると思います。

なので、私は、点字ブロックに物が置いてあるのを見つけたり、優先席に座っている人たちを見たら、まよわず自分から注意したいと思いました。

「福祉車両と福祉について」

東高等学校 2年 山本 哲在

僕は、福祉とかかわるのはまだ先で、身近な物ではないと考えていました。ですが、福祉は思ったより近くにありました。そう、福祉車両です。僕の家近くにはTOYOTAのディーラーがあり、数回、TOYOTAの福祉車両「ウェルキャブ」が納車されているのを見かけたことがあります。

ウェルキャブには3つのタイプがあり、「シートの乗り降りをサポートするタイプ」「車いすのまま乗り降りするタイプ」「ご自身での運転をサポートするタイプ」があります。この中で一番見かけるのは、車両後部に備えたリフトによって車いすのまま乗り降りできるハイエースであり、老人ホームなどで使用されています。一番初めに書いたタイプは助手席が回転して車外へ大きくスライドダウンします。そのまま車いすになるオプションもあるようです。3番目に紹介したタイプは「フレンドマチック取付専用車」という名前で、ベース車に比べて、ステアリング操作力を50%軽減している車です。

この3つの他にも、たくさんの福祉車両があるので、学んでみたいと思いました。

「最近の福祉の問題」

東高等学校 2年 伊藤 和

福祉とは、「幸せ」や「豊かさ」を意味する言葉であり、全ての市民に最低限の幸福と社会的援助を提供するという理念を表します。

地域福祉活動の現状についての資料を見ると、近年少子高齢化や核家族、高齢者世帯の増加、価値観の多様化、生活不安の増大、犯罪や事件の深刻化などを背景に、地域社会のつながりや、地域に対する関心の希薄化が問題になっています。

また、これらに関連して、孤独死、虐待、認知症高齢者の行方不明、消費者被害、障がい者の地域移行、見守りが必要な人の増加など、地域の福祉課題が徐々に拡大しています。

一方、住民の中には、ボランティア活動に関心を持つ方や、退職後に地域を中心とした生活を送ることを望む方が増えています。しかし、これらの方が地域福祉活動の担い手につながっているわけではなく、人材の不足が解消されているわけではありません。

人材不足は多くの分野で深刻化しており、特に人手不足が深刻なのは建設業界、運送業界、介護業界です。私も介護業界が深刻な人材不足を受けていることは知っていました。

私の母は、認知症の高齢者の施設で働いています。母の職場でも人材不足の影響で母の休日がとても少なく、毎日しんどそうにしています。しかし、せっかくの休日でも急に元々仕事が入っていた人が体調不良で休み、代わりに母が入ったり、残業があったりするので母の子供である、私や弟が母の代わりに家事をすることも多々あります。私たちのような看護師の親を持つ子供だけでなく、同じように深刻な人材不足を受けている業界で働く親を持ち、家事を自分たちでする子供がいると思います。

私は福祉は、高齢者のためだけのものだと勘違いしていました。しかし、高齢者だけでなく、児童、母子、心身障がい者など、社会生活を送る上でハンディーキャップを負った人々が支援される制度であることを、この作文を書くにあたって調べたものに書かれてあり、知ることができました。

そして、支援を必要とする社会的弱者が心身ともに健やかに育成され、能力に応じて自立した日常生活を営むことができるように、誰も取り残されず支援を受けられるように願っています。

「車いすの利用」

東高等学校 2年 梅田 拓翔

日本では高齢化が進み、それとともに、高齢者の車いすの利用の増加もしているという新聞を見た。僕も最近、ショッピングモールでも車いすを利用している人をよく見る。だが車いすを利用しているのは高齢者だけでなく、障がいを持つ人や、足の不自由な人も利用している。

最近の施設では階段だけでなく、車いす利用者用のスロープができたり、専用の駐車場ができたりしている。僕はこの2つの使い方で間違っていると思ったことがある。

まずスロープでは子供が走り回ったりしているところをよく見かける。小さな子供はまだ車いす用のスロープということを知らないと思うから、親が責任をもって、車いす利用者の邪魔にならないように注意をするべきだと思った。

そして僕が特に気になっているのは、専用の駐車場の使い方だ。僕が家族と出かけていたときに、その専用の駐車場に若い男性が車をとめるのを見た。最初は後部座席に車いすを利用している人がいるのかと思った。しかし、一向に車から降りる様子はなく、遠くから車の中を見てみると、その若い男性は1人で駐車場を利用していることが分かった。そのとき僕は、いくら駐車場が空いているからといってとめてはいけないうらうと思った。また、その若い男性が専用の駐車場を使っているのて、一般の人が使う駐車場から車いすをおしている人を見た。その車いすを利用して、苦勞している様子をあの若い男性が見てどう思うのだろうかと思った。

僕はこの福祉の作文を通じて、普通であたり前のことができない人がよくいるということを知りました。車いすだけでも、思いあたることがたくさんあるのに、点字ブロックなどといったものがあるとより多くの人困るのではないかと思った。僕自身も、気をつけながら生活していきたいと思った。

「家事」

東高等学校 2年 大塚 一颯

私は今まで正直家事のほほ全てを1人でやることは少なかったです。毎日、私は部活が終わり家に帰ると洗濯物を置いて、すでにできている風呂に入り、風呂から上がれば夜飯がでてきます。食べた時に使った皿は明日にはもうかわいているという、私は今までほんとうに家事を手伝うことが少なかったです。

しかし、最近家族の私以外、全員コロナウイルスにかかり、それぞれ部屋に待機することになり、家事を私が代行することになりました。普段から私はあまりやってこなかったため、最低限の知識しかありませんでした。その知識で洗濯や、料理、その他にも色々なことをしました。全てやらなければならなかったのてとてもしんどかったです。これを毎日、ほほ全てしている母親は本当に偉大で感謝しないといけないと感じました。

今回、私は1週間、ほほ全ての家事を担当しました。今まで母親に任せていて、手伝うことすらしてきませんでした。今後は皿洗いやそうじなど出来ることから少しでいいので余った時間を手伝いにあてることができれば母親を少しでも楽にすることが出来るのではないかと思います。

ふだんのくらしをしあわせにするというのは自分がしあわせになるのではなく、周りの人もしあわせにすることもふくしなのではないのかと思います。

私は今回、家族が全員、部屋でかくりすることになり、家事をほほ全て代行することになりました。そこで私は母親が毎日どれだけ大変だったのかなど色々なことに気づく

ことができました。今回の件がなければこんなことにも気づけず、母親をしあわせに手伝うことは出来なかったのではないかと思います。

これからもたくさんの所に目をやりみんなが普通に楽しくすごせるような空間を作っていけたらなと思いました。

「体が不自由な人」

東高等学校 2年 大西 恒輝

世界には自分達のように自由に色々なことができない人がたくさんいます。その人達のことを障がい者といいます。障がい者の人達は生まれながらになってしまっていた人や大きな事故にあってしまい、体が不自由になってしまっている人が多くいます。なので障がい者の方々が少しでも楽に安全にすごせるために、もっとバリアフリーを増やしてみたらいいと思いました。

何年前かに小学生の時、体が不自由な人がいつもどんな形で生活をしているのかをみんな体験する授業がありました。実際にやってみるととてもいい経験になり、目の見えない人は、つえを使ってバリアフリーにつえでふれてあるいたり、もうどう犬を使って安全に歩くことができたりなどしました。足が不自由な人は車椅子を使って色々な所に移動したりしました。自分はどうの力が全然なくて、進むのが難しかったです。どれだけ力があるかがわかりました。

他にも数えきれないほどの色々な体験をして思ったことがあり、障がい者の人たちはみんな体のどこかが不自由なかわりにその分どこかがとてもきたえられていることに気づくことができました。だから、もっと色々な人にいつもあたりまえのようにすごせているのがすばらしいことをみんなに知ってもらいたいと思ったので障がい者の人たちがどれだけしんどくてつらい思いをしているかを知ってもらいたいと思いました。

なので、もっと体が不自由な人たちがどんなかんじなのかを知る体験を増やしてほしいなと思いました。することによって将来体の不自由な人たちを支える人になりたいなど夢をみつけられるきっかけになると思うのももっと増やして行ってほしいです。だから、世界の障がい者の人々が不自由じゃない人とかわりのないぐらいに安ぜんに暮らしていけるようになってほしいなと思っています。

「地域とのつながり」

東高等学校 2年 岡崎 姫奈

私は初めに、地域の人への挨拶がとても大切なことではないかと思いました。

私は母に「挨拶だけはちゃんとしなさい。」と言われてきて、今も言われた通り守っています。返してくれる人もいれば、返してもらえないこともあります。それでもやめ

ずに続けようと思ったのは、母が「いつも挨拶していると、自然とその人とのつながりができるでしょ。それで、もしその人がしばらく見かけないと思ったらどう思う。」とそう聞かれた私は、はっとしました。そしてこう返しました。「心配するね。」すると母は、「そんな風に気にかけるようになると、高齢のおじいちゃんやおばあちゃんは1つの生存確認になるでしょう。だから大切なんだよ。」と教えてくれました。たった一言の挨拶が、大切な地域のつながりになるんだと思い、驚きと納得をしました。

たった1つの挨拶、それが大切なことだと気付いた私はこう思うようになりました。こんな小さいことがこんなにも大切なことになるなら、どんな小さなことでも大切なんじゃないかと。

だから私は、どんな小さい小さいことだとしても、1つ1つを大切にすべきで、これからも地域とのつながりを深めていけたらいいのではないかと、挨拶を続けたいと思いました。少しずつでもつづけていくことが大切で、そのことがあまり周りに知られていないことも知り、これから周りに広めていけたらいいなとも思いました。私だけが続けていたとしても、小さな力なことには変わりはないです。だからこそ、周りと協力することも大切で、それが地域とつながり、町をおこすことにもつながるのではないかと思います。だからこそ、これからも続けて、にぎやかな町になっていけたらいいなと思いました。

「福祉」

東高等学校 2年 岡田 陽菜

私は、福祉についてあまり深く考えたことがありませんでした。でも曾祖母が病気になり人の優しさや温かさにふれました。曾祖母がお店に行く途中にしんどくなって座りこんでいる時も近くにきて横にして救急車を呼んでくれたり、当たり前のことだと思いかもしれないけどこんなにしてくれるのは当たり前のことじゃないし、すごいことだなと思いました。お風呂屋に行ったときもたおれて叔母だけだったので1人でいたらたくさんの人達が助けてくれたので祖母がすごい感謝していました。入院した時はコロナのせいで全然会えないときも近況を言ったりしてくれてたので人の温かさにすごいふれました。あまり福祉について考えたことがなかったけど福祉というものに少しだけどふれられた気がしました。

将来は看護師になりたいのでボランティアとか福祉についてもっとたくさんを知りたいです。ボランティアは看護のボランティアだけじゃなくて、他のボランティアにも行こうと思います。ある動画では日本人は優しさはもうないと書かれていました。でも全然まだ優しさはあると思います。日本では、ニュースで悪い所だけ報道されているからそう見えるだけで、日本人の人達も優しい人が大半だと思います。優しい日本でこれからもいてほしいです。平和な日本でずっといてほしいです。

福祉は、人にとってすごい大切な事だと作文を書いていてあらためて感じました。人には助け合いが必要で大切だと思いました。今はコロナとか戦争もしてるから物も高く

なったりしてるので余計に助け合いが必要だと思いました。私も人のためにはやく大人になって働いて人のことを笑顔にしたいです。子供や大人、高齢者の方も全員が笑顔で楽しい平和な世の中になってほしいと心から願っています。困っている人がいたらすぐ助けられる人が多くなっていけるような世の中になってほしいなと思いました。

「福祉問題」

東高等学校 2年 加藤 雅楽

僕は、福祉というものがどのようなものなのかあまり知らなかったので、インターネットで調べてみました。

福祉は、「しあわせ」や「ゆたかさ」を意味する言葉であり、すべての市民に最低限の幸福と社会的援助を提供するという理念を表すそうです。

社会福祉とは「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」です。社会福祉は、高齢者福祉、障がい者福祉、児童福祉、母子・寡婦福祉の4領域の1つです。

僕は、福祉についての問題を調べました。高齢者福祉が抱える問題は「2025年問題」があり、あと数年後にまで迫ってきました。「2025年問題」とは、若い世代の人口が減少傾向にある一方、75歳以上の人口が国民の4人に1人という超高齢化社会を迎えるということです。これになると、社会保障費のバランス崩壊・労働人口への負荷の増加などがあります。

介護問題では2000年は218万人であった要介護認定者数が年々増加し、2021年には687万人にまで増えました。この約20年で3倍以上増えているのでとても驚きました。これ以上また増えると考えると少しゾッとします。僕の家付近に、最近、老人ホームがたくさんできていると思います。これも要介護認定者の増加の影響だと思います。しかし、事業数の不足により、介護施設などの倒産などもあるそうです。さらに新型コロナウイルスの感染拡大でその状況を加速させていると思います。

このようなことがおきているので、解決策を考えないといけないと思います。僕は、施設を今より増やし、事業数を増やすために、いろいろな場所で募集したり、学校で介護の問題について今以上に学習するようにしたらいいと思います。デンマークも日本と同じ問題を抱えていました。デンマークでは、施設から在宅介護への転換政策をしたそうです。これを進めれば、事業数が少なくてもオンラインなどを使って介護できると思うので、いい政策だと思いました。

日本も他の国の政策を参考にし、この問題を解消できるようになってほしいです。

「高齢者」

東高等学校 2年 加藤 結衣

現在日本では高齢者の人口が年々増加しています。今の自分には関係ないと思っている人も多いと思います。しかし、高齢者のことを考えるということはとても大切なことだと私は思いました。関係ないと思っている人も自分が高齢者になった時の社会はどうあるべきかしっかり考えるべきだと思います。

私の曾祖母は、私が中学生の時まで介護施設に入っていました。私がかいに行ったとき曾祖母は介護士さんの力をかりながら歩きづらそうに廊下を歩いていました。その姿を見て、もっと色々なところに手すりがあればいいなと思いました。他にも、曾祖母の部屋につくまでにたくさん的高齢者の人がいました。その高齢者の人の中には優しそうなのニコニコしている人もいれば怒ったり大声をだしたりしている人もいました。そんな人に対しても介護士さんは丁寧に対応していたので本当にすごいと思いました。そんな介護士の方が少しでも楽になれるように移動の大変な階段もどうにかなればいいなと思いました。施設の改善だけではなく、私は曾祖母と話しているとき、楽しいことは何か聞いたら同じ高齢者の人とおしゃべりすることが何よりも楽しいと言っていました。なので高齢者同士がおしゃべりできるような場を無くしてはいけないし、もっと増やすことができればいいなと思いました。他にも、問題だと思ったことがあります。それは高齢者の1人暮らしです。1人で暮らしている人の中には寂しい思いをしていたり、家族に迷惑をかけたくないと思っている人がいるそうです。そんな高齢者の人が気軽に相談できるような場や、リラックスできるような場を増やすことも大切だと思いました。

このように現在高齢化が進んでいる中で、住みやすい環境や社会をつくっていくことが私たちのような若い人の仕事ではないかと思いました。今の私には身近にいる高齢者の人を気遣うことしかできないけれど、それも大切なことだと思うので、できることからしていければいいなと思います。これからもっと高齢者にとっても住みやすい場をつくっていければと思います。

「障がいとの関わり方」

東高等学校 2年 黒川 真太

僕は親の仕事の影響で様々なことで福祉と関わってきました。主に障がい者と交流することがほとんどでした。小さいころに障がい者の方達と会い、小さいころの僕は障がい者に良い印象をもっていませんでした。

しかし、ある時水泳の大会に出場しました。そこでたくさんの障がい者の方と交流しました。僕達のチームは1人たりなかったの僕はりレーに参加しました。そこで障がい者の方は僕達と同じように悔しがったりしているのを見て今までの自分の考え方が本当に失礼なものだと思いました。

父親からたまに、仕事での話を聞かせてくれます。そこで1つとても心に残るものが

ありました。障がい者だから優しくしてあげたりするのではなく、相手が自分でできるのであれば手助けをしたりするのでなく見守るべきだということです。なぜなら困ってもいないのに無理に優しさをおしつけられても良い気分にはならないからです。障がい者だからと接し方を変えるのは差別とも言えるでしょう。

例えば、目が不自由で白杖をつかないといけない人がいるとします。ここで「あの人は目が不自由だ。助けてあげよう。」と思うことはどんなに優しさがあっても、確実に良いことではありません。その人にとっては白杖をつきながら歩くことはあたり前のことだからです。自分の中であたり前と思っていることを無理に手助けされると良い気分にはならないと思います。

このようなことを無くすために、障がい者との接し方をもっと考えなおしていくべきだと思います。障がいも1人1人の個性だと思うのもっとそれを尊重していける社会になってほしいです。

「身近に存在するバリアフリー」

東高等学校 2年 小松 瑠奈

私は、電車通学をしているのですが、駅ではバリアフリーの物をよく見かけます。バリアフリーと聞くと小学校の頃、総合の時間に点字や車イス体験などの学習をしていて存在を全く知らない訳ではなかったのですが実際に使用する機会がなかったのであまり親しみのあるイメージがありませんでした。

しかし、最近、祖父母の家へ行くと、トイレに手すりがあることに気がつきました。今までは気にもとめていなくて気もつかなかったけれど、通学で駅を利用し始めてから改めて見てみると意外と身近で、よく行っている祖父母の家にもバリアフリーの物がいくつもあり、私は驚きました。

そこから私は、駅以外にもバリアフリーが使用されている物はどんな場所に設置されているのだろうと疑問に思い、買い物に行くときに利用しているスーパーや兄弟の習い事の観戦をしに行ったときにバリアフリーが使用されている物について気にかけて見ようと思いました。

すると、思ったよりバリアフリーが使用されている物が多く、バリアフリーを必要としている人が多いのだと考察しました。

例えば、スーパーの表示する文字が大きめに表示されていたり、光が点滅して現在位置を知らせてくれるといった工夫がされていました。公園では、車いすの方でも水を飲みやすいような水飲み場や段差解消のためのスロープが設置されていました。そして、様々なバリアフリーの物を日常で見かける中で私がすごいと感じたのは、音声案内です。音声だと目の不自由な人も安心して利用でき、なおかつとても現代的だと感じたからです。

このように、バリアフリーは町中の様々な場所に設置されており、それを必要としている人が多いのだと思うと、バリアフリーの大切さを改めて実感することができま

した。

「福祉」

東高等学校 2年 薦田 アリサ

私はふと福祉はどこまでのことを指すのかと疑問を持ちました。私は福祉といえば、高齢者を支援するものと思っていました。私は「福祉」という言葉が気になったので調べました。すると、「福祉」という言葉には、幸せや生活の安定や充実、人々の幸福で安定した生活を公的に達成しようとすることをいう意味が込められていました。私は「福祉」という言葉の意味を調べ、正しく言葉の意味を知れてよかったと思いました。私の疑問の答えは、予想以上に広いことがわかりました。福祉には高齢者だけではなく、私達も含まれていることがわかりました。ということは私が気づいていないだけで身の周りには福祉がたくさん存在していると思いました。

最近の日本の福祉についての問題がふと気になったので調べてみました。調べてみると少子高齢化、高齢者や障がい者や児童への虐待、貧困などの問題が出てきました。その問題の中で聞いたことのないような問題がありました。その問題は8050問題です。8050問題は引きこもりの若者が存在していたがこれが長期化すれば親も高齢となり、収入に関してや介護に関してなどの問題が発生するようになる。これは80代の親と50代の子供の親子関係での問題であることから8050問題と呼ばれるようになったそうです。該当している親子の親には収入がなくなっている状態であり、様々な理由から外部への相談も難しく、親子で社会から孤立した状態に陥っています。このまま放置して高齢化すれば9060問題になると言われているそうです。私はこの問題を見て驚きました。私達の知らない、気づかない所で日々様々な問題が起きていることがわかりました。皆が普段の暮らしを幸せにできることが理想ですが、少しでも普段の暮らしを幸せにできる人が増えればいいなと思いました。

この作文を書くことによって福祉について考えることができてよかったです。福祉の問題について興味を持ったので、他にも調べようと思います。

「祖母の入院」

東高等学校 2年 菰田 涼

私の祖母は一言で言えば活発な人で、怪我をしてもケロッとしている質の人だから、この人は一生入院することはないのだろうなと勝手に思っていた。その考えは中学生のとき1つの電話がかかってくることで覆えられることになった。

電話をとったのは母でしばらく問答を続けた後、あせったような顔で「ばあちゃんが入院した」と一言いった。正直今自分がどんな顔をして何を言ったか覚えていない。お

そらく予想外のことで頭が混乱したんじゃないかと思う。

車に乗って祖母が入院している病院に行って顔を見たとき思ったより元気そうで安心したのは覚えている。それから祖母の生活はもちろん、私の生活も大幅に変わった。片腕を怪我し、腕が上がらなくなり、できないことが増えた。そして、母が介護に対する電話を市役所に連絡することが多かった。初めて知ったことは介護もランク付けされていることである。まあよくよく考えてみれば当たり前のことで自身の知識のなさに1人情けなくなった。

それから祖母は週に数回介護の施設に行くことが決まり楽しそうに通っているのを見て密かに安心したのを覚えている。たまたま祖母と散歩をしていたら、介護でお世話になった先生に会った。物腰が柔らかくて人と接するのがとても上手なんだと感じた。福祉関係の仕事はとても大変だということは知識的に知っていた。直接目で見て耳で聞きそれを心底理解しようとしなかった。理由はおおよそ理解できた。無関心であることだったんだと思う。何事でもあるがこれが1番厄介だと感じた。

福祉といっても正確に定義されたものはなくそれぞれの価値観で決められるものだと思う。現に私は祖母の入院という出来事でがらりと変わった。それで知ったのは大人になったら社会の全てを受け入れるには器量がなさすぎることだ。これからいかに知ろうとするかで自分の人生が大きく変わると直感が言った。そして今、少しでも多くの知識を取り入れている。1番学んだことは、学習することに無駄はないということ、福祉はそれを象徴していることだ。

「介護」

東高等学校 2年 近藤 海南

今は少子高齢化の時代で、介護士が少ないと言われています。そんな中私のお母さんは介護士として働いています。

私は中学1年生の夏休みに何回かお手伝いをしに行ったことがあります。お母さんが働いている所は介護施設の中でもまだ軽い認知症の人や身体が不自由な人の所でした。たまに見たことがない人が来ると楽しそうにするから来てくれるだけでいいと言われていたので特に何かするというわけではなく、ゲームの準備を手伝ったり会話をしたりするだけでしたが、初めて介護施設を見て感動する所が沢山ありました。

1つ目はゲームです。お母さんが働いている所は私たちが総合の時間に行っていたように、職員さんが何人かでグループを作って毎週ゲームを考えていました。そのゲームも認知症の方向け、身体が不自由な方向けといったように1人1人に合わせてゲームを考えている所に感動しました。例えば認知症の方には、脳トレとしてじゃんけんやしりとり。身体が不自由な方には指先を軽く動かすようなゲームをしていました。

2つ目は、お母さんを含む介護士さんたちの気配りです。私が実際にいた日、入居さんが熱をだした時がありました。私は全然変化に気づかなかったけどお母さんは、その日の食事の量などを見て熱があると気づいて、すぐに部屋に連れて行き、氷などで体

温を下げたりしていました。私は入居者さんが沢山いる中でも1人1人の変化に気づけるのは当たり前のことかもしれないけど、すごく感動しました。

愛媛県では、2025年までに介護士が1000人不足すると推計されています。介護資格がない私たちができることは、誰かを助けたい支えたいという温かい気持ちを持ち、それを行動に移すことが大切だと思います。私は今回の作文を通して、改めて介護の大切さを知り、少し介護士という職業に興味が湧きました。これから介護についてもっと調べたり、身近で介護士として働いているお母さんに沢山質問をしてみようと思いました。

「これからの社会」

東高等学校 2年 下地 輝

今、日本は高齢化社会をむかえています。高齢者が増えるということはそのぶん介護者が必要になるということです。しかしその介護者が高齢化によって足りなくなってしまうのです。今まで1人に対して3人だった介護人が、高齢化が進むことによって2人に対して1人みたいな事になってしまうかもしれないのです。

この問題から、今まで介護することのなかった人たちにも関係をしていくのではないかと思います。

高齢化が進むともう1つの問題があります。それは経済です。高齢化が進むと働き手がいなくなり経済が回らなくなります。なので65歳をこえても働く人が増えていくんじゃないかと思いました。

これからの日本は高齢化をむかえて様々な問題がおきていくんだと知りました。なのでこれからはいろんな問題と付き合いながら生きていかなければいけないんだと知りました。

「誰にでも優しい世界」

東高等学校 2年 下城 七桜

私は誰もが暮らしやすい世界になって欲しいと思います。今でも誰もが暮らしやすい工夫がされています。ですがもう少し全体に気を配れるともっと誰もが暮らしやすくなると思いました。例えばペットボトルを簡単に開けられるようにする、出来るだけ階段、段差を無くしてスロープを増やす、子どもが怪我をしやすいもの、指をつめるなどの事故が起こりにくいようにするなど出来る工夫はたくさんあると思います。今でも実行されている物もあります。しかし全部が全部そうになっている訳ではありません。私はまず階段をスロープにする、手すりを必ずつけるなど階段だけになってしまっている所を直して欲しいと思います。これは老人、車イス使用者、妊婦さんなどに優しくなります。

もちろんこの方たちにだけ優しくなる訳ではなく私たちも暮らしやすくなります。私たちが老人になった時や車イスを使用する事になった時、妊娠して妊婦さんになった時などに便利になります。誰もが暮らしやすいとはこういう事をいうと思います。誰もが経験する老人生活の時、楽しく暮らせるように老人へ優しい工夫をしたいです。これはいつか自分にも優しくなってくれる工夫です。いつも誰かのためになってくれる優しい世界になって欲しいです。

また他には海外から来られた人のために、日本語以外の言語で書いている所を増やす事や、海外から来られた方も過ごしやすい地域にする事も大事だと思います。都会では英語や中国語、韓国語などが書かれている所も多いですが田舎では少ないと思います。なので田舎に来られた方に優しい工夫を増やしたいです。

このような工夫を増やす事でもっとみんなに優しく、暮らしやすい世界になると思います。誰かのためにした善行は必ず自分に返ってくると思います。人に優しくする事で世界が優しくなっていきます。なので私は誰かのためになる事、誰かに喜んでもらえる事をしたいです。少しずつもっと良いみんなが暮らしやすい世界になって欲しいです。

「高齢化社会について」

東高等学校 2年 白石 涉桜

僕は、日本の高齢化社会について思うことは、このまま進んでいくと、老人に払う年金が多くなってしまい、若者の負担が大きくなってしまおうと思うので、ダメだと思います。

そして、僕は高齢化社会の解決は、難しいと思いました。

ですが、案はあります。まず1つ目は、子育て支援施策を作ることです。保育園や幼稚園など、子育てに必要なしせつは必要だと思います。2つ目は、男女の働き方改革をすることだと思います。働き方が変わると、男女の働く時間などが減り、家庭の時間が増えるからです。

3つ目は、男女の結婚をサポートする事です。男女の結婚をサポートする事が出来れば出生率も増え、少子をなくすことができるからです。この3つの案で、高齢化を止めることが出来れば、問題解決出来ると思います。

それでも、高齢化を止めることは難しいです。なぜなら、高齢者がとても多いので、解決までに時間がかかるからです。

高齢化社会は、我々若者たちが、なんとかしないとイケない問題なので、目をそらさずきちんと向き合って、この問題に取り組んでいきます。

若者が支えると言いましたが、何ができるのかを考えてみました。すると、高齢者に、年金が行き渡るように、きちんと働いていくべきだと思います。近頃、ニートと呼ばれる、働かない人達がいることは知っていますが、それは、社会にとっては、役に立たないです。なので、日本のことを思うなら、働いて、高齢者や、これから生まれてくる新しい命を支えるためにも必要です。

なので僕は、この高齢化社会には、早く手を打つべきだと思います。長引かせて、問題にしておいておくよりも、良いと思います。これからも、この問題を考えていきたいです。

「少子高齢化について」

東高等学校 2年 白石 理雄

僕は今回の福祉の作文で少子高齢化社会について考えました。

初めに少子高齢化についてですが、子供の人数の減少と医療技術の発達によりおじいちゃんやおばあちゃん方の寿命が増加していることです。寿命が延びる事は素晴らしい事だけど、そのための対策や工夫も必要になってきます。しかし、子供が減少していているのは、近年の社会では子育てを放棄や自分の子供への虐待も目立つ様になっています。子育ての環境を見てみると、いろんな所で男の人が育児休暇を取ることができたり、スーパーなどでも子供連れの男性を見かける事が最近では多くなった気がします。まだ認めてくれない所もある様ですが、育児休暇取得率は女性81.6%で男性は12.65%と年々上昇傾向にあります。

では、なぜ年々子供の数が徐々に減少傾向にあるのか。それは、社会的な面や金銭的な面、望んでいない妊娠などが原因と言われていました。しかし、近年では子育ての援助金の支給や先ほど言った育児休暇の環境作りにより子供が育てやすいものとなっていきました。

次に日本の平均年齢ですが48.6歳と世界で2番目という事が分かりました。他の国の人口ピラミッドを見るとピラミッド型やつりがね型がある中、日本ではつぼ型になりつつあります。高齢者が多くなっているのです、そのためにも対策をとっていくべきです。近年では、バリアフリーの設置、点字の活用、老人ホームでは非常ボタンや転覆防止、床を柔らかくする等の対策、信号機の変化や補聴器の進化など過ごしやすい暮らし作りをたくさんの方が頑張っています。

最後に、日本はそもそも人が少なくて地震や噴火、台風も多くて大変だけどその時々で対策をとったりして国全体で進化しているので僕も将来、医療関係にいたいから頑張りたいです。

「バリアフリー」

東高等学校 2年 高岡 春菜

バリアフリーという言葉聞いて、私が1番最初に思い浮かべるのは高齢者が生活しやすく作られている建物を思い浮かべますが、みなさんは何を思い浮かべますか。みなさんはバリアフリーについてどのくらいの知識を持っていますか。

私がバリアフリーについての作文を書こうと思ったきっかけは、友達の新築を訪ねた際に小さい子供から高齢者まで幅広い年齢層に応じて建物が工夫されていたからです。そこで私はあらためて「バリアフリー」について調べてみました。「バリア」とは障壁、「フリー」はのぞくという意味を持っており、つまり障壁となるものを取り除き、生活しやすくすることを意味しているそうです。建物内の段差など、物理的な障壁の除去という意味合いから、最近ではより広い意味で用いられてきているそうです。「バリア」と「フリー」に分けられて意味があることや、今ではより広い意味で世間に知られていることを知りませんでした。

私はバリアフリーについて調べてみて、バリアフリーは人を思いやることが始まりではないかと思います。普段、普通に生活していると気にかけることも気にさわることもないバリアフリーですが、バリアフリーについて日々の生活の中でよく考えてみると私たちの周りには、道路や建物の入口、出口の段差などの物理的な障壁があります。小さな子供、高齢者、妊婦さん、車いす、障がい者など社会で生活するのに困難な人々、社会的、制度的、心理的な障壁もあります。このように、「バリアフリー」とは今まで高齢者に対してのものだと思っていたけれど、高齢者、障がい者だけでなく全ての人にとって日常生活の中で安全で安心して生活できるモットーだと知ることができました。

この作文を書いてみて、高齢者や障がい者などすべての人を対象に考えることができました。これからは、誰に対しても思いやりを持つことが大切だと思いました。小さなやさしさが高齢者や障がい者にとってとても良いことだと思います。周りを見て、人が人へする配慮、そして気持ちが1番大切だと思いました。

「みんなが住みやすい生活」

東高等学校 2年 田村 将大

この世の中には、生まれながら目が見えない人や、耳が聞こえないなどといった、身体に問題をかかえている人がいます。

「音のない世界」や「真っ暗な世界」で生活していくことは、とても大変で難しいことです。

僕のいとこの母は、看護の仕事をしていてその仕事先に、一緒に付いていったことがあります。病院には、車いすの人がしんどそうに車いすをこいでいたので、「頑張れ」と思いました。

でも、いとこの母に、あんまり頑張れとか無責任に言わない方がいいよと言われました。たしかに、自分と関係のない人に、頑張れと言われても、僕は、その人の気持ちは、分からないし、その人の身体になれるわけでもない。だからその味方となって生活を助けているのが、福祉だと思いました。

最近は、障がいを持った人々に対する思いやりがないなと思ったことがいくつかあります。1つ目は、駐車場などにある、車いすマークの駐車スペースに、一般の人が車を停めていたことです。

たしかに車いすマークの駐車場は、店から1番近いところに配置されているから、停めなくなる気持ちもあるかもしれないけど、車いすマークの駐車場は、他の駐車場より少し広く設計されているので、足や目が不自由な人達が使うためにあるので大丈夫です。

もう1つは、点字ブロックの上に、自転車を停めていることです。

自転車を乗っていて見過ごすことも、僕自身でもあるので、分かるけど、気づいたら、どけるなどしてほしいです。もしそれで、ぶつかってしまったら大変なことになるからです。

このように、身近にある障がい者の手伝いや手助けになるものが福祉だと思うので、僕も生活の中で気をつけたいです。

「福祉と人権」

東高等学校 2年 近田 麻友

「福祉」とはいろいろなところで目にしますが、具体的に聞かれると答えが1つにまとまらないような気がします。「福祉」という字は「福」も「祉」も、どちらも幸福や、しあわせを意味する漢字だといわれているそうです。なので、福祉=人の幸せであると考えられます。英語で表記すると、ウェルフェア=よりよく生きるということだそうです。そう考えると「人権」にも似ているような気がします。人権とは私たちが幸せに生きる為の権利で、人種や民族、性別をこえて万人に共通した1人ひとりに備わった権利です。難しいことはわかりませんが、誰もが幸せに暮らしていける為に救済するのが福祉ではないかと思います。障がいのある方、被災された方、何らかの要因で不自由な立場におかれている方、高齢者の方などに対し、福祉活動や福祉サービスなどもあるようです。こうした活動の仕事があります。介護士や保育士、社会福祉士の仕事をしている人たちです。生活するうえでサポートが必要な人々を支援する大変な仕事です。こういった仕事以外にもボランティア活動をしている人たちもいます。最近の日本では災害が多く、地震や台風、豪雨の後に被災地でのボランティア活動をしている人たちもいます。ボランティアとは自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為とされ自主性、社会性、無償性などがあげられます。

ニュースなどで被災地などが放送されますが、山が崩れ、家が流され、行方不明になっている人がいるなどの報道を見ると助けたいという気持ちはあるけど、なかなか行動にはうつせません。なので、すぐに行動にうつせる人は本当にすごいと思います。困っている人へすぐに助けに行く行動のとれる人になりたいと思います。

「福祉」とはやはり答えが1つにはまとまりませんが、みんなでよりよい社会を作るには、助け合いが大切です。私たちの身の周りにある福祉について学び、人々が幸せに暮らせる社会になってほしいと思います。

『「子ども食堂」から学んだこと』

東高等学校 2年 中条 美優

私がこれまでの人生の中で1番とっていいほどの福祉に関する感動の話がありません。

私は中学3年の時にある方と出会い、人生がすごく変わりました。私の家庭上、そこまで裕福でないのが現実でした。食べ物が食べられないほど貧困ということはなかったけれど、それがきっかけである方に出会い、今までの私の考えが変わりました。

とある日、母が食べ物をたくさんくださった方にお礼をいいたいということで、私もお礼をいいに行くことになりました。その時、出会ったのが「子ども食堂」を運営している方でした。そこで、「子ども食堂」の話をたくさんして下さったり、またさらに食べ物を下さったりしました。その方は困っている子どもを助けたいということで寄付などをしてもらいながら、「子ども食堂」を作ったそうです。

今、現在、世界的な問題でもある食べ物の不足で栄養がとれない子どもがたくさん亡くなったり、病気になったりしています。

その問題をこの地域でなくそうとしていたのがこの方でした。

後日、「子ども食堂」でのお弁当の配布にしてみると、実際に私より貧しくて苦しんでいる方がいました。そういう人たちにも明るく笑顔で接しているその方の笑顔が今でも私は忘れられません。

私はその方に圧倒され、私も「子ども食堂」でやっているボランティアに陰で参加するようになりました。部活動との関係で配布の日には参加できないため、前日の夜、準備にいたりしました。正直、本格的なボランティアをしたかったけれど、その方がそれでも十分ボランティアをしているから大丈夫だよとって下さったことで困っている人をまた助けてあげたいという気持ちが強くなりました。

私がこの方に出会ったことで少し考え方も変わったし、ボランティアへ対する思いが自分の中でも強くなったと思います。これからも続けていくことはもちろんのこと、困っている人がいたら助けられるような、そんな人になりたいです。

「バリアフリー」

東高等学校 2年 坪倉 葵

みなさんは、普段の生活の中で体の不自由な人を見たことはありますか。車椅子を使用している人や目が見えない人、耳が聞こえない人などがいると思います。そんな人達が生活するときどのようなところが不便なのか考えてみました。

まず、段差や階段など登り降りすることが難しい方のためにスロープがあります。スロープがあることで、車椅子や杖を利用して移動する人などが高低差のある場所を楽に移動することができます。次に、視覚に障がいのある人が移動するために点字ブロックが、また案内を受けるために音声案内などがあります。また、ノンステップバスという

車椅子利用者や足腰が弱い人でも利用しやすいように作られたバスもあります。ノンステップバスは、通常のバスに比べ車高が低く、バス側からスロープを下ろすことができます。乗降口や車内に段差がないだけでなく、車椅子利用者が車内で待機しやすいようなスペースを設けているバスや、車椅子利用者が車内を移動しやすいよう幅を広くとっているバスなどがあります。

バリアフリーは住宅にも採用できます。私の祖母は足があまりよくないため、手すりをつけたりなど少しでも快適に暮らすことのできるようにしました。他にも例があります。まず、玄関、階段、部屋と廊下の仕切りなどの段差を解消する。少ない力で楽に移動できるように、引き戸に変更する。車椅子での生活などになっても動きやすいように、トイレの出入口やスペースを広くする。廊下の幅を広くする。このように工夫する物はたくさんあります。

障がいのある人だけでなく、高齢になればどうしても体の不自由が出てくる人が多くなります。自分には関係のないことだと考えるのではなく、自分や家族におこりうることだと考えることが大切だと思いました。私が知らなかったバリアフリーもあったので、これを機にもっと調べてみようと思いました。

「鹿野靖明さんから学んだこと」

東高等学校 2年 寺田 早良

私は俳優の大泉洋さんが大好きで、大泉さんがでる映画や、バラエティー、ドラマは必ずチェックしていました。チェックしている中で、2018年公開の、「こんな夜更けにバナナかよ」に出会いました。題名だけを見て思ったのは、どんなコミカル映画なんだろうでした。題名はとてもユーモアを感じられるもので、全く感動物の映画とは思いませんでした。ですが、見てみると、驚くことに涙なしでは見ることができないほど、感動のノンフィクション映画でした。

本作品は大泉洋演じる鹿野靖明さんが主人公です。鹿野さんは国定難病に指定されている、「筋ジストロフィー」に生まれつき侵されていました。彼は20歳まで生きられないと医者に言われていましたが、34歳まで生きられました。この「筋ジストロフィー」という病は2つの選択肢の中で生きなければなりません。1つは一生親族の介護を受けながら生活するか、2つ目は一生障がい者施設中ですごすか。その2つのどちらかを選ばないと生きてはいけません。ですが、鹿野さんはこの2つのどちらでもない、第3の選択肢を選択したのです。それは「自立」です。自立といっても、この病に侵されては1人ではなにもすることはできないので、正確には「1人でも生きる道を作っていく」ということです。

たくさんのボランティアの方々と晩年をすごした鹿野さんの感情が1つ1つ伝わってくるような、1人の人間の人生がしっかりと伝わってくる映画でした。

私がこの映画を通して学んだことは、何かの病気や事故で寝たきりになってしまったり介護が必要な生活になったりしても、あきらめないということは、とても重要なこと

なのだと学びました。現に鹿野さんは生まれつきの難病であっても、恋愛も遊ぶことも、楽しむことも、何もあきらめていません。本当に素晴らしいことだなと思います。私の将来の夢はいろいろな障がいを持っている方に鹿野さんのように人生を楽しんでもらえるような、福祉系の仕事に就くことです。いろんな人に笑顔になってほしい、これもまた1つ私の大きな夢の1つです。

「コミュニケーションの取り方」

東高等学校 2年 戸田 陽菜

みなさんは聴覚障がいを持った人とのコミュニケーションを経験したことがありますか。聴覚障がいは話し言葉や周りの音が聞こえにくい、もしくは聞こえない状態です。

私は公共交通機関を利用したとき、聴覚障がいをもったお母さんとその子どもの男の子と接したことがあります。2人が降りようとした時に忘れ物に気が付き、私もちょうど降りる時だったので2人のところまで持って行きました。もちろんそのときお母さんが聴覚障がいであることに私はまだ気付いていなかったので普通に、すみませんと声をかけました。けれどそのまま進んで行くので、聞こえなかったのかなと思いもう1度声をかけました。すると男の子が立ち止まり、お母さんの肩を叩いて気付かせてくれました。私は2人に向けよって、これ忘れていましたよと言いお母さんに渡しました。しかしそれを受け取ったお母さんは何も言いませんでした。どうして何も言わないんだろう、もしかして間違っていたのかなと思い焦りました。男の子がお母さんに手で何か合図のようなものを始めました。そうするとお母さんは黙ったまま男の子に返答するかのようには手で何かを伝えています。一瞬、何をしているんだろうと思いましたが、私はすぐに手話で会話しているのだと気が付きました。お母さんが私に向かって一生懸命に手話をしてきています。でも手話をまるで分からない私は、意味を理解することができませんでした。男の子がお母さんがありがとうございますって言っていますと、教えてくれました。私は手話で会話しているのを見てカッコいいなと少し羨ましかったです。特別なコミュニケーションだなと思い凄いなあという尊敬する気持ちになりました。普段面と向かって相手とコミュニケーションを取ろうとしたら、まず話すということしかできない私はまだまだ未熟だなとも感じました。その時から私は手話を覚えたい、そう思うようになりました。インターネットで調べて簡単なもので、ありがとうやごめんなさいなどの手話を覚えました。私のお母さんは障がい者施設で働いています。お母さんから手話の講座を職場でやっていると聞きました。私は次あった時にその講座に参加したいと思っています。

私が出会った聴覚障がいを持った人のように他にも、目で見ただけでは、障がいを持っていない人のように見えることがあります。私は障がい者マークというものを見たことがあります。障がい者マークはたくさんあってそれぞれ色々な意味があります。私たちが障がい者のためにできることは、そのマークを覚えて必要に応じてサポートすること、障がいを理解することです。障がい者マークを覚えるだけでもその人のためになるはず

です。

私は将来医療の道に進んで看護師になるのが夢です。看護師も働く場所によりますが、少なからず聴覚障がいをもった人と接する機会があると思います。私はその時に手話を完璧に覚えて、どんな患者さんとでもコミュニケーションが取れる、そんな看護師になりたいです。

「介護士が少ない」

東高等学校 2年 長野 菜々海

今、日本では高齢化が28.4パーセントに達しておりとつても増えています。ですがそんななかで高齢者へのお世話をする介護士がとつても少ないです。このままだと大変です。

だから介護士を増やすためには、例えば、国が介護士の給料を上げるようにしたらいいと思いました。ですが、国が介護士の給料を上げることによって税収が追いつかないなどといったデメリットもあると思います。しかし、国が介護士の給料を上げることによって介護士が増えるといったメリットもあります。

だから、国が介護士の給料を上げるべきなんだと思います。でないと、高齢者が増え続けると高齢者の身の周りのお世話をしてくださる人がいないし、老人ホームを建設してもそこで働く人がいません。だから私は、国が介護士の給料を上げて、介護士が増え、高齢者が、豊かに暮らせる時がはやくきたらいいなと思います。介護士は高齢者のお世話をしますが、そのお世話とは、着替えの介助、食事介助、排せつ介助、入浴介助、口腔ケアなどをおこなっているそうです。調べていると他にもいろいろな事をしないといけなくて、とつても大変な仕事だと思いました。

私は、小学生のときに老人ホームに行ったことがあります。そこでは、介護士のみなさんが笑顔で高齢者のお世話をしていました。とつても楽しそうにおばあちゃんやおじいちゃんと笑っていて、みている自分が幸せな気持ちになりました。おじいちゃんとおばあちゃんと話しているといろんな話がきけてとつても楽しいです。なので私も介護士という仕事を少しやってみたいと思いました。介護士という仕事をもつと広がってほしいです。そして高齢者の人たちに幸せにくらしてほしいです。そのために国が介護士の給料を上げたり、介護士の良さ、やりがいなどが広がって、介護士が増えてほしいです。

「身近な福祉」

東高等学校 2年 西森 涼

僕は、最近買い物や散歩をしていると、腰を曲げて歩いているおばあちゃんやおじいちゃんをよく見かけます。それに対して僕はすごく辛そうだなと思いました。なのでも

とお年寄りが住みやすい環境が必要だと思いました。

どのようにお年寄りの方が住みやすいをつくるかというと、僕はもちろんお年寄りに対して階段の手すりを設置したり、段差のない階段をつくったりすることもいいと思いますが、自分としては1番お年寄りに対する心がけが大切だと思います。なぜかというと、最近お年寄りの方に対して、「邪魔」「遅い」などといったマイナスな言葉をかける若い人たちを実際に聞いたりしたことがありました。そのようなマイナスの言葉をかけられるとお年寄りの方は住みにくくなると思いました。なので僕はお年寄りの方に一言優しい声かけができる人がこのお年寄りが住みやすい環境をつくるというところでは、必要だと思います。それにお年寄りが住みやすい環境をつくるということに思うことがもう1つあります。それは、お年寄りの方が家を新しく建てたり、リフォームをしたりするときに、家に手すりを設置したり、階段スロープといったバリアフリー商品を設置するときその商品を無料で設置してあげられたらさらにお年寄りの住みやすい環境をつくることができると思いました。なぜ無料にする方がいいと思ったかというと、やはり、若い方とは違って色々な場面で困難な生活を送っているのでお年寄りに対するサービスをもっと増やすとよいと思いました。しかし、経済的な面で厳しいことは分かりませんがこのような同じ考えをもつ人が増えてくるとお年寄りの方もとても住みやすくなると思いました。

このように、僕は、お年寄りに対して優しい心がけをすることが1番大切だと思います。

「バリアフリーの世界」

東高等学校 2年 野間 隆之助

人間は誰でも突然体が不自由になってしまうということがあるかもしれません。そんな時に頼りになるものがバリアフリーというものです。バリアフリーは街の中様々な場所に使われています。例えば道路にある点字ブロック、点字は、手すりやシャンプーなどにも使われており、目の不自由な人にとってはなくてはならないものとなっています。そんな点字ですが、僕たちは何も知らないと思います。実際に点字が必要となったことがないので、触れるタイミングがありません。なので、もっと知っていかなければならないと思います。

他にも手話があります。手話は、手の動きで自分の思っていること、相手に伝えたいことを伝えることができます。これも耳の不自由な人にとってはかかせないものとなっています。手話1つ1つの意味というのは知らないと思います。耳の不自由な人にとっては大切な会話手段なので僕達は少しでも知っておかなければなりません。

車いすは、足が不自由な人が使うものです。車いすで階段を上ることはできません。そこで役立つものはスロープというものです。階段の横に坂がある時がありますがそれがスロープです。車いすでも上にあがれるように使われています。我々が階段を上り下りするように、車いすでスロープを上り下りします。エレベーターにも車いすの人に対

しての工夫がされています。ボタンの位置が低くなっており、車いすの人でもボタンを押すことができるようになっていきます。

他にも我々の知らない様々な場所でバリアフリーが多く作られ、使われています。いつも当たり前のように目が見えて、耳が聞こえて、足が自由に動かせていますが、いつその当たり前がなくなるのか分かりません。何かの不自由になれば、今までの生活の当たり前が変わります。そんな時のために今のうちにバリアフリーについて触れて、理解しておく必要があります。それは自分だけでなく、家族、友人のためになります。なので今からでも学習する必要があると思いました。

「ボランティア活動で感じたこと」

東高等学校 2年 林田 咲希

私は、中学生の頃から地域のボランティアに行っています。そこでは、地域の小学生の児童クラブのお手伝いや夏になったら高校生主催の防災事業など幅広く活動しています。私が中学生の時に1つ上の先輩がこのボランティア活動に参加していて、その人たちが私たちや地域の子供たちにいつも思いやりがあって、優しく対応していたのがカッコよくて私も高校生になったら教えてあげる側になりたいと思いました。私はコミュニケーションをとるのは得意だけど人前とか大勢の中で発言するのは苦手でいざ大きい声を出すとすると勇気が出ないです。しかし、私はこれまでボランティアしてきて印象に残っている活動があります。

1つ目は去年の夏に行った防災事業です。それはコーナーに分かれて実際に災害にあった時にどう対応するかを学んでもらう会でした。私は体験コーナーを任されて、ダンボールベッドの作り方や避難所の講習会をしました。その時私は初めてリーダーをさせてもらえましたが、不安の方が大きかったです。いつもだったら先輩の後について行っていたので自分で考えることをあまりしていなくて、今回は後輩に教えながらしなくてはならなくて苦戦しました。しかし、実際やってみて、地域の人への助けも借りながらだったけど、自分なりに頑張ったし、何より参加してくださった人達に「良かったよ」「ありがとう」と言ってもらえたことが嬉しかったです。また、大勢いる中で発表し、自分たちが伝えたいことを地域の人に発信できて、本当によかったです。

2つ目は、今年の夏にこれまで私たちがやってきたことや感じたことを発表させてもらえる会です。今年の夏に開催される予定でした。しかし、新型コロナウイルスの影響で今も延期になっています。私は去年の防災事業の発表を任されて、原稿やパワーポイントを作りました。初めてこのような会に参加するので緊張するし不安です。今までの活動の反省点や良かった点などを振り返りながら原稿の内容を考えているうちにやっぱりこのボランティアしていて良かったなと思いはじめました。やっぱり地域の人たちとの交流は大切だし、これからももっともっとし続けたいです。

「福祉の作文」と聞いて最初はピンとこなかったけど、私には優しくてあたたかい地域の人たちがいる、ボランティアでは私に成長の機会をくれる人たちがいる、思いやり

のある地域のことを書こうと思いました。私は、大勢の人に支えてもらいながら成長できているので、ボランティアで誰かの役に立てるようにこれからも精一杯頑張りたいです。

「将来のために」

東高等学校 2年 笛 優太

僕は、福祉がとても大切だと思います。現在は、少子高齢化社会と言われているぐらい子供が少なく、高齢者が多いです。このままだと、大きな問題が発生します。それは、若者が高齢者を支えられなくなることです。高齢者の全員が支えを必要にするとは思いますが、歳を重ねると足・腰が弱くなり、生活に支障が出てきます。場合によっては、無理をして、命を落とす危険性もあります。その時に役に立つのは福祉です。福祉があることで、高齢者のサポートができます。しかし、現状では1つの問題があります。高齢者を支える若者が少なくなっていることです。少子高齢化が進んでいるので、ただでさえ若者が少ないです。その中で、全員の高齢者を支えるのは不可能になります。より多くの高齢者を助ける方法はあるのでしょうか。

若者が今できることはたくさんあると思います。その中でも自分は、福祉の知識を広げることが大切になると思います。理由は、知識を広げないと、正しい行動がとれなくなり、誰も助けることができないからです。また、知識を広げることによって、自分に自信を持ち、より多くの高齢者を支えることができます。勉強と同じで、知識がないと福祉はできません。

とは言っても、福祉の知識を簡単に持つことはできません。学校の授業に国語、数学、英語など教科がたくさんありますが、その中にありません。そうなってくると、自分で調べて、知識をつけなければいけません。これはとても難しいことです。そのため、身近なことで考えるといいのです。近所のおばさんや自分のおじいちゃん、おばあちゃん、誰でもかまいません。誰か1人の生活をみて、大変そうにしていることを知ることができます。それを知ることによって、1つの知識を持つことができます。そういった小さな行動からいろんなことを知っていくことが大切だと思います。良い社会をつくっていく上では、福祉を需要する必要があります。

「大切なもの」

東高等学校 2年 本田 優士

僕が大切な物は、今あたり前に幸せに生きていられることです。僕は約3年前のコロナの自粛期間中、さまざまな思いで過ごしていました。その1つは、あたり前のように学校に行って友達や家族と遊んだりできる幸せです。コロナの自粛期間の中では友達と

会うことも家族のおじいちゃんやおばあちゃんに会うこともできません。おじいちゃんおばあちゃんとテレビ電話することがあっても、実際に会って、しゃべったり一緒にご飯を食べることもできなくなってしまい、とても辛かったです。そこでコロナがいつ収束するかもわからない状態の中、家にいるのも辛くなってしまいました。ここで僕は初めてあたり前がなくなるのがこんなにも辛いことなのだと知りました。今まであたり前に学校に通い、友達とあそんだり、家族と遠出したり、たくさんのことをして、過ごしてきました。毎日のように学校に行くのが嫌でお母さんに休みたいなどと言ったこともありました。コロナで休校になったとき、正直なところ、嬉しい気持ちのほうが勝ちました。自粛生活の初めのうちは、朝早くに起きて学校に行くことなく、家でゲームやテレビを見てゴロゴロできるのが嬉しい、楽しいという気持ちばかりで、毎日続いて、幸せだと思いました。しかし、だんだん日にちが過ぎていくにつれ、学校や部活を早くしたいと思うようになりました。いつ前みたいなマスクや制限のない生活にもどれて、楽しく生活を送ることができるのか不安になっていました。

そして、やっと学校が始まり、いつものようにみんなで授業を受けて、ご飯も友達としゃべりながら食べられるのかと楽しみにしていました。しかし、学校へ行くと友達とは2メートル以上距離をとらないといけない、暑いのにマスクをして授業を受けたり、給食も前を向いて静かに食べたりなど、今までとはまったく違うことに驚きました。今までのあたり前の生活がいかに大切なことなのかコロナを通して気づくことができました。未だにコロナは無くなってはいないけど早くみんな楽しめるような生活をしたいです。

「誰もが暮らしやすい生活をおくるために」

東高等学校 2年 松本 勇樹

僕は朝学校に通っている時に点字ブロックの上に、自転車を止めているのをよく見かけます。点字ブロックは、目が見えない人の道しるべのようなものなので、そこに自転車が止めてあると歩くことが出来ません。最近はバリアフリーやユニバーサルデザインといった障がいのある人や、健常者にも使いやすいものが増えてきました。それのおかげで昔よりは障がい者の人もずいぶん暮らしやすくなったと思います。しかし、いくら暮らしやすくなったとはいえ、障がいをもっていない人達がどう接するかによってそれは変わっていくと思います。たまにニュースで、町中にある障がい者の人に向かって暴言を吐いたり、あるいは暴行を加えたりしたなどというのを見ます。これではかえって生活しづらくなり、心も傷つきます。このような行為は絶対にやってはいけません。逆に困っていたり、助けを求めたりしてきた時は、手をさしのべてその人の力になることが大切です。そうすることで障がいのある人でも暮らしやすくなるし、気持ちよく生活出来ると思います。そして何より手助けしたその人自身の気分も良くなります。障がいをもっている人が暮らしやすくなるためには、決して町の変化だけではなく、人との関わり方が重要なのだと思います。

僕はこれから生活していく中で、困っている人がいたら声をかけて助けていきたいと思います。それは障がいをもっていない人に対しても同じことが言えます。そして、障がいをもっている人に対して暴言や暴力をふるっている人がいたら注意したいし、絶対にやめさせたいと思います。そして少しでも障がいをもっている人に対しての接し方が変わっていく人が増えていったらいいと思います。そうすることで、障がいをもっている人とそうでない人も生活しやすくなり、暮らしやすくなると思います。そしてそうなるためにはやはり、環境ではなく、人の心が変わるべきだということを改めて心に留めて生活したいと思います。

「全ての人が暮らしやすい社会に」

東高等学校 2年 眞鍋 結愛

今、この世界には79億人もの人々が暮らしています。79億人、想像もできないほど膨大な数です。そんなおびただしい数の人全員が今この瞬間を笑顔で過ごしているでしょうか？きっと苦しい想いをしながら過ごしている人も少なくないはずです。少しでも笑って過ごせる人を増やすために私たちは何をすべきか。それについて私は深く考えてみました。

そもそも「福祉」とは簡潔に言うと、幸福、幸せという意味があります。今現在では、公的扶助やサービスによる生活の安定、充足という意味で使われることが多いようです。

次に、地域の方々が暮らしやすいようにと福祉の活動に取り組んでいる町もたくさんあります。婦人会、子ども会、老人クラブなど地域全体で福祉の活動に取り組むというのはとても重要だと思います。

私はこの世界には見て見ぬフリをする人がとても多いように思います。夏休み中、旅行に行った町でつまずいて私が階段から落ちてしまったとき、周りに人はたくさんいたのにみんな冷たい視線を浴びせてくるだけで声を掛けて助けてくれた人はひとりもいませんでした。私はとっても悲しい気持ちになりました。ただ見ているだけで何も行動できない人間が日常生活の中で困っている人を助けることはできないと思います。私自身、困っているときに誰も助けてくれなくてとても悲しい思いをしたので他の人にはこんな気持ちになってほしくないです。

福祉において1番大切なのは、人を思いやるきもちだと思います。そのきもちがないときっと何も始まりません。自分がされて嫌なこと、自分がされてうれしいことを考えて行動すると少しは良くなるんじゃないかと思います。困っている人を見かけた時、自分に関係ないや、と見て見ぬフリをするのではなく自分が困っているときに無視されたらつらいな、と考えて行動してほしいし、私も行動をおこしたいです。

この世の全ての人がよりよく暮らせる社会をつくるのはとても難しいはずですが。加えてこの先、どんどん少子高齢化がすすみ、外で困っている年配の方を見かけることも多くなると思います。そういうとき、私は積極的に手を差しのべたいです。少しでも多くの方が幸せに暮らせるようにまずは身のまわりの人々のヒーローになってみませんか？

「福祉について」

東高等学校 2年 山口 結愛

私は今の福祉のことをあまり知りません。福祉施設への在所児数は増えてきているそうです。平成2年では、在所児数は27,000人以上でしたが、平成19年では上がり続け、30,849人にもなっているそうです（厚生労働省 平成19年社会福祉施設等調査結果の概況）。ですが、現在介護職員数の不足も見られているそうです。平成21年度の介護職員数は9.3パーセントで、こちらと同じように上がり続け、29年度には、35.5パーセントになっているそうです（介護労働実態調査平成21年～29年調査）。

福祉施設などが増えるのは今、高齢者人口が、増えているからなんだなと思いました。高齢者が昔と違ってどんなに増えてしまったのか気になりました。総務省統計局の統計局ホームページの高齢者人口のグラフでは、2000年では2,300万人に対し、2018年では、他のグラフたちと同じように上がり続け、3,557万人にもなっています。

高齢者の人口が増え、福祉施設が増えたのはいいのですが、介護職員数が不足になっているのは、大変なことだなと、思いました。1950年では生産年齢の働き手12人で高齢者1人を支えていましたが、2018年には2.2人で1人の高齢者を支えています。また、2040年には1人の高齢者を生産年齢人口1.5人で支える社会になると推定されているそうです（チャリツモ）。

私たちが大人になれば、高齢者をほとんど2人で支えることになると思うと、大変だなと思います。年がたつにつれて、物価も高くなり、社会に求められているものが上がったりにして、お金が必要な日々になっているのに、自分ともう1人を支えるのは大変だなと思いました。このまま高齢者が増え続けると大変だなと思いました。どうすれば、高齢化を止めることができるのか、そのことを考えるのも大変だなと思いました。

「お仕事体験」

東高等学校 2年 山中 杏澁

私は中学2年生の時に、看護師の仕事体験をしました。

体験した仕事の内容は、患者さんとお話したり、食事の手伝いなどをしました。

食事の手伝いで私は、目の見えないおじいさんの食事のお手伝いをしました。最初は知らない人に、食事を食べさせてあげる事にとっても抵抗がありました。すこし怖い人でもあったのでとてもドキドキしました。

でも看護師になったら、このような場面はたくさんあるので、患者さんとのコミュニケーションは大事だと思いました。

かたい食べ物を食べる事ができない患者さんには、ミキサーで液状にしたものを、看護師さんが食べさせてあげているのを見て、自分たちとまったく同じ様に食べる事

ができない患者さんもいることに気づきました。

患者さんのために、細かい事まで気をくばる看護師はすごいなと思いました。

体験中、たくさんの病室や病棟に行きました。たくさんの患者さんと会話をしました。どの方も楽しく私たち学生と話をしてくださりました。

家族に毎日会えない、特に今の時期、患者さんにとって看護師や、医師は大事な話し相手なんだなと思いました。

私も人見知りせず、お話できるようになりたいと思いました。

病院は自分にとって、楽しそうなイメージはあまりなかったけど、看護師さんたちと、七夕の短冊を書いたり、卓球したりしているのを見て、つらい事ばかりではないんだなと思いました。

患者さんのお世話をただするのではなく、家ではない場所で、楽しく患者さんがすごせる環境づくりも看護師の仕事なんだとまなびました。

自分も、患者さんを笑顔にできる看護師になりたいと思いました。

「高齢化」

東高等学校 2年 秋月 一翔

最近日本では、少子高齢化が問題となっておりよくニュースや新聞でも話題になっている。その理由として近年日本では医療の発達や、介護事業が充実してきている。僕たちにはまだ若いから関係ないと思う人も多いと思う。僕も最近までは関係ないと思っていた。だが、最近のニュースを見ていくなかで僕たちが大人になり、高齢者になった時この問題は切っても切り離すことのできない問題になっていることに気がついた。

僕の身の周りの人たちで考えるとみんな年をとって高齢者が多くなっていた。今は元気に介護サービスを利用することなく仕事をしたり、自分の趣味を楽しんでいるがその生活もいつまで続けられるかは分からないということに気がついた。僕はまだ高齢者の身体の動かしづらさや、気持ちの変化を完全に理解することはできない。だが理解することはできないと感じたが、理解するためにできることはあると考えた。僕は小学生のときに高齢者体験というものを授業の中で体験した。

体験内容は、ひもを膝にまいて、常に膝を曲げた状態にして、目にゴーグルをつけて視覚を高齢者の状態に近づけて階段をのぼるという体験内容だった。考えてみると、いつもは軽々と登っている段階に時間がかかり、のぼることに体力を使った。高齢者がこんなにも苦労して階段をのぼっていることを知らなかったのも、とても良い経験となった。

自分が今回、高齢者について考え、体験してみて思ったことは、まずは若い人のみではなく社会全体がこの問題について考えていくことが重要になってくると考えていくなかで感じた。他にも高齢化が進んでいくのにあたって、高齢者が生活していきやすいようなサービスの充実や、階段の手すりなど設備を増やし、すべての人が高齢者の目線になり思いやりをもって生活していくことによって誰もが過ごしやすい社会になって

いくと考える。

「障害を持つ人と接すること」

東高等学校 2年 安部 美来

私には、知的障害をもつひとがいます。なので、先生からこの福祉の作文を書くよう言われたときは、このいとこのことを書こうと思いました。

私のいとこは現在5歳で来年から小学校に通うようになります。しかし、知的的には1歳半くらいでほとんど会話が成り立たず、2歳の私の弟のほうが会話ができています。なので叔母はいとこのことを普通の小学校の特別学級に入れるか、特別支援学校に入れるか迷っていたそうです。しかしあまりにも会話が成り立たないようなら、特別支援学校にしたほうがいいのでは、と思っているそうです。

ところで、会話が成り立たないのでは普段の生活はどうしているのかと思いませんでしたか？そこは大丈夫なんです。会話は成立しませんが、いところから私たちになにか伝える分には、小さい頃から少しずつカードを使って練習してきたので、カードさえあればなにかして欲しいことやしたいこと、食べたいものも分かります。そして今の時代便利なものがそれがタブレットでできることです。

ところで、まだ先の話だとは思いますが、叔母がいとこについて心配していることがあります。それはいとこの就職と叔母たちがいなくなったあとの生活についてです。今の時代、障がい者を受け入れてくれる就職先は前に比べ多くなってきたと思います。しかし、それでも私たちからするとまだまだ少ないと思います。そして、今はまだ小さい子供で、叔母たちがいますが、大人になってからはなにかない限り命の順番的に子供より親の方が先に亡くなるのは当然です。そうなっては1人で生きていかねばならなくなることもあるでしょう。そうなった時に多少は人と会話できるくらいにはなっていて欲しいと思っているそうです。

知的障がいは、人によって成長速度やできることが違います。だから接していくことは大変な事だと思います。ですが、知的障がいだけでなく全ての障がい、病気に対して正しい知識、理解を持ち、少しでも自分から歩みよって接していくことが大切だと思います。そうすることで、少しでも多くの人に住みやすい世の中になっていって欲しいです。

「バリアフリー」

東高等学校 2年 大西 苺夏

私が「福祉」と聞いて思いあたるのは、バリアフリーが一番に思いあたります。車いすなどです。足が不自由な人が車いすに乗っていて、階段だけしかなく、その場所に行

けないところをテレビなどで見たことがあります。坂を作るなどしたらいいと思いました。あきらめて帰らないといけないから、どこにもバリアフリーを作ってほしいと思いました。

「パーフェクトワールド」というドラマがあり主人公が自転車と車の交通事故で車いす生活になりました。「パーフェクトワールド」のドラマを見て、バリアフリーをいろんな場所に設置してほしいと思いました。

目が不自由な人は白杖を持って歩きます。点字ブロックの上を歩きます。点字ブロックの上を不自由ではない人がしゃがんでいたり、その上を歩いていたら目が不自由な人が困るのでやめてほしいと思いました。点字ブロックの上を歩かないように下に文字を書いたり、インフルエンサーの人たちに宣言をしてもらえばみんなの耳に入ると思いますが、でも、そんなことで気をつけるくらいなら中学校で学習したりするのでその時点で気をつけてほしいです。

バリアフリーは不自由な人にはとても大切なものです。不自由ではない人でも知っておくのが常識だと思います。もし階段しかなくて車いすに乗っている人がいて持ち上げていたりしたら見て見ぬふりをせず「手伝います。」とかいたりして手伝うのがすてきだし、カッコいいと思います。私はそういう人になりたいと心から思います。

バリアフリーは、足が不自由、手が不自由、目が不自由、たくさんあります。不自由な人にはバリアフリーが必要です。まだバリアフリーが設置されていないお店がたくさんあると思います。お店にバリアフリーをつけたら不自由な人でも1人で出入りすることができお買い物も楽しくなります。なのでバリアフリーを設置していることが増えてほしいです。

「高齢者を笑うな」

東高等学校 2年 小野 菜姫

私が小学6年生の時、車いす体験や高齢者体験をしました。祖父が一時期、脚の手術をした時に車いすで移動していました。私は、祖父を乗せた車いすを押すことが大好きでした。当時まだ小さかった私には、おもちゃにしか見えませんでした。いつか車いすに乗って自分で動かしてみたいと思っていました。

車いす体験では、1班に1台の車いすが渡されました。自分が乗る番になった時、とてもワクワクしました。思っていたよりも動かすことが難しくてびっくりしました。体育館から靴箱まで乗りました。体育館からスロープで、坂があつて難しかったです。靴箱に行く時、高めの段差があつて一番難しかったです。靴箱には一人で行けなかったので、班の人に手伝ってもらいながらしました。

高齢者体験では、身体中におもりを付けて階段の昇り降りをしたり、視野が狭い眼鏡をかけてまわりを見渡したりしました。おもりを付けた時は、落ちた物を取ったり階段を昇り降りしたりしました。しゃがむだけでも身体が重くてしんどかったです。腰が悪い人などが、このおもりを日常生活で付けていると考えるだけで歳をとりたくないなと

思いました。視野が狭くなる眼鏡をかけた時、まわりの色が暗くて視野が狭かったので、不安になりました。歳をとると目が悪くなると聞いたことがあったので、実際に体験してびっくりしました。視野が狭いから自分のまわりが分からないし、見ている物の色が分からないので、ご飯を食べる時おいしいと感じるのかなと疑問に思いました。

この体験を通して、車いすを使っている人や体が不自由な人の気持ちが少し分かった気がします。自分がおばあちゃんになった時に、車いすに乗ることが難しく困っている時、聞こえる声で嫌なことを言われるとイライラしてしまいます。だから、高齢者でも同じ人間だし、頑張っているから助けを求めてくるまで何もしないという選択肢が良いのかなと思いました。無理に手伝って逆にストレスになって体調が悪くなると困るからです。高齢者に対してどうでもいいように接する人がいなくなると良いなと思いました。

「ボランティア活動」

東高等学校 2年 甲藤 ななみ

今年から、ボランティア活動を始めました。子ども食堂や、草引き、子どもの読み聞かせなど、たくさんのボランティア活動をしてきました。そのすべてに共通することは、される側だけでなく、する側も楽しく活動できることだと思います。

これまでの私のボランティア活動のイメージは、する側が損をする、というものでした。アルバイトのように働いた分だけお金がもらえる訳でもないのに、なぜしようとするのか、私にはあまり理解ができませんでした。しかし、ボランティア活動を始めてみると、やってみないと分からない魅力がたくさんあるということに気付かされました。

その中でも特に私がボランティア活動を楽しいと思える点は、喜んでもらえると感じられることです。これは、普段の生活の中でも感じることはできますが、ボランティア活動をすることによってその機会が格段に多くなります。相手に喜んでもらえることで、私もやりがいがあり、とても楽しく活動できます。また、普段の休日はただただ過ごしている私も、ボランティア活動があるときは、少なくとも半日は充実した時間を過ごすことができます。

活動が終わったあとは、もちろん疲れますが、気持ちはとても晴れやかです。相手に喜んでもらえるだけでなく、自分も少しずつ成長しているような気がして、それもまた楽しいです。ボランティア活動を通して、たくさんの方々と知り合うことができ、たくさんの方のことを学ぶことができます。

ボランティア活動は、本当に相手にとっても私にとっても充実した時間を過ごすことができる素晴らしい活動なんだなと気付かされました。私はこれからもボランティア活動を続けて、もっとたくさんの方々とコミュニケーションをとっていきたいです。また、これまでの私のようにボランティア活動にあまり興味がない人でも挑戦して、魅力を知ってほしいなと思います。

「いじめに対する対策と支援について」

東高等学校 2年 亀井 優衣

私は、いじめに対する対策と支援について考えました。はじめに、いじめが起こる理由で多いのが、子どもにとってストレスの多い環境があることだそうです。誰からも認められていないと思ったり、不満やストレスの多い環境にいる子は、攻撃的になってしまい、誰かに気付かれないという思いから他者を攻撃してしまい、それがいじめへとつながってしまいます。

日本でのいじめの対策は、いじめられた生徒にカウンセリングを受けさせ、いじめを行った生徒には行った行為に対して叱り、自分はどうするべきだったのか、今後自分はどうするのか反省させます。私は、このやり方はあまり良くないと思います。なぜなら、加害者を叱り反省させるだけでは、余計に反発してしまい、いじめを繰り返すことになると思うからです。欧米の一部ではいじめているほうを、「人をいじめないといけないほど病んでいる」と判断し、カウンセリングを受けさせるそうです。私はその考えを聞いて、たしかにそうだなと思いました。日本はいじめられている子に逃げ場を作っているとかしようとしては、逃げてしまうと学校にも行けなくなって損ばかりすることになります。なぜいじめられている子がいじめによって不登校になったり、家から出られなくなって将来を奪われれないといけないのかということに気付きました。

今の日本のやり方では、根本的ないじめ対策にはならないと思います。いじめによって最悪の場合自殺してしまうこともあるし、被害者の社会復帰は自助努力が基本です。加害者より被害者の方が大変な思いをしないとイケないのはおかしいし許せないことだと思います。人の人生や命に関わる大切な課題なので、慎重に考えていかないといけないなと思いました。根本的にいじめをなくすために一人ひとりが出来ることを考え、行動していきたいです。

「福祉の仕事」

東高等学校 2年 合田 若菜

私のお母さんは、介護の仕事をしています。体が不自由になってしまった高齢者の介護や送迎などを行っています。初めは、忙しそうで大変だな、くらいしか思っていませんでした。

介護士は、ただ高齢者の生活を手伝えるではありません。体が自由に動かなくなって人の助けが必要な高齢者もいれば、認知症が進んでいる高齢者もいて、高齢者にもいろんな人がいます。時には、怒って介護士を叩いたり、蹴ったりする人もいます。介護士は、それを受けとめて、食事や入浴、トイレなどを手伝えるという仕事です。

私のお母さんは、「大変でしんどい仕事だけど、やりがいも感じられる」と言っていました。仕事から帰ってくると、送迎をした高齢者の方からお礼にもらったものを見せてくれたことがあります。私はそれを見て、介護士はとても大変で忙しい仕事だけど、

お母さん達が働くことによってたくさんの方が助かっているのだと感じました。話を聞くと嫌な仕事だとしても、介護士がいないと困る人がたくさんいるのだとも感じました。お礼に物をもらうことがうれしいのではなく、感謝してくれているという気持ちがうれしいのだと思うし、「ありがとう」の一言がやりがいに繋がっているのだと思いました。

私は将来、保育士になりたいと考えています。人と関わる、誰かの役に立つ仕事がしたいからです。保育士は、園児の命を預かる大事な仕事であり、園児の親とも関わらなければならない簡単ではない仕事です。それでも保育士になりたいと思ったのは、中学2年の職場体験で保育園に行ったときでした。園児と関わる楽しさだけでなく、園児の命を預かっているという重みやそのためにしなければならないことの大変さを知りました。でも、園児の笑顔を見ると、やりがいを感じることができました。人と関わる分の大変さがある福祉の仕事のおかげで今の私達の生活があって福祉の仕事は、素敵な仕事だと感じました。

「優しい人」

東高等学校 2年 近藤 緋音

これは、私が中学2年生の時の職場体験のお話です。

職場体験は数日間仕事を体験できるもので、私はスーパーにしました。理由は、学校からとても近くて行きやすかったのと、よく知っているスーパーだったからという安易なものでした。ですが、そこで私は職場の人からの思いやりをとっても感じました。

最初働く日の朝礼で、自己紹介を求められて、こんな大勢の大人に囲まれたことがなかったもので、ガチガチに緊張しながら自己紹介をしました。そしたら、それが伝わったのかニコニコしながら聞いてくれて、とてもありがたかったです。他にも、午前中のお仕事で働いていたら、一緒に職場で品出しのやり方を教えてくれていた人から、ご飯の余り物をたくさんもらいました。少しお腹がいっぱいになって昼食のお弁当が食べられなくなりそうなくらい食べ物もらいました。それや、飲み物をわざわざ買いに行ってくれて、飲み物ももらったりしました。午後は大体レジ打ちをしていました。レジ打ちでたまったかごは客が来ていない時に、入口の方に置きに行くのを初めて知りました。レジで優しい、と思った出来事は、初めてレジを触ったので、何回か失敗をしてしまいました。その時には、優しく間違えた理由を指摘してくれて、間違っていたところをすぐに理解することができました。他にも、客が来ていなかったら、隣にいた人が明るく話しかけてくれたり、レジをしていると職場の人にも買い物をするらしく、その時に「頑張ってるね」という励ましの言葉をもらったりしました。

私は職場体験で、すごく緊張していたし、不安もたくさんありました。しかし、体験終了後、安易な理由で来てしまったことにとっても後悔しました。職場では、温かい気持ちで出迎えてくれて、一から仕事方法を丁寧に教えてくれました。職場の人たちの優しさにとっても感動しました。私も職場で出会った人のような優しい人間になれるように頑張ろうと思います。

「平等な生活をするために」

東高等学校 2年 近藤 温人

私は、最近テレビであるニュースを見ました。それは、世界で5人に1人が学校に通えていないというニュースでした。

私はこのニュースを見たことがとても心に残っています。小さい子たちが、家族のために働いていて学校に通えていないというニュースでした。そして、学校には通えていけるけれど、家から学校がとても遠くて、何時間もかけて険しい道を使って行くという子どももいました。

私は、小学校6年間と中学校3年間の9年間、義務教育で学校に行きました。そして今も高校に通えています。この、学校に行きたくても行けない子がいるというニュースを見て、学校に通えることが当たり前ではないことを改めて感じました。

私たちが当たり前で常識だと思っていることが、まったく通用しない国があるのです。さらに、学校に行けないだけでなく、自分や家族が生活するのが困難な国もありました。

私は、普段から当たり前のように3食ご飯が食べれて、安全に暮らせるということにもっと感謝しなければいけないと思いました。

そして、私たちが当たり前だと思っていることが当たり前ではなく、生活に困っている子供たちにできることをしたいとニュースを見て思いました。実際に人を助けることは、1人の力では難しいかもしれないけど、少しの募金をたくさんの人がすれば、助けになると思います。そのためにはもっとたくさんの人たちが、世界のこのような状況を知ることが大切だと思います。子どもたちを助けるために周りの人にこのような状況になっている国があることを伝えたりして、広めていくことも大事だと思います。

そして、今の生活の全てが当たり前に行えていると思わず、安全に暮らせていることに感謝して、これから生活していきたいです。

「『ふくし』の大切さ」

東高等学校 2年 佐々木 歩乃佳

私たちの暮らしている町にもたくさんの「ふくし」があります。例えば、回覧板、福祉施設、スロープ、など人々との交流を増やしたり、より暮らしやすくしたり、誰もが自由に利用できるような場所が住んでいる自治体にもあります。

小学生の時、視覚・聴覚障がいの方を実際に招いて、体験会をしました。点字を読んだり、口だけを見て何を話しているのか当てるゲームをしたりしましたが、何も当てることができず、とても難しかったです。また、点字ブロックや音声アナウンス、手話の大切さを知ることができました。

中学校の時は、老人の体験をしました。特殊なゴーグルをつけて、手首足首に重りをつけて、手に手ぶくろをはめて階段を上り下りしたり、紙をめくったりしました。階段はとても足が重く、一段一段上がるごとに疲れて、とてもしんどかったです。また、紙

をめくるのは2枚めくっていたり、なかなかめくれなかったりとても大変でした。ゴーグルをつけていることで、まわりの視界が悪くとても生活しにくかったです。高齢者になるにつれて、体が不自由になり、生活に支障が出るので、周りの人の協力が必要だと感じました。介護で働いている方の話によると、会話を毎日することで仲が深められ、利用者が暮らしやすくなったり、笑顔が増えることで自分自身の生きがいになったりするそうです。口数を増やすことでボケを防止することもできるそうです。

福祉にまつわる経験や話をもとに、周りの助け合い、心づかいはとても大切なことを知りました。また、点字ブロックやスロープのあるおかげで不自由なく生活でき、地域の人々の交流があることで高齢者の方が生き生きと過ごしやすい町にもっともつとなれるように、私も、地域の人との交流を増やしたり、進んで奉仕に参加したりして地域の活性化に協力していきたいと思います。

「高齢者と福祉」

東高等学校 2年 佐藤 真央

現在、日本では国民の4人に1人が65歳以上という超高齢社会を迎えており、今後とも早いスピードで高齢者人口が増加し約10年後には3人に1人が65歳以上となることが推測されているそうです。そのため、私は高齢者が安心して毎日を過ごせるような町作りが大切だと思います。

私には、介護施設で暮らしている曾祖母と一軒家で一人暮らしをしている祖母がいます。介護施設にいる曾祖母は、食事や病院、買い物を介護士さんに手伝ってもらっていますが、一人暮らしをしている祖母は、すべての事を1人で行うことが多いです。高齢者の一人暮らしでは、買い物が大変、重いものが持ち帰れないなどの日常生活での問題がたくさんあります。

高齢者本人ができる対策としては、健康診断を受診し、日頃から自分の健康状態を把握しておくことや、買い物に行けない場合や災害発生時に備えて食料品や日用品をストックしておくことと安心です。また、自治会や町内会に加入し、地域との接点を持つことも大事になります。

家族側にできる対策もたくさんあります。一番は本人の状況をきちんと確認することです。たとえば、冷蔵庫を見て買い物に行けているかや、消費期限切れの食品は廃棄されているかなどがチェックできます。また、おくすり手帳などを確認することで、薬を指示通りに服用できているかを確認できます。他にも、近所の方などに日頃の様子を尋ねるのも良いかもしれません。

調べてみると、高齢者の人達の対策もたくさんあり、訪問型やセンサー型、カメラ型などの見守りサービスや安否確認サービスなどの支援サービスも多くありました。私も一人暮らしの祖母のために、自分にできることをもっと見つけて、少子高齢化社会がものすごいスピードで進んでいるこの社会をもっと快適に暮らしやすい場所にできたらいいと思いました。

「一瞬の出来事で人生を変える」

東高等学校 2年 白石 花

私のおじさんは、2月に仕事中に背骨を骨折する大事故にあった。ぶあつい鉄板が背中に直撃し、そのままドクターヘリで病院に運ばれて手術を受けた。すぐに処置をしてもらえたおかげで、命は助かった。でも目が覚めてお医者さんに最初に言われたことは、「20パーセントの確率でしか今まで通り歩けるようになることはないだろう。」ということだった。その言葉を聞いて私たち家族は、ただ落ち込むのではなく、ポジティブに「20パーセントもあるやん！」と前向きな言葉をかけるようになっていた。

たしかに歩くようになれる確率は20パーセントだけど、絶対に歩けるようになると信じている、と毎日おじに伝えた。リハビリを毎日頑張っているおじは、先日退院した。自分で歩けるようになって、普通の生活ができるようになったからである。びっくりした。回復が早すぎるのも、歩けるようになったのも全部きせきだと思う。皆の声かけで、そして毎日のリハビリのおかげで、おじは歩けるようになったのだった。自分を信じぬくこと。決してあきらめないこと。すごく大切だと思った。

メンタル面でたくさんうまくいかず、辛くて苦しいこともあったと思うが、本人の頑張りでも20パーセントの中に入ることができた。今はまだ寝たきりのまま、仕事に戻ることはできていないが、これから今までどおりの生活を手に入れて、たくさんの方にまた挑戦してほしい。

「福祉」

東高等学校 2年 白石 悠晟

僕は中学生のころに地域のお祭りのボランティアをしました。内容は、小さい子どもたちが楽しみなヨーヨー釣りや、アイスクリームの販売の手伝いなどでした。多くの人前でボランティアするのが初めてだったので、とても緊張していました。しかし、ボランティアをしていると、子どもたちから「ありがとう」などの感謝の言葉を言ってくれるので、段々と緊張もなくなりました。このことがきっかけで僕はひとの役に立つことはとてもうれしいことだと思い、色々なボランティアに参加したいと思いました。

他に行ったボランティアは、ごみ拾いのボランティアです。朝早くから起きて地域に落ちているゴミをたくさん拾いました。拾い集めていく内にゴミ袋の内が拾ったゴミでパンパンになっているのを見たり、さっきまで汚かった場所がきれいになっているのを見て地域の人役に立てているなど実感してとてもうれしかったし、とても達成感が湧いてきました。

これらのボランティアを通して、誰かの役に立つことで自分も感謝の言葉をもらってうれしくなるし、地域の人も嬉しくなることが分かりました。それと同時に地域のために何かをするということはとても難しいし、しんどいことだと思えることができて、とてもよかったです。

その他にも、小学生のころには父の経営している高齢者施設に何度も訪ねました。施設の中に初めて行った時はたくさんのおじいちゃんやおばあちゃんがいてとても驚きました。おじいちゃんおばあちゃんと一緒にトランプをしたり様々なゲームをして遊んだり、色々なお話を聞かせてくれました。自分の思っていた以上に楽しい所でした。おじいちゃんやおばあちゃんが楽しく過ごせるための様々な工夫を知ることができました。階段だけでなく普通の廊下にも手すりをつけたり段差をなくしたり、玄関がスロープになっていたりと様々なバリアフリーがあることに気がきました。これからの社会は更に少子高齢化が進んでいくのでこういったバリアフリーなどが多くなれば良いなと思いました。

「バリアフリー」

東高等学校 2年 神野 陸人

みなさんは世界の総人口を知っていますか。現在約80億人の方が地球に住んでいるそうです。ではこの80億人の中で、身体にハンデがある方は約15%、数にすると約12億人の方々が身体にハンデをもって生活しています。ハンデと一言でいってもいろいろなものがあります。義手や義足、車いすや白杖を使う人もいます。そんな方々が楽に生活するためには、バリアフリーという、段差がなかったり、点字が書いてあったりすることをさします。世界で一番バリアフリーが普及している国はアメリカ合衆国で77%だそうです。それでも100%には到達しないのだなと思いました。続いて多いのがアラブ首長国連邦、アイルランド、ポルトガル、が同率で55%だそうです。1位と2位の差でも22%もあることに驚きました。アメリカは人口が多いから、色々な所で活発になっているのは分かるけど、世界の国々でこんなにも違うのだなと感じることができました。

次に、気になる日本のバリアフリー普及率は50.9%だそうです。町中や、イオンモールのようなショッピングモールを歩いていても、バリアフリーに対応しているように見えるのに、意外に数値は高くないのだなと思いました。

私達の生活の中にバリアフリーというものは昔に比べ、多くなってきています。これは差別のない社会との関係があると思います。日本の総人口は1億2700万人。この数値に対して、身体にハンデのある人は6.7%、数にすると、936万人となります。この963万人の方に全員が何不自由なく過ごせるようになることが一番だと私は思いました。

現代の日本社会はまだ、ハンデがある人々に対して、あたりが強い方がいらっしやいます。点字ブロックの上を通ったり、車いすの方が使うスロープで遊んだり、現代の社会とはバリアフリーを普及させると同時にどうして、誰にどう必要なのかをしっかりと日本・世界中の人々が理解し、すべての人々が不自由なく暮らせる世の中になっていけばいいと思いました。

「バリアフリーを考えて」

東高等学校 2年 仙波 莉緒

私は中学生の時から現在まで何度か福祉の授業を受けました。その授業では、実際に高齢者と同じような感覚になるように器具を装着し、高齢者になるという体験授業で、厚い手袋を付けた状態でお箸を使い小さい豆を移したり、白がかったフィルタをレンズに付けた眼鏡をかけて黒板の文字を読み取ったり、重しを全身に付けて階段の昇り降りをしたりと様々な体験をしてきました。どれもいつも以上に日常が送りづらく、とても大変でした。

そんな中、高齢者の弱視の体験をしていた時にふと思い出したことがありました。それは私の祖母が白内障になった時のことです。私の祖母は私が小学生の時に白内障になり手術を受けましたが、病気の時も手術を受けた後も一人で生活するのが困難で、母と一緒にサポートしたりしました。そんな祖母のサポートをする内に、祖母が階段で不安そうにしていたり、文字が読みにくかったりと普段生活している中ではなかなか気づきにくいことなどに気づき、祖母は今回は手術をして病気が治ったものの、歳を重ねるとどうしても今まで通りにはいかないと考え、改めて家で祖母が不安になったりするところはどこかなどを考えた時、祖母の家にはどこにも手すりが無いことに気づきました。そして他にも調べていくうちに、滑りにくい床や滑りにくい土間、くつを脱ぐ時の腰掛け台などがあることを知りました。家の形状によって式台とスロープの組み合わせがあったり、蹴上は何センチくらいが良いなどたくさんあり、とても興味深く魅力的に思いました。

そして私が調べた中でもすばらしいと思ったのが、階段と隣に車いす用に昇降機があることです。車いすだと階段を昇るのは大変で、電動で階段を上がるために足が出る車いすで昇るか、抱えて昇るしかないのかなと思っていたのですが、この昇降機を見た時に高齢者にも介助する人も負担がなくて時間もかからないのですばらしいアイデアだと思いました。

今回バリアフリーを調べて、各家や人にあわせた多様なバリアフリーがあり、これからも調べていきたいと思いました。こうして調べて得たことを活用して家族が住みよいようにしていけたらいいと思いました。

「ワークキャンプ」

東高等学校 2年 高橋 幸志

僕は中学1年の時に介護福祉施設に2泊3日のボランティアに行きました。学校でこのチラシがくばられた時に少し興味を持ち行くことに決意しました。

まず1日目は施設の中を訪問し中をいろいろ見ていきました。

リハビリの部屋があったり、皆が休める大きな場所もありました。

次に実際に車いすに乗って障がいがある方からの目線などを体験しました。僕はその

時初めて車いすに座りイスをこぎ、まず感じたのが、かなりこぐのはしんどいと感じました。

そして次に車いすを押し上げてあげる方の目線も体験しました。

これはもちろんのこと、段差がある所にはいったらいけないなど、ゆっくりと押すなど乗っている人のことを考えながら押しました。

そして夜ご飯は施設の人と同じ料理を食べました。健康に合うお魚の料理や消化にいいおかゆなどがありました。

2日目は朝、施設の人を大きい広場に呼びラジオ体操をしました。車いすの人もして上半身のストレッチを楽しくしていました。

そしてこの日は施設でのお風呂に入る日だったので、施設のおじいちゃん、おばあちゃんをお風呂に入れ体を洗ったり手伝いました。

みんなとても気持ちよさそうにお風呂に入っている姿を見て、僕の気持ちも温かくポカポカ感じました。

次に広場でスイカ割りをしました。みんな必死にスイカを割っていて、見ていてとても気持ちよかったです。

施設みんな優しくて温かかったです。

そして最終日の3日目、最後におじいちゃんおばあちゃんにお別れを告げました。とてもさみしかったです。普段いつもだったら皆との楽しくて明るい空気がありますが、この施設ではとても温かい空気を感じたことを覚えています。ワークキャンプに比べてとてもよかったです。

「人と人とのつながり」

東高等学校 2年 高橋 陽真理

私は中学の時に車いす体験と視覚障がい者体験をしました。車いす体験では、乗る側と押す側を体験しました。乗る側は車輪が思うように動かず、多くの恐怖や不安を感じました。目線も低くなりこんなにも不自由なんだと改めて思いました。押す側では段差を上る時、下る時の怖さと不安定さを感じました。もし自分が車椅子を押す時が来たら、乗っている人には私が体験で感じた不安を与えないようにコミュニケーションを取ることが大事だと思いました。私たちは今まで車いすを身近に感じたことがありませんでした。だからこそ、この機会を通して車いすを身近なものだと意識していく必要があると思いました。

視覚障がい者体験では、アイマスクをして階段を登ったり、降りたりし、物を使う体験をしました。アイマスクをすると視覚が真っ暗になり、とても緊張し怖かったです。助けがないと階段も踏み違えそうになり、介助がどれだけ必要かよく分かりました。物を触る時は形だけで判断しないといけないので、ご飯を食べる時は大変だなと思いました。普段意識せず使っている視覚がとても重要な役割を果たしていることに改めて気づくことができました。

この体験を通して私は小さなことでもいいから障がい者の方々の力になりたいと思いました。私たちも障がい者も同じ人間だから、変に気を使ったりするのではなく、普通に接することが障がい者の力になるだろうと思いました。障がい者を見かけても「どうしたんだろう？」とあからさまな顔で見たりするのは、障がい者にとって悪い気持ちになるので笑顔で助けることが大事だと思いました。助け合うことで、感謝され自分自身も嬉しくなります。この繋がりが自分にとって、みんなにとって大切なことだと感じられたらいいなと思いました。今、自分が自由にできているのは当たり前なことではないと思いながら、周りの立場に立って、思いやりを忘れずに生きようと思いました。

「児童」

東高等学校 2年 高橋 美生

最近、児童虐待が増えている気がします。母子家庭でお金がないや、親のストレスによって子どもにあたっているのではないかなと思います。子どもは親を選べないので、すごく大人は勝手だなと思います。

自分のまわりで見たことはないけど、ニュースでよく見かけたりするとすごく腹が立ちます。どんなに苦しいことがあってもこの世に送り出した以上は、子どもがいちばん幸せになれる生き方をさせるのが親であるのではないかなと思います。

そういう虐待をうけた子は、その子が大人になってから反動で自分の子どもにも同じことをして、そのくりかえしでずっとなくなる理由の1つなのではないかなと思います。そういう被害を受けている子や受けたことがある子が少しでも救われるような施設や、家庭訪問など増やしたらいいなと思いました。

児童だけでなく、DVや言葉の暴力など、きずつけられ方はいろいろあるけれど、みんな同じくらいしんどいし、誰にも助けてと言えない人が多いと思います。実際、自分もされる側の立場だったら怖いし、もしも相談した相手がうごいてくれなくて、相談したことがばれたら、もっとひどいことになりそうだからです。ストーカーにしても警察は証拠がないと動いてくれないので、もっとそこら辺のことを早くしてほしいです。私も子どもから大人までみんなのことを助けたいし、できることを考えて動きたいです。

私の将来の夢は産婦人科の看護師になることです。産後うつになり育児放棄につながることも多いらしいです。そのようなことが絶対ないように、みんなから信頼され産後のケアまでおこたらない看護師、そして、人の気持ちを考えあらゆる可能性をみつけて、思いやりのある人になるのが夢です。どのような道にすすんでも、人を救える人になり、この世の中できずつけられる人がいなくなるように、少しでも多くの人を助けていきたいです。これからもいろんな情報をきいて一人ひとりが生きやすい世界になったらいいです。

「福祉活動」

東高等学校 2年 高橋 龍二郎

僕は福祉活動をこれからもっと増やしていくべきだと思います。なぜかという、自分はまだ暮らしやすい生活をおくることができる地域を、もっと作っていけると思ったからです。なぜそう思ったのかという、スーパーやお店でのスロープが少ないところや介護施設が少ないところです。

お店でのスロープが少ないと思ったのは、大型のスーパーや飲食店ではスロープがつけられているものの、他のお店ではないところの方が多かったように思ったからです。

どのような活動を行えばもっといい暮らしができるかと思うと、地域の掃除だと思いました。図書館や子どものあそび場、介護施設などは多くあるのに比べて、だれも住まなくなったゴミがたくさん残された家の掃除など、手を付けられていないところも多いので、ボランティアなどで少しずつでも少なくすることがいいと思います。自分の家の周りにも、そのようなだれも手をつけていない家が多くあるので、本当にやるべきことだと思います。

他にも僕は思うことがあります。それは介護施設などに自分たちがボランティアで実際に試して知ることが大事なことだと思います。それを行うことによって、実際に介護施設でどのようなことをしているのか知ることでもできるし、自分たちの将来などを知ることが多くあると思ったので、増やしていくべきだと思います。

このように、自分たちが今より暮らしの良い地域が今以外にできることが多くあると思ったし、ボランティアを今より多くしていろんな人が参加することによって、そこでも良い地域ができると思うので、がんばっていきたいです。自分は今はあまり地域の福祉活動やボランティアに参加できていないけれど、今回このことについて調べてみることによって、今のままではまだだめだと思ったので自分自身もがんばっていきたいです。

このようにまだできることは多くあるので地域の人たち全員でがんばることが大事だと思います。

「福祉」

東高等学校 2年 谷野宮 壮志

まず最初に、福祉ということがどのような意味を持つのか知らなかったなので、調べてみることにしました。そして、調べてみると、ふだんの暮らし、幸せなどが出てきました。今まで、何となくは分かっていたのかもしれませんが、今日、これを調べてみて、より詳しく、より正確に意味を理解することができました。そして、これまでを振り返ってみると、福祉に向けて、できていたことも、できていなかったこともたくさんあるなど実感しました。

そして、ぼくは、小学生と中学生のときにそれぞれ1回ずつ高齢者施設を訪れたり、福祉委員として、エコキャップの回収などをはじめとする募金活動などをしていました。

今思うと、そのような行動、ひとつひとつが誰かの幸せや、ふだんの暮らしに向けてのものだったのだということが分かりました。実際に、これまでの活動を振り返ってみると、高齢者の幸せに向けて、色々な人が楽しめるゲームなどを考えたりしていたと思います。また、少しでも多くの人が資源回収や募金活動などに参加してもらえるように、声かけなどをしていたと思います。それはすべて、誰かのために働いていたのだと思います。その行動によって何人の人がふつうの生活に戻れたり、幸せを感じられたかは分かりませんが、すごく良い行動ができていたのではないかと思います。

現在、高校2年生ということや、新型コロナウイルスという状況もあり、できることはとても限られているのかもしれませんが、しかし、行動を起こすことによって、少しでも変わることはあるのかもしれませんが。少しの勇気で幸せになれる人がいるのかもしれませんが。常に、そのようなことを考えて行動できる人になりたいです。必ず誰かを幸せにします。

「ケアハウスのおかげで」

東高等学校 2年 得能 康平

ぼくの祖父と祖母は亡くなるまで、介護施設でお世話になっていました。

最初、祖母が脳こうそくになりました。体に麻痺は残りませんでしたが、字が書けなかったり、電話のかけ方がわからなかったり、服をきちんと着られなかったりなど、今まで当たり前できていたことができなくなりました。僕はまだ3才にもなっていなかったのですが、あまり記憶に残っていませんが、祖父が一人で面倒を見ることは難しかったようです。それで介護施設でお世話になることになりました。最初は祖母だけが施設に入っていましたが、祖父もヘルパーさんにお世話になりながら一人暮らしを頑張っていました。だんだん困難になってきて祖母と一緒に施設で暮らすことになりました。ぼくは何度も父や母や兄たちと施設に面会に行きました。ぼくは小さかったのであまり祖父や祖母との思い出がなく、面会に行ってもぎこちなかったです。

中学生になって、1年生の夏休みに2泊3日で介護施設の仕事を経験したことがあります。中学生から高校生までの人がグループになって、施設で仕事を手伝います。ぼくはおじいさんやおばあさんに声をかけるのがなかなか難しかったです。施設で働いている方は自然に声掛けをしたり、手を差し伸べて介助してあげていて、すごいなと思いました。

今はたくさん介護施設があるので、福祉のサービスを多くの人が利用することができます。介護施設に入る前に祖母をしばらくの間、家でみていた時にデイサービスやショートステイのおかげで母もずいぶん助かったと言っています。昔だったら家族だけで世話をするのがあたりまえだけど、今は高齢化社会になり高齢者福祉が充実していろいろなサービスが受けられるので、よかったなと思います。もしこのようなサービスがなかったら、ぼくの母などは子ども3人の育児をしながら祖母や祖父の介護をしなければならなかったのだ、ノイローゼになっていたかもしれません。サービスを提供しているさ

さまざまな人たちの待遇も良くなって、これからは高齢者福祉が充実したらよいと思います。

「介護」

東高等学校 2年 徳丸 優太

私の母は介護の仕事をしています。身体に障がいをもっている人達や、介護が必要なご老人の方などが介護施設を利用していました。母はいつも「介護の仕事は力仕事よ。体の動かない人をお風呂に入れてあげたり、トイレに連れていくだけでも一苦労だよ」と言っています。

僕はどんな仕事なのかなと思い、小学5年生の頃母について行き、どのようなことをしているか見に行ったことがあります。昔の記憶なのではっきりと覚えてはいませんが、仕事量がとても多いんだなと思ったことは覚えています。一人の介護が終わると次の人の介護に回ったり、ずっと動き回っていたことを覚えています。母の同僚の方が言ってくださったことは「介護とか看護っていうのは、1日に何人もの人とコミュニケーションを取ったりするからどうしても流れ作業みたいになっちゃうんだ。流れ作業みたいになると、コミュニケーションもあまりとらなくなったり、介護が雑になっちゃうから、できるだけ表情を崩さないようにしたり、色々な事に注意しながら利用者の方々の介護をしているんだよ」と言ってくれました。やっぱり人とのコミュニケーションを取るときに大切なのは、表情だったり、心から話し合う姿勢が大事なんだなと思いました。

他には朝早くに職場に行き、職場にあるバスに乗りかえて利用者の方々を向かえに行ったり、帰るときに送って行ったりもしています。最近では新社員の人が入ってきたらしく、仕事をなかなか覚えてもらえず困っていました。仕事内容がいっぱいあるし、仕事内容以外でも一人ひとりの対応なども覚えておかないといけないのだと思いました。

僕の中で大事だと思っていることは、思いやりを持つこと。前向きに取り組むこと。周りをよく見ることだと、作文を考えているうちにそう思いました。そして、この3つの大事なことは介護だけでなく福祉において大切な事なんだと思いました。

「さまざまな工夫が…」

東高等学校 2年 波多 夢月

私は、小さい子どもから高齢者の方、妊婦さん、障がいを持っている人など、さまざまな人が暮らしやすいように作られているなと思います。ふくしにもたくさんの方がいます。

まず、1つ目は、バリアフリーについてです。バリアフリーについて知ったのは小学

校3年生の時です。実際に、目が見えない人、耳が聴こえない人、車いす生活をおくっている人と交流をし、説明を聞き、体験をしたことがあります。その時、バリアフリーをしている所が増えているが、不自由だと思ふことが多々あるとおっしゃっていたのを覚えています。たくさんの工夫はされているけど、不自由だと思つてほしくないなと思ひました。なぜなら、皆同じ人間だからです。皆が平等に生きていけるような世界になつてほしいと思ひます。

2つ目は、ボランティア活動です。ボランティア活動と聞いて、ふくしに入ると思つていない人の方が多いと思ひます。私もその一人でもありました。ふくしだと知つたのは中学の時でした。ボランティアにもさまざまな活動があります。例えば、みんなで使つていける公園や道路などのゴミを拾つたり、人助けをしたりと色々あります。

中学生の時、人助けをして感謝状を貰つたことがあります。いつも通り、部活から帰つてると、一人の男性が溝に落ちていて、助けを求めていました。その男性は目が見えず杖で確認していたけど、落ちてしまったと言つていました。車で横を通る人は見て見ぬふりで、その時私は2人でいましたが、持ち上がることができず…。血も出ていて、立ち上がれそうにないことを知り、周りに助けを求め大人の人と救出することが出来ました。助け終えた後、人の役に立つことの嬉しさ、支え合うことの大切さや、助けた男性、周りの大人の方々から「ありがとう」「頑張つたね」と声をかけてくださりとても気分が良くなりました。助け合いや、支え合いは、助けた側、助けられた側も良い気持ちで終えることが出来、とても嬉しく思ひます。

このように、ふくしにもたくさんのことがあり、誰もがやろうと思えば出来ることなのです。

私はふくしというのは、誰かのため、思いやり、支え合いなどが合わさつていてるものだと思います。一人ひとりが不自由なく、幸せな暮らしができる世の中になつてほしいと願つています。そのためにも、自分に出来ることを考え、誰かのために行動し少しでも役に立てれるようにしたいです。

「介護について」

東高等学校 2年 藤井 愛実

私がなぜ介護についての作文を書こうと思つたかという、まず、私は6年ほど前にいところ病になつてしまひ、その時に少しだけですが、介護をしたことがあつたからです。また、最近では少子高齢化が増えていて、介護を必要とする高齢者がたくさん増えているにも関わらず、その高齢者や障がいを持っている人たちの介護をする若者などがない、という事を、最近ニュースなどでたくさん見かけます。私たちのような若者は経験がなければ、介護とはどのような物で、どういったことをするのか全く知らないという人がほとんどだと思ひます。私は以前、母親たちと一緒にいところの介護を少しだけですが、経験したことがあるので、介護とはどう言つたものなのかという事や、介護の大変さなどは分かります。介護をする上で私は介護のきつさや介護をする人の負担が

とても大きいなととても強く感じました。少しだけ母親と一緒にしただけなのに、とてもつかれて、息がとても切れるような感じがしていました。

今の時代は、高齢者を支える・介護する人がとても少なくなっていると言われていきます。だから、一人への負担がとても大きくなってしまっているのではないかなと思います。周りに頼れる人たちがいないと、精神的にも身体的にもとてもつかれてしまう人が多くなってしまわないかなと思います。また、介護を必要とする人たちは高齢者だけでなく、私のいとこのように若者や子どもなどたくさんいます。だから、私たち一人ひとりが介護についての関心をしっかりと持ち、理解を深め介護とはどういうものか知り、いま私たちにできる最善のことを考えて行動に移していくことが本当に重要だと思います。でも、実際に介護に対してあまり前向きに考えている人は少ないと思います。ほとんどの人は、汚いやしんどい、めんどろなどのマイナスな感情を少なからず持っていると思います。だからそのようなマイナスなことだけではないという事を、しっかりと知ってもらおうということも介護人口を増やしていくためにとても大切になってくるのではないかなと強く思います。これから、介護に理解を深め、良いイメージを持ち、介護というものに対して興味を持ち、行動に移していくような人が増えていくと良いなと思います。

「福祉について」

東高等学校 2年 藤田 優愛

私は福祉にとっても興味があります。その理由はシンプルで、お年寄りの方が好きだからです。また、人のために動くことが得意でもあるので、高校に入るときにはマネージャーをすと決めていました。実際に私は、陸上部のマネージャーに所属して、しっかりサポートをしています。

この夏休み、福祉総合センターで行われた福祉の講座に参加しました。障がい者施設にリモートをつないで利用者さんと会話をしたり、施設の設備や介護をしている様子を見たりしました。実際に食事介助を行っているところや、リハビリをしているところなども動画で見ることができました。食事介助では、利用者さんによってやり方が違っていました。食事も液状のものや固体のもので違います。そこがまず工夫されているなと思いました。そして、すごいなと思ったのが、食べ物がのどを通りにくい人には、顔やあごの周りをマッサージしてあげていたところです。施設の設備では、機械でベッドから起き上がらせることのできるものがあつたりしました。技術はどんどん発展しているんだと感じさせられました。なかなか人の手だけでは難しいので便利な世の中になったと思います。

この講座を受けたことによって、今まで知らなかったことや気になっていたことが得られたと思います。利用者さん一人ひとりに合わせているところや、笑顔でいることを維持しているところがとてもいいなと思いました。福祉は大変な仕事かもしれないけれど、利用者さんの笑顔にやりがいを感じ、続けられているんだなと思います。私はまだ

進路が完全に決まっているわけではないけど、福祉の仕事は自分に合っていると思うので考えていこうと思っています。私が今、部活動としてやっているマネージャーの仕事は自分にあっていて、とてもやりがいを感じているので、同じように人をサポートする福祉の仕事もいいのかと思います。

「過ごしやすい社会」

東高等学校 2年 松岡 桃

私たちの周りには身近にバリアフリーというものがあります。バリアフリーとは、公共交通機関、道路、建物などにおいて、利用者に移動面で困難をもたらす物理的バリアのことです。街の中でみられるバリアフリーとは、階段や段差などを昇り降りすることが難しい方のためのスロープ、主に視覚に障がいのあるひとが移動や案内を受けるための音声案内、主に視覚に障がいのある人の移動や停止をサポートする点字ブロック、車いす利用者や足腰が弱い人でも快適に利用できるように作られたノンステップバスがあり、他にも、高齢者や障がい者だけでなく、妊娠中の方や小さな子どもといった様々な人にとっての障がいを取り除き、それぞれが生活しやすい設備や機能、システムなどを備えているバリアフリー住宅というものもあります。

私たちの身の周りにこんなにも多くのバリアフリーがあって驚きました。スロープや音声案内、点字ブロックのことは知っていたけど、ノンステップバスやバリアフリー住宅のことについては全く知りませんでした。すごく進化しているなと思いました。

私はあまり見たことはないけど、テレビなどで点字ブロックの上に自転車をとめたり、通りづらくなっていました。障がいのある人が少しでも過ごしやすいようにと作られたものなのに、健康な人たちがそんなことをしていると、さまざまな人が過ごしやすい社会にならないと思いました。

バリアフリーは進化して過ごしやすい状況になったとしても、健康な人たちが妨害をすると意味がないので、私は体が不自由な人たちが過ごしやすいようにしていきたいと思いました。例えば、電車だったら席を譲ったり、目の不自由な人が信号を渡ろうとしていたら一緒に渡ってあげたり、私たちは体の不自由な人たちを色々な所で支えてあげることができます。色々な人と協力をして、みんなが過ごしやすい社会を作っていきたいです。

「福祉から学んだこと」

東高等学校 2年 松木 優芽

私の母は介護福祉の仕事をしています。介護福祉の仕事は、施設に入所している利用者さんの身の回りのお世話や、日常生活のお手伝いをしています。

介護施設の仕事をしながら母は、利用者一人ひとりの施設に入所する前の生活とできるだけ同じにできるようにお手伝いすることを心掛けています。

今は、コロナウイルスの影響で母の仕事場に行くことができないけれど、約3年前、母の仕事場に行ったときに、職員たちが利用者一人ひとりに一生懸命向き合っている姿がとても印象に残りました。

一人ひとりの意見を尊重し、毎日どんなことをしたら利用者さんたちに楽しんでもらえるか考えていました。

また、職員全員のチームワークにとっても驚きました。

その日にあった出来事を共有して、人それぞれの得意、不得意を助け合い、利用者一人ひとりを理解し、仕事ひとつひとつを協力し合いながらおこなっていました。

私はある1人の利用者さんにいわれた言葉が今も心に残っています。

「あなたのお母さんはいつも私たちに優しくしてくれて本当にありがたい。あなたもお母さんみたいに誰かを助けられるような人になってね」と言ってもらえて、その時は自分の母がいつも誰かの役に立っていることを教えてもらうことができ、とてもうれしい気持ちになりました。

今後も福祉についてより関心を持ち、将来は母みたいに思いやりをもって誰かのために行動することができるように、これからも努力していきたいです。

そして、これからも母の「介護福祉」という仕事をもっと知り、コロナウイルスがおさまり、母の仕事場に行くことができるようになったら私も利用者さんのためにできることを考えていきたいと思いました。

「福祉について」

東高等学校 2年 森 柊人

僕は、これまであまり福祉について考える機会が少なく、この作文を書く前に調べてみました。すると福祉とは、しあわせ、幸福、特に生活の安定や充足、また、人々の幸福で安定した生活を公的に達成しようとする、と書いていました。難しい言葉ばかりでよくわからなかったけど、よく福祉関係のニュースなどを見ると、介護職の人達は福祉関係でよく聞きます。よく見る介護職のニュースでは、職員の人が障がい者や老人の介護でストレスを感じて介護者に対して暴力をふるったり、介護疲れによって自殺をしてしまったというニュースをよく聞きます。福祉の仕事の関係のニュースであまりいい話を聞きません。それだけ介護の仕事は大変だし難しいことなんだなとニュースを見たり聞いたりして思います。

他にも調べると保育士も福祉の仕事でした。保育士が福祉の仕事だという事は、知らなかったのが驚きました。でも考えてみれば両親が働いている子供の世話をしたりするという点では、最初に調べた、生活の安定や充足という点で当てはまっているのかなと思います。介護士に比べ身の周りのお世話をする対象が老人、身障者から子どもに変わっただけだと思えば、なるほどなと思いました。

自分は4人兄弟の長男で一番下の妹とは、10才も離れていてよく一緒に遊んだりしたりお世話をしたりしています。少しお世話をするだけでも、大変だと感じてしまうのに、それを仕事でしている保育士の方はとてもすごいなと思うし、頑張ってもらいたいなと思います。

調べてみると福祉の仕事は人のことをサポートする仕事なんだなと思いました。自分は、おばあちゃんっ子でよくおばあちゃんの家遊びに行ったりするので、自分にも当てはまる事があるなと思います。自分のおばあちゃんももしケガや老化、病気で動けなくなったりしたら自分が大変だと思うけどしっかりとお世話や介護をしたいなと思います。また兄弟達のお世話も長男としてしっかりとしていきたいなと思います。

「福祉の大切さについて」

東高等学校 2年 森賀 來寿

私は小学生の時に特別支援学校に訪問にいきました。訪問した時にドッチビーや折り紙を作ったりしました。その時思ったことは、私たちと特別支援学校の人は仲良くできるんだなと思いました。私たちのクラスはあんまりまとまっていなかったので、少し心配でしたがトラブルがなくてよかったと思っています。

私は中学校の時に人権の勉強をしている時に差別という言葉を知って普通の人と変わった人の中で差別がずっとあると聞いてから少しビックリしました。差別を無くす為に自分はどのような行動をとるべきか考えたりするようになりました。

私の母は介護の仕事をしています。高齢者の人を支えるのがとてもしんどいことを知っています。でも、やりがいがあって良い仕事だと言っていました。介護と言うのは命を預かっているのです、少しの失敗が許されません。なので一人ひとり命を預かっている責任を持つことが大切だと思います。介護職員の内容についてはお風呂やオムツ替えや食事介助という内容らしく、大変だなぁと思います。私が思ったことは、やっぱり笑顔やありがとうという言葉がうれしいんだと思います。けど、人間関係などで職員達の空気が悪くなったりすると思うので気を使える心の広い人が介護をしたら素晴らしいとか、この高齢者施設に来てよかったなど思えるようになって欲しいです。一度、ニュースで介護施設で暴力をした人が流れていたのが酷いと思いました。私は8月2日の火曜日の新居浜市総合福祉センターの体験に行くことができなかったのですが、介護に詳しい母さんに聞いてみようと思います。もし、ボランティアで福祉があったら積極的に参加をしたりして、福祉のことを少しずつ理解を深めようと思っています。

最後に言いたいことがあります。1つは外に迷っている高齢者を見かけたら声をかけて案内をして欲しいです。人は少しの気遣いを積極的にすることが大切だと思いました。

「ボランティアから学んだこと」

東高等学校 2年 守谷 咲愛

私は夏休みの間、「学習支援ボランティア」に参加していました。このボランティアは障がいを持っている小学生から高校生の子に勉強を教えていて、他にも一緒に遊んだりしていました。私がボランティアに行っていたところは「にじいろぱんだ」というところで、小学生から高校生の子が利用しています。「にじいろぱんだ」は放課後等デイサービスをしていて、自立課題や野菜を育てたり、海などに行ったりして障がい者の笑顔あふれる環境づくりを目指し、支援しているそうです。

放課後デイサービスの目的は、障がいを持っている子どもたちの自立する力を引き出すことや、障がいを持っている子が集団生活がきちんとできるようにすることです。このために放課後デイサービスは、生活能力向上のための訓練と、社会との交流促進等を継続的に提供するサービスをしています。他にも保護者支援もあります。放課後デイサービスは、健常者のいる学童や児童クラブなどの場に馴染むのが難しい子どもや、その保護者の居場所を確保・サポートする役割も担っています。

私はボランティアに行き、障がいを持っている子どもたちとほとんど変わらないと思いました。勉強を教えるとききちんと分かってきて、たまに先生達のことを聞けなかったり、物を壊したりするときもあったけど、みんなで遊ぶときに自分からみんなの意見をまとめて、遊ぶものを決めてくれる子やパソコンでいろいろなものを作れる子などもいました。障がいを持っている子どもたちが私たちと同じように集団生活ができるのは、放課後デイサービスの職員の方たちのおかげだと思いました。

私はいままで障がいを持っている人と関わる機会がありませんでした。ですがこのボランティアで障がいを持つ子と関わって、自分が思っていた障がい者と違うと思いました。私の考えだけで人のことを決めるのは良くないと改めて思いました。障がいを持っていても私たちとほとんど変わらないということがわかりました。学習支援ボランティアに参加して本当によかったなと思いました。

「高齢者へのサポート」

東高等学校 2年 横田 永遠

今は高齢者人口が異様に多い特殊な時代です。

しかしながら、高齢者に対しサポートする施設は、高齢者が少なかった時期からあまり増えておらず、足りないのではないかと考えています。

高齢者へのサポートで一番必要だと思うのは、老人ホームです。

老人ホームの職員は数が足りず厳しい業務をしている現状があります。

老人ホームの現状を改善するためには2つの方法があると思います。

ひとつ目は職員さんの給金を上げることです。

今の老人ホーム職員は、少ない給料で厳しい業務をしています。しかし、給料が上が

ることによって人が増えると、結果的に仕事が楽になることも考えられます。

2つ目は自宅でも高齢者の介護を行えるようにすることです。

自宅で介護できる環境を作れば、老人ホームに入る人も少なくなり、職員の苦労は軽減されるのではと考えます。

時間が経つほど、高齢者は増え続けていくので、早く解決する方法を決めてもらいたいと思いました。

「ふくしについて」

東高等学校 2年 渡部 成斗

僕は、この作文を書くにあたって、高齢者福祉に目を向けて調べてきました。調べてきた中で、介護保険制度に関するものが一番目についたので取り上げました。まず、介護保険制度とはどういうものなのかというと、65歳以上の高齢者、または40～64歳の特定疾病患者のうち介護が必要になった人を社会全体で支える仕組みのこと。簡単に言えば、介護が必要になった高齢者などに対して、皆で保険料を負担して、必要な方に給付する仕組みのことです。40歳になると介護保険に加入することが義務付けられており、保険料を支払うこととなります。また、介護保険組合によって異なります。さらに医療保険と同じように被扶養配偶者は収める必要がありません。国民健康保険に加入している方の場合は、所得割と均等割、平等割、資産割の4つを自治体の財政により独自に組み合わせて計算され、介護保険率も異なります。所得割は世帯ごとに被保険者の前年の所得に応じて算出されます。65歳以上の被保険者は、原則として年金からの天引きで市区町村が徴収します。しかし、介護設備状況や要介護者の人数など、自治体によってさまざまなので、自治体ごとに金額が違います。負担が大きくなりすぎないように、また、低所得者の保険料軽減のために国の調整交付金が使われています。

このようなことから、介護保険制度で利用できるサービスはたくさんあって、訪問介護や生活援助、身体介護や訪問リハビリテーションなど他にもありますがさまざまなサービスを受けることができます。

僕は、今回この作文を書くにあたってふくしのことはあまり知らなかったのですが、これを機にたくさんの物事を知れたのでとてもよかったです。将来、ふくし関係の仕事に関わることもあるかもしれませし、自分もいずれは関わらないといけないので、これからも知る機会があればまた調べたいと思います。